

史跡出雲国府跡

- 6 -

2009年3月

島根県教育委員会

序

出雲国府跡は、昭和43～45年（1968～1970）の松江市教育委員会・奈良国立文化財研究所・鳥根県教育委員会による発掘調査で所在地が確定されました。昭和46年（1971）には約42万㎡におよぶ広大な範囲が国史跡に指定され、その一部が史跡公園として整備されています。今日まで市民の憩いの場として親しまれるだけでなく、県内外から多くの観光客が訪れるところとなっています。また、出雲国府跡のある意宇平野には条里制を残した美しい水田地帯が広がっています。古代・中世から現代まで、ひとびとの営みのなかで残されてきた全国的にも貴重な景観といえます。

鳥根県教育委員会では、この史跡出雲国府跡を保存活用するため、平成11年度（1999）から継続的に調査を実施しています。

平成19年度（2007）からは、「国司の館」の一角と想定されている、史跡公園北寄りの範囲を対象に調査を開始いたしました。狭い面積の調査ではありましたが、新たに建物跡や溝跡のほか性格不明の井桁状遺構が見つかりました。こうした成果を積み上げていくことで、国司の館の施設配置や変遷が徐々に明らかになっていくものと考えています。

本書には、こうした成果を中心に、平成18～19（2006～2007）年度に実施した発掘調査成果を取りまとめています。

本書が、今後の出雲国府研究はもとより、当地域の歴史像を解明するうえで一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたって多大な御支援と御協力を賜りました地元住民、奈良文化財研究所、松江市教育委員会、関係各位に心より感謝申し上げます。

平成21年3月

鳥根県教育委員会教育長

藤原義光

例言

1. 本書は鳥根県教育委員会が2006（平成18）年度から2008（平成20）年度に国庫補助事業として実施した風土記の丘地内遺跡発掘調査事業の報告書である。

2. 本書に掲載した遺跡の所在地は、下記のとおりである。

史跡出雲国府跡 松江市大草町512-1番地外

3. 調査組織は以下のとおりである。

出雲国府跡発掘調査調査指導委員会

蓮岡法暲（鳥根県文化財保護審議会委員）、金田章裕（人間文化研究機構長）、井上寛司（鳥根県大学名誉教授）、佐藤信（東京大学大学院教授）、大橋泰夫（鳥根県大学教授）、花谷浩（出雲市文化観光部次長）、清水重敦（奈良文化財研究所文化遺産部研究員）、

指導助言 文化庁 清野孝之（文化財調査官 平成18年度）、福宜田佳男（同 平成19年度）

事務局 卜部吉博（文化財課長）、佐藤正範（同文化財グループリーダー）、林健亮（同主幹）、池淵俊一（同企画員）、是田敦（同文化財保護主任）

川原和人（教育庁埋蔵文化財調査センター副所長）、赤山治（同総務グループ課長）、宮澤明久（同調査第1グループ課長）

調査員 林健亮（埋蔵文化財調査センター第1グループ主幹 平成18年度）、間野大丞（同文化財保護主任）、守岡正司（同 平成19年度）、神柱靖彦（同 平成20年度）、人見麻生（同調査補助員 平成18・20年度）、中野萌（同 平成19年度）

調査指導、協力機関・協力者

文化庁、奈良文化財研究所、鳥根県立八雲立つ風土記の丘、鳥根県古代文化センター、鳥根県立古代出雲歴史博物館、松江市教育委員会、松江市大庭公民館、松江市竹矢公民館、神魂神社、六所神社、中村唯史（鳥根県立三瓶自然館主任学芸員）、平尾政幸（（財）京都市埋蔵文化財調査研究所総括主任）、藤澤良祐（愛知学院大学文学部教授）、町田章（鳥根県文化財保護審議会会長）、松井章（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター環境考古学研究室長）

4. 遺構の掲載は次のとおりとした。

(1) 遺跡分布図は国土地理院発行のものを編集して作成した。また、遺跡周辺の地形図は鳥根県教育委員会で作成した風土記の丘地内の1:1,000地形図をもとに作成した。

(2) 挿図中の方は旧測地系の第Ⅲ座標系X軸方向を指しており、磁北より7°12'、真北より0°32'東の方向を指している。また、調査に使用した座標は、過去の調査との関連から旧測地系を使用した。第3章・第4章掲載図面の方は図面作成時に設けた基線の北を指している。

(4) 単独の遺構、土層図は原則として縮尺1/60とした。

(3) 1968～1970年度調査以外の図面は、埋蔵文化財調査センター調査員が作成した。

5. 遺物の掲載は次のとおりとした。
 - (1) 土器の縮尺は原則として1/3、一部を1/6とした。
 - (2) 瓦類の縮尺は、軒瓦を1/3、そのほかは原則として1/4、一部を1/3とした。
 - (3) 実測図は各年度の調査員のほか、平成20年度調査第1グループ調査補助員が作成した。

6. 1968～1970年度調査における調査区の設定は次のとおりである。

各地区に3m方眼を割り付け、方眼には、東西方向にアラビア数字、南北方向にアルファベットを付してある。方眼名は、その南東交点を基準に命名されている。さらに方眼名の頭に、地区名のアルファベットを付け呼称している。(例)宮の後C区J20 → 宮の後CJ20

7. 遺構・遺物の写真は島根県埋蔵文化財調査センター調査員が撮影した。遺物写真のうち墨書土器は島根県古代文化センター2003『山陰古代出土文字資料集成』の図版を参照いただきたい。

8. 『史跡出雲国府跡1～5』の図を引用する場合は、挿図番号の頭に1～5を付け、以下、枝番号としている。(例)『史跡出雲国府跡1』第123図34 → 1-123-34

9. 本書に掲載した出土遺物のうち、所蔵先を特に明記していないものは全て島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10. 本書の編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て、間野大丞、神柱靖彦、中野萌、人見麻生が行った。

本文目次

第1章 史跡出雲国府跡の位置とこれまでの調査	1
第1節 歴史的環境	1
第2節 出雲国府跡のこれまでの発掘調査	2
第3節 出雲国府跡周辺の調査状況	5
第4節 出雲国府跡と周辺遺跡の資料	8
第2章 2006～2007年度の発掘調査	11
第1節 範囲確認調査	11
第2節 宮の後地区の調査	26
第3章 1972～1974年度環境整備事業に伴う調査他	43
第1節 はじめに	43
第2節 1972～1974年度環境整備事業に伴う調査	43
第3節 1974年度推定枉北道の調査	69
第4節 1989～1990年度土地改良総合整備事業に伴う調査	71
第4章 1968～1970年度調査の補遺と再検討	75
第1節 土器類・文字関連資料他	75
第2節 瓦類	86

挿 図 目 次

(第1章)			
第1図	史跡出雲国府跡と周辺の遺跡等位置図	・・・	1
第2図	史跡出雲国府跡調査区と周辺の遺跡位置図	・・・	3
第3図	史跡出雲国府跡調査区位置図	・・・	4
第4図	恩田清氏採集遺物実測図	・・・	6
第5図	周藤国実氏採集遺物実測図	・・・	8
第6図	出雲国府跡採集遺物実測図	・・・	8
第7図	出雲国府跡周辺の遺跡出土・採集遺物実測図	・・・	9
第8図	神境神社所蔵遺物実測図	・・・	10
(第2章)			
第9図	第46トレンチ実測図	・・・	11
第10図	第46トレンチ出土遺物実測図	・・・	12
第11図	第47・49トレンチと昭和調査区の位置	・・・	13
第12図	第47トレンチ実測図	・・・	14
第13図	第47トレンチ出土遺物実測図(1)	・・・	13
第14図	第47トレンチ出土遺物実測図(2)	・・・	14
第15図	第47トレンチ出土遺物実測図(3)	・・・	17
第16図	第49トレンチ実測図	・・・	18
第17図	六所脇I区東壁土層断面図	・・・	18
第18図	第49トレンチ出土遺物実測図	・・・	19
第19図	第50トレンチ実測図	・・・	20
第20図	第51トレンチ実測図	・・・	22
第21図	第50・51トレンチ出土遺物実測図	・・・	23
第22図	堂田地区12号井戸出土木製品実測図	・・・	25
第23図	宮の後地区遺構配置図	・・・	26
第24図	宮の後地区土層断面図	・・・	27
第25図	宮の後地区旧水田耕作土下の遺構実測図	・・・	25
第26図	宮の後地区21号建物跡実測図	・・・	26
第27図	宮の後地区70号溝実測図	・・・	27
第28図	宮の後地区70号溝出土遺物実測図	・・・	31
第29図	宮の後地区71号溝実測図	・・・	32
第30図	宮の後地区71号溝出土遺物実測図	・・・	33
第31図	宮の後地区并桁状遺構土層断面図	・・・	34
第32図	宮の後地区并桁状遺構実測図	・・・	35
第33図	1969年度調査宮の後地区并桁状遺構実測図	・・・	36
第34図	宮の後地区并桁状遺構及び整地出土遺物実測図	・・・	37
第35図	宮の後地区灰色砂利層はか出土遺物実測図	・・・	38
第36図	宮の後地区出土瓦実測図(1)	・・・	39
第37図	宮の後地区出土瓦実測図(2)	・・・	40
(第3章)			
第38図	環境整備事業1974年度調査遺構実測図(1)	・・・	44
第39図	環境整備事業1974年度調査遺構実測図(2)	・・・	45
第40図	環境整備事業土層断面図(1)	・・・	46
第41図	環境整備事業土層断面図(2)	・・・	47
第42図	北側素掘溝出土遺物実測図(1)	・・・	48
第43図	北側素掘溝出土遺物実測図(2)	・・・	49
第44図	北側素掘溝出土遺物実測図(3)	・・・	50
第45図	北側素掘溝出土遺物実測図(4)	・・・	51
第46図	北側素掘溝出土遺物実測図(5)	・・・	52
第47図	東西溝復元工事出土遺物実測図(1)	・・・	53
第48図	東西溝復元工事出土遺物実測図(2)	・・・	54
第49図	東西溝復元工事出土遺物実測図(3)	・・・	55
第50図	東西溝復元工事出土遺物実測図(4)	・・・	56
第51図	東西溝復元工事出土遺物実測図(5)	・・・	57
第52図	東西溝復元工事出土遺物実測図(6)	・・・	58
第53図	東西溝復元工事出土遺物実測図(7)	・・・	59
第54図	東西溝復元工事出土遺物実測図(8)	・・・	60
第55図	東西溝復元工事出土遺物実測図(9)	・・・	61
第56図	東西溝復元工事出土遺物実測図(10)	・・・	62
第57図	南北溝復元工事出土遺物実測図(1)	・・・	63
第58図	南北溝復元工事出土遺物実測図(2)	・・・	64
第59図	南北溝復元工事出土遺物実測図(3)	・・・	65
第60図	南北溝復元工事出土遺物実測図(4)	・・・	66
第61図	環境整備事業出土遺物実測図	・・・	61
第62図	1975年度調査区土層断面図	・・・	62
第63図	1989年度調査区遺構実測図	・・・	73
第64図	1990年度調査区土層断面図	・・・	74
(第4章)			
第65図	樋ノ口・一貫尻・六所脇地区出土遺物実測図	・・・	75
第66図	宮の後A区出土遺物実測図	・・・	76
第67図	宮の後B区出土遺物実測図	・・・	77
第68図	宮の後C区出土遺物実測図(1)	・・・	78
第69図	宮の後C区出土遺物実測図(2)	・・・	79
第70図	1968～1970年度調査地区不明出土遺物実測図	・・・	80
第71図	宮の後A・B区出土瓦実測図	・・・	81
第72図	宮の後C区・地区不明出土及び1981年採集遺物実測図	・・・	82
第73図	硯及び同間跡・木釀出土地点	・・・	83
第74図	宮の後地区出土墨書・刻書土器実測図	・・・	84
第75図	1968～1970年度調査出土陶磁器実測図	・・・	85
第76図	1968～1970年度調査軒瓦出土地点	・・・	87
第77図	1968～1970年度調査出土軒瓦実測図(1)	・・・	88
第78図	1968～1970年度調査出土軒瓦実測図(2)	・・・	89
第79図	1968～1970年度調査出土軒瓦実測図(3)	・・・	90

第80回	1968～1970年度調査出土軒瓦実測図 (4)	91
第81回	1968～1970年度調査出土軒瓦実測図 (5)	92
第82回	1968～1970年度調査出土軒瓦実測図 (6)	93
第83回	1968～1970年度調査出土軒瓦実測図 (7)	94
第84回	1968～1970年度調査出土軒瓦実測図 (8)	94
第85回	1968～1970年度調査出土軒瓦重量分布	96
第86回	1968～1970年度調査出土丸瓦重量分布	97
第87回	平瓦の凸面成形分類 (1)	100
第88回	平瓦の凸面成形分類 (2)	101
第89回	1968～1970年度調査出土平瓦実測図 (1)	102
第90回	1968～1970年度調査出土平瓦実測図 (2)	103
第91回	1968～1970年度調査出土丸瓦実測図 (1)	104

第92回	1968～1970年度調査出土丸瓦実測図 (2)	105
第93回	1968～1970年度調査出土丸瓦実測図 (3)	106
第94回	1968～1970年度調査出土丸瓦実測図 (4)	107
第95回	1968～1970年度調査出土製斗瓦実測図 (1)	109
第96回	1968～1970年度調査出土製斗瓦実測図 (2)	110
第97回	1968～1970年度調査出土製斗瓦実測図 (3)	111
第98回	1968～1970年度出土隅切平瓦・鬼瓦・鴉尾 実測図	112
第99回	1981年大舎原地区採集軒瓦・博実測図	113
第100回	恩田清氏採集軒瓦実測図	113
第101回	南北溝復元工事出土遺物実測図 (5)	118

表 目 次

(本文)

第1表	恩田清氏採集資料一覧表	7
第2表	周藤国実氏採集資料一覧表	7
第3表	出雲国府跡地区別視出土点数	84
第4表	出雲国府跡軒瓦等の出土点数一覧表	86
第5表	瓦類1968～1970年度調査区別分布	95
第6表	一枚作り平瓦の凸面成形による分類	99
第7表	六所脇・宮の後地区の丸・平瓦の比率	115
第8表	地区別の瓦類変遷	115
第9表	出雲国府の格子タタキと他の消費地・瓦窯 との対応表	116

(観察・集計表)

第10表	六所脇I区出土瓦類集計表	119
第11表	六所脇J区出土瓦類集計表	119
第12表	宮の後A区出土瓦類集計表	120
第13表	宮の後B区出土瓦類集計表	120
第14表	宮の後C区出土瓦類集計表	121
第15表	宮の後D区出土瓦類集計表	121
第16表	宮の後J区出土瓦類集計表	122
第17表	一貫尻地区出土瓦類集計表	122
第18表	樋ノ口地区出土瓦類集計表	123
第19表	調査区不明出土瓦類集計表	123
第20表	2007年度宮の後地区出土瓦集計表	124
第21表	2006年度宮の後地区第46トレンチ出土瓦 集計表	124
第22表	2006～2007年度出土瓦類調査区別分布	125
第23表	平瓦凸面成形分類基準資料	126
第24表	「出雲国府跡1～5」軒瓦一覧表	126
第25表	恩田清氏・周藤国実氏採集遺物観察表	127
第26表	出雲国府跡採集筋瓦石観察表	127

第27表	出雲国分寺跡ほか出土遺物観察表	127
第28表	神魂神社所蔵(鼎寄託)資料観察表	127
第29表	2006～2007年度調査出土遺物観察表	128
第30表	2006～2007年度調査出土石製品・玉作関係 遺物観察表	133
第31表	2006～2007年度調査出土金属器生産関係 遺物観察表	133
第32表	2006～2007年度調査出土銭貨観察表	133
第33表	堂田地区12号井戸出土木製品観察表	133
第34表	2006～2007年度調査出土玉作関係遺物 石材別・製作段階別集計表	134
第35表	2006～2007年度調査出土陶磁器分類表	135
第36表	1972～1974年度環境整備事業出土遺物 観察表	136
第37表	1974年度環境整備事業出土銭貨観察表	143
第38表	1972～1974年度環境整備事業出土陶磁器 分類表	143
第39表	1973～1975年度環境整備事業出土玉作 関係遺物石材別集計表	143
第40表	1968～1970年度調査ほか出土遺物観察表	144
第41表	1968～1970年度調査出土硯観察表	149
第42表	1968～1970年度調査出土陶磁器分類表	150
第43表	1968～1970年度調査出土玉作関係遺物 石材別・製作段階別集計表(補遺)	151
第44表	1968～1970年度調査出土金属器生産関係 遺物観察表	151
第45表	2006～2007年度調査出土金属器生産関係 遺物集計表	151
第46表	1972～1974年度調査環境整備事業出土瓦類 集計表	152

写真図版目次

図版1	第46トレンチ (東から) 第46トレンチ 70号溝 (西から) 第46トレンチ 70号溝土層断面 (北西から)	図版16	第46トレンチ出土遺物 第47トレンチ出土遺物
図版2	第47トレンチ (北東から) 第47トレンチ東壁土層断面 (北西から) 第47トレンチ昭和調査区 (北東から)	図版17	第47トレンチ土坑出土遺物 第47トレンチ土坑出土遺物
図版3	第49トレンチ (東から) 第49トレンチ SB019柱穴断面 (南西から) 第49トレンチ (北から)	図版18	第49トレンチ出土遺物 第50・51トレンチ出土遺物
図版4	第50トレンチ (南から) 第50トレンチ 2号溝 (南から) 第50トレンチ木柱設置穴 (北東から)	図版19	第50・51トレンチ出土遺物 堂田地区12号井戸出土土製品
図版5	第51トレンチ (西から) 第51トレンチ62号溝遺物出土状況 (北西から) 第51トレンチ62号溝遺物出土状況 (北西から)	図版20	宮の後地区71号溝出土遺物 宮の後地区72号溝出土遺物
図版6	第51トレンチ土層断面 (南西から) 第51トレンチ土坑検出状況 (南東から) 第51トレンチ溝検出状況 (北東から)	図版21	宮の後地区出土土器
図版7	調査区全景 (西から) 70号溝・21号建物跡 (西から)	図版22	宮の後地区出土瓦
図版8	井桁状遺構 (1968年度調査区再発掘 西から) 井桁状遺構 (北東から)	図版23	宮の後地区出土瓦 宮の後地区出土土器
図版9	21号建物跡P1 21号建物跡P2 21号建物跡P3	図版24	一貫尻地区出土軒平瓦
図版10	21号建物跡P4 21号建物跡P5 21号建物跡P6	図版25	宮の後・大倉原地区出土軒瓦
図版11	灰色砂利層上面 (北東から) 70号溝 (西から) 70号溝遺物出土状況 (北から)	図版26	宮の後地区出土軒丸瓦丸瓦部
図版12	70号溝c-dライン西 (北東から) 70号溝e-fライン (南西から) 70号溝e-fライン土層断面 (南西から)	図版27	宮の後地区出土軒丸瓦丸瓦部
図版13	井桁状遺構 (南東から) 井桁状遺構 W16ライン南北方向溝 (南から) 井桁状遺構 W16ライン南北方向溝 (北西から)	図版28	宮の後地区出土軒丸瓦丸瓦部・平瓦
図版14	井桁状遺構・整地土遺物出土状況 (北西から) 井桁状遺構a-bライン遺物出土状況 (南西から) 井桁状遺構a-bライン遺物取り上げ後 (南西から)	図版29	宮の後・大倉原地区出土土瓦
図版15	71号溝 (南から) 71号溝e-fライン土層断面 (南西から) 71号溝a-bライン土層断面 (東から)	図版30	宮の後地区出土有段式丸瓦 宮の後地区出土有段式丸瓦
		図版31	宮の後地区出土丸瓦・六所脇地区出土製斗瓦
		図版32	宮の後地区出土隅切平瓦・竈尾、六所脇地区 出土隅切平瓦・鬼瓦
		図版33	環境整備事業出土土器
		図版34	環境整備事業出土瓦
		図版35	環境整備事業出土鏡 環境整備事業出土軒丸瓦
		図版36	環境整備事業出土瓦・土器
		図版37	環境整備事業出土土器
		図版38	環境整備事業出土土器
		図版39	環境整備事業出土土器・瓦
		図版40	環境整備事業出土瓦
		図版41	格子タタキ1 格子タタキ2
		図版42	格子タタキ3 格子タタキ4
		図版43	格子タタキ5 格子タタキ6
		図版44	格子タタキ7 格子タタキ8
		図版45	格子タタキ9

格子タタキ10
図版46 格子タタキ11
格子タタキ12
図版47 格子タタキ13
格子タタキ14
図版48 格子タタキ15
格子タタキ16

図版49 格子タタキ17
格子タタキ18
図版50 格子タタキ19
格子タタキ20
図版51 格子タタキ21
桶巻き作り平瓦

本文写真目次

写真1	1989年度調査A地点満	72	写真3	1989年度調査B地点満完掘状況	72
写真2	1989年度調査B地点満検出状況	72	写真4	泥糸盤築技法の丸瓦	118

既報告一覧

〔史跡出雲国府跡1〕 島根県教育委員会2003
〔史跡出雲国府跡2〕 島根県教育委員会2004
〔史跡出雲国府跡3〕 島根県教育委員会2005

〔史跡出雲国府跡4〕 島根県教育委員会2006
〔史跡出雲国府跡5〕 島根県教育委員会2008

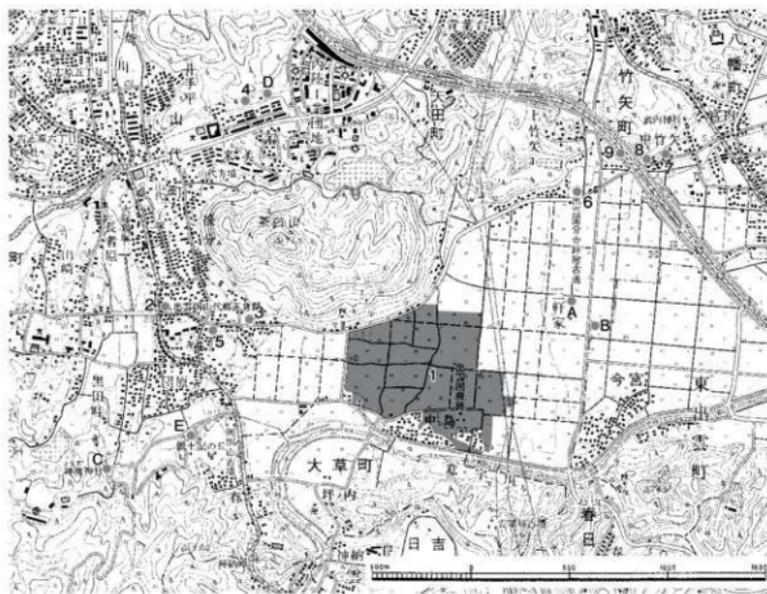
第1章 出雲国府跡の位置とこれまでの調査

第1節 歴史的環境（第1図）

国の東の界より西に去くこと二十里百八十歩にして野城橋に至る。・・・(中略)・・・又西二十一里にして国庁、意宇郡家の北なる十字街に至り、即ち分かれて二つの道となる。(一つは正西道、一つは枉北道なり。)

天平5(733)年に編纂された『出雲国風土記』には、出雲国府跡についてこのように記されている。これにより、国庁と意宇郡家は同所にあり、その北側に正西道(山陰道)と枉北道(隠岐への官道)が交わる十字街があったと解釈されている。また、『出雲国風土記』には、黒田駅家・意宇軍団も郡家と同所に置かれていたと記されている。

出雲国府跡を中心とする一帯は、文献と遺跡を総合的に研究できる全国的にも貴重な地域である。周辺には、山代郷正倉跡、同北新造院跡(米美庵寺)や同南新造院跡(四王寺跡)の『出雲国風土記』に登場する遺跡が確認されている。南新造院跡の瓦窯跡も小無田Ⅱ遺跡で見つかっている。また、出雲国府の北東、意宇平野の丘陵裾部には、出雲国分寺、国分尼寺が所在し、両寺に伴う瓦窯も出雲国分寺瓦窯、中竹矢遺跡で確認されている。



第1図 史跡出雲国府跡と周辺の遺跡等位置図 (S=1:25,000)

1. 出雲国府跡
2. 出雲国山代郷遺跡郡北新造院跡 (米美庵寺)
3. 山代郷南新造院跡 (四王寺跡)
4. 出雲国山代郷遺跡郡北新造院跡 (米美庵寺)
5. 山代郷南新造院跡 (小無田Ⅱ遺跡)
6. 出雲国分寺跡附古道
7. 出雲国分寺跡
8. 出雲国分寺瓦窯跡
9. 中竹矢遺跡 A三軒家 B客ノ森 C神鹿神社 D米美東古墳群南儀 E風土記の丘駐車場横

第2節 出雲国府跡のこれまでの発掘調査（第2回～第3回）

史跡出雲国府跡で最初の発掘調査がおこなわれてから約40年が経った。以下、これまでの発掘調査を事業・年度別にみていく。あわせて本書に掲載した報告についても触れておく。

1968～1970（昭和43～45）年度の調査 松江市教育委員会と鳥根県教育委員会、奈良国立文化財研究所がおこなった。調査の結果、六所脇地区・宮の後地区では政庁後殿と推定される四面廂大型建物や整然と並んだ掘立柱建物、これらを区画する大溝などが検出された。また、文書行政がおこなわれたことを示す硯・墨書土器・木簡なども出土し、国庁と特定された。このほか、国府城の把握を目指して水垣地区、樋ノ口地区、一貫尻地区でも調査が行われている。水垣地区では遺構は確認されなかった。樋ノ口地区では、金属器生産関係の工房と考えられる遺構を検出した。一貫尻地区では石敷遺構などが検出され、東に存在する官舎遺構の西端にあたる可能性が指摘された。3ヶ年にわたる調査の成果をもとに、1971年12月13日付け文部省告示第213号で、約41万㎡が国史跡として指定されている。調査報告は『史跡出雲国府跡5』として刊行されているが、今回、第4章に補遺を掲載した。

1972～1974（昭和47～49）年度環境整備事業 この事業は、1971年度に土地の公有化がなされた10,480㎡を対象としておこなわれた。事業2年目におこなわれた東西・南北二つの素掘溝の復元工事中にまとまって遺物が採集された。そのため3年目におこなった北側素掘溝の復元にあたっては工事と平行して発掘調査が行われた。このときの調査は「少目」の墨書土器が出土したことで知られている。報告書は刊行されていたが、今回、第3章第2節で補正作業の結果を収録した。

1974（昭和49）年度調査 枉北道と推定される市道に水道管を埋設する計画があり、鳥根県文化財愛護協会が事前に発掘調査を4ヶ所でおこなっている。調査報告を第3章第3節に収録した。

1985～1990（昭和60～平成元）年度土地改良総合整備事業 史跡地内の水路・農道改良などの農業基盤整備にともない発掘調査がおこなわれた。対象地は広範囲に及んだが、面積は限られ、調査は細長い調査区内での限定的なものとなった。遺構はほとんど検出されず、遺物を僅かに採集した程度である。このときの調査では、史跡周辺の踏査・分布調査も併せて実施されている。1989年度に正西道推定線にあたるA地点・B地点でおこなった調査と翌1990年度調査（29号水路）について、第3章第4節に収録した。

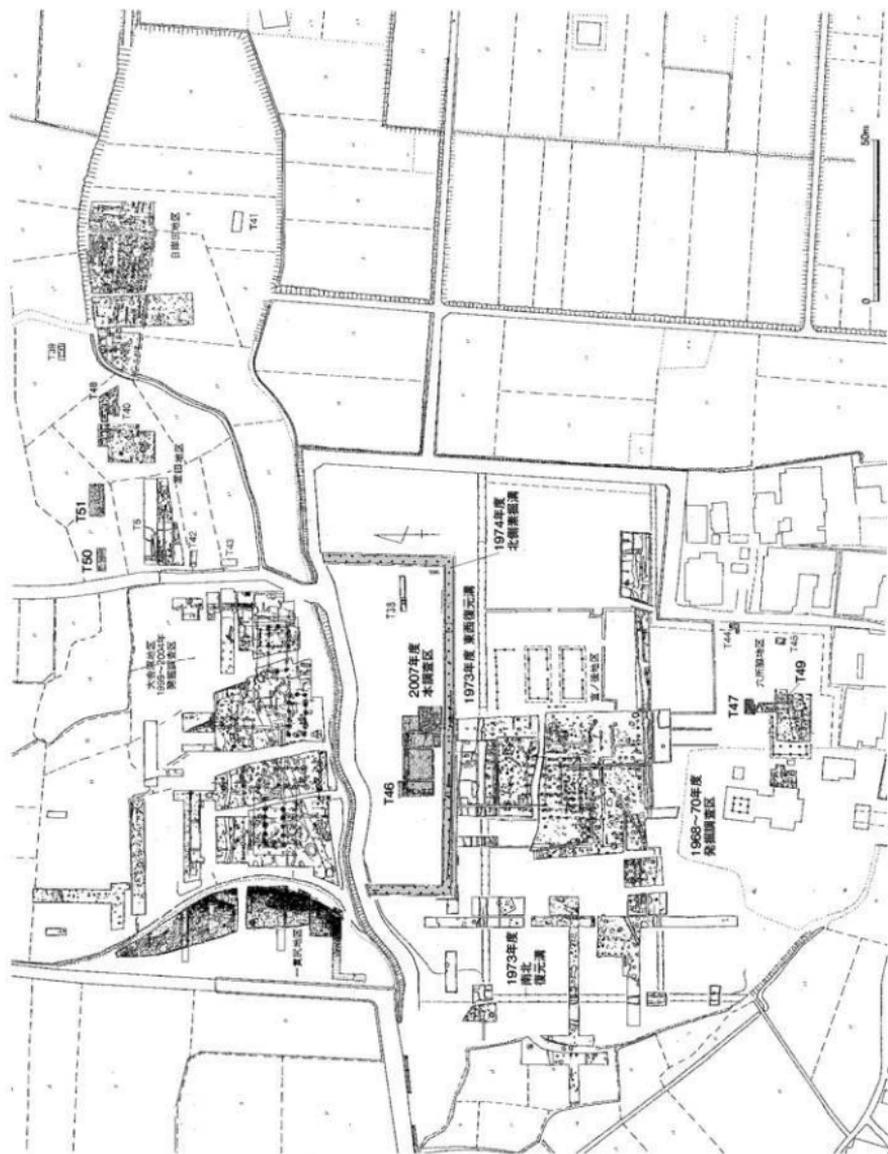
1991（平成2）年度以降の調査 松江市教育委員会が、1996・1997年度に個人住宅建設にともない史跡公園西側で調査をおこなっているが、遺構は確認されていない。同じく松江市教育委員会が1993・1996年度に六所神社南東側の市道拡幅工事にともなって調査をおこなっている。調査では、橋脚の可能性がある遺構が検出しており、注目される。

1999（平成11）年度以降の調査 鳥根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）が本格的な調査を再開した。今年度で10年目を迎える。1999～2003年度はおもに大舎原地区で調査をおこない、国司館と推定される施設群を検出した。2002～2003年度は、西側の一貫尻地区を対象に調査をおこない館の西端に広がる石敷遺構を確認した。2003～2006年度は、大舎原地区東の堂田地区、日岸地区の調査をおこない、工房域の一角と確認された。正西道、枉北道の確認のためのトレンチ調査も行っているが、検出には至っていない。

2007年度からは、大舎原地区で確認された国司館の全容を明らかにすべく、史跡公園内の宮の後



第2図 史跡出雲国府跡調査区と周辺の遺跡位置図 (S=1:6,000)



第3図 史跡出雲国府跡調査区位置図 (S=1:1,500)

地区での調査を開始した。その成果は、第2章に収録している。2006～2007年度調査の経過については、『史跡出雲国府跡5』を参照いただきたい。

第3節 出雲国府跡周辺の調査状況（第2図）

出雲国府跡周辺では、1983～1985（昭和58～60）年度に北松江幹線松江連絡線新設工事にともなう調査、1999～2002・2007（平成11～13・19）年度市道真名井神社整備事業にともなう大坪遺跡の調査がおこなわれている。

1983～1985（昭和58～60）年度北松江幹線松江連絡線新設工事にともなう調査

中国電力の送電線新設にともない史跡指定地東側で、鉄塔・工事用道路建設予定地を対象に調査が行われた。史跡隣接地である大屋敷遺跡進入道路調査地点では、日岸田地区から続く黄褐色土の基盤層が確認されている。しかし、大屋敷遺跡、才台垣遺跡、神田遺跡、四配田遺跡で奈良時代の遺構は検出されていない。（鳥根県教育委員会1987『北松江幹線新設工事に伴う地内埋蔵文化財発掘調査報告書』）

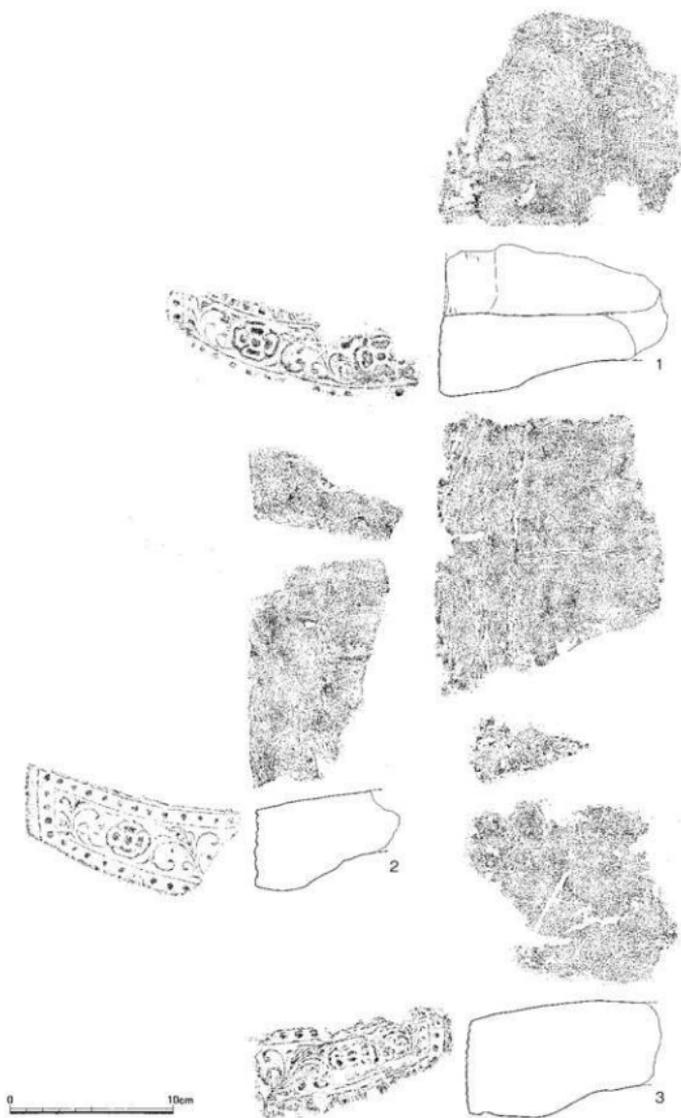
1999～2002・2007（平成11～13・19）年度市道真名井神社整備事業にともなう調査

出雲国府跡の西に接して南北に走る真名井神社参道に沿って大坪遺跡の調査が行われた。調査区は北から順に1～15区までである。13区は2007年度に調査が行われている。調査で奈良時代の遺構は検出されていない。正西道の推定線にあたる6区では「恐々謹解□□□」、「□進」、「延暦八年□」の木簡3点が出土している。（松江市教育委員会・財）松江市教育文化振興事業団2002『市道真名井神社整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書』、同2008『同Ⅱ』）

このほか恩田清氏、周藤国実氏による踏査・分布調査が早くから行われている。採集遺物の一部は近藤正氏によって報告されている（近藤1968）。国府の施設配置等を知るうえで極めて貴重であり、本節でも、幾つかの資料を紹介したい。

恩田清氏の採集資料（第4図） 恩田清氏の図面などの記録類と採集遺物は、2004年に鳥根県古代文化センターに寄贈されている（伊藤ほか2008）。出雲国府跡関連資料（第1表）のうち、三軒家（屋）で採集された資料を紹介する。三軒家は出雲国分寺跡から南に延びる天平古道の突きあたりに位置している（第1図A）。石田茂作氏が国府の所在地として推定していた地点でもある。1～3とも出雲国分寺1類の軒平瓦である（山本1991）。瓦当は3個の花文に4単位の唐草文を配する。上下の外・脇区を突線で囲んだ珠文帯で囲む。1・2には左の花文の外側に三葉文状の文様が確認できる。いずれも硬い焼きで3が須恵質で灰色をしており、ほかの2点は灰白色をしている。3点とも段頸である。凸面は粘土板を貼り付けて頸部を作り、タテ方向にヘラケズリしている。凹面は広端縁を横方向に広くケズリ、ほかは布目を残す。採集品ではあるが、この一帯に官衙施設が存在した可能性を示すものである。

周藤国実氏の採集資料（第5図） 風土記の丘展示学習館に寄託されている（第2表）。1は客ノ森付近で採集されたものである。土師器高坏で脚部を八角形に面取りしている。外面と裾部内面には赤色顔料が塗布されている。客ノ森は、山代・竹矢・大草の境にある才の神であり、意字の森に推定されている（第1図B）。この周囲にも官衙施設が存在が考えられる。2～4は「大草六所社」の注記がある。平安時代後期の土師器の皿である。5は「六所社日岸田出土」の注記があり、日岸田地区で出土したものと考えられる。弥生土器底部である。



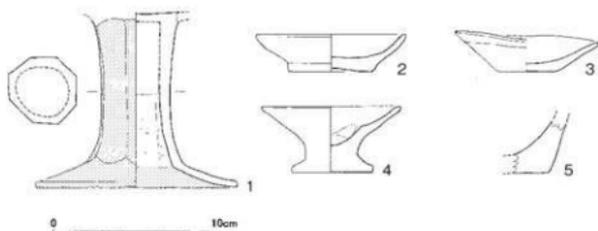
第4圖 恩田清氏採集遺物実測図 (S=1:3)

第1表 恩田清氏採集資料一覧表

地区名 (注記から)	採集年月日	石器・石	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	瓦	その他	注記・備考
樋ノ口		1				12			
樋ノ口		メノウ3、 不明1							
大草土居屋敷								鉄滓3	
六所神社境内 (東北隅)	S40. 8.11	メノウ1							
大草					2	8			
大草町字資所やしき	S40.12.22	メノウ1							
大草町字資所やしき	S40.12.22							4	
大草町字深坪	S43. 3.19							2	
深坪			4						国庁址・国庁城 壕地表下1m
深坪	S43. 1.28					3			
彼岸田								2	
彼岸田									鉄器1
彼岸田	S44. 3.19	メノウ2、 水晶1							
鍛冶屋	S43.10. 7							4	
城池ノ頭	S44. 4. 8				1	3			土器1
一貫戻	S44.11.29				6				1
六所神社東側道路	S37. 3. 3					5			陶器1
不明	S38.12.28	1			1				
不明	S39. 2.26							8	
不明	S39. 8.28							1	「こくてう」出土 古代瓦
不明	S39. 9. 8				2	1			
不明	S40. 8.11	メノウ26							
不明	S41. 4.29	メノウ1、 他1			18	53	18	8	
不明		メノウ3、 黒曜石1			1				
不明	S43. 1.28				4				種子1
不明	S38.12. 1				2				土製支脚「こく てう」出土
不明	S38.12. 2			5	52				
不明	S44.11.10	メノウ1、 水晶6、 黒曜石2							
不明									土器1
不明					24				
不明		メノウ2			1				陶器1
不明						27			
不明						1			

第2表 周藤国実氏採集資料一覧表

地区名 (注記から)	採集年月日	石器・石	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	瓦	その他	注記・備考
六所神社周辺	S30. 4				1				大草六所社
六所神社周辺	S30. 5				1				大草六所社
六所神社周辺	S31. 4				1				大草六所社
六所神社周辺				1					六所社日岸田出土
六所神社周辺						1		伊織?4、 埴埴1	大草六所社
六所神社周辺	S32. 7							胎磁石1	六所神社東隣二テ
六所神社周辺								胎磁石1	六所社
六所神社周辺								磁石1	六所神社東方
六所神社周辺	S42. 2. 8	石斧1							大草六所社後方二テ発見
六所神社周辺	S40.11	磨石1						金萬塊1	国庁跡鉛塊 六所神社裏
日岸田	S40.11							土鏝1	大草六所社日岸田出土
日岸田								鉄製品1	ヒガン田
不明	S57.10.25								大草町国庁跡出土
不明		水晶12							
不明		碧玉3 メノウ2							
今宮客森付近	S32. 2				1				今宮客森付近田ヨリ出土
今宮客森付近	S32. 2							土鏝1	今宮客森付近

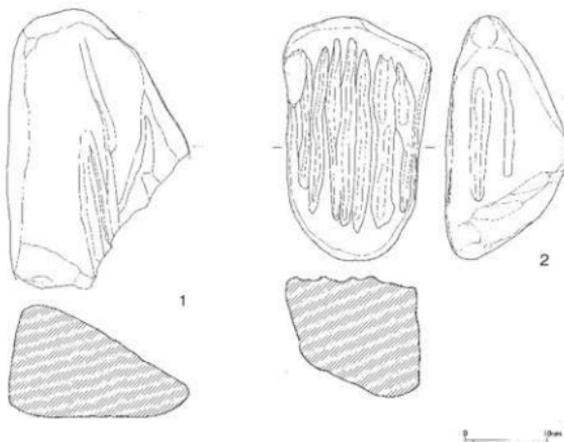


第5図 周藤国実氏採集遺物実測図 (S=1:3)

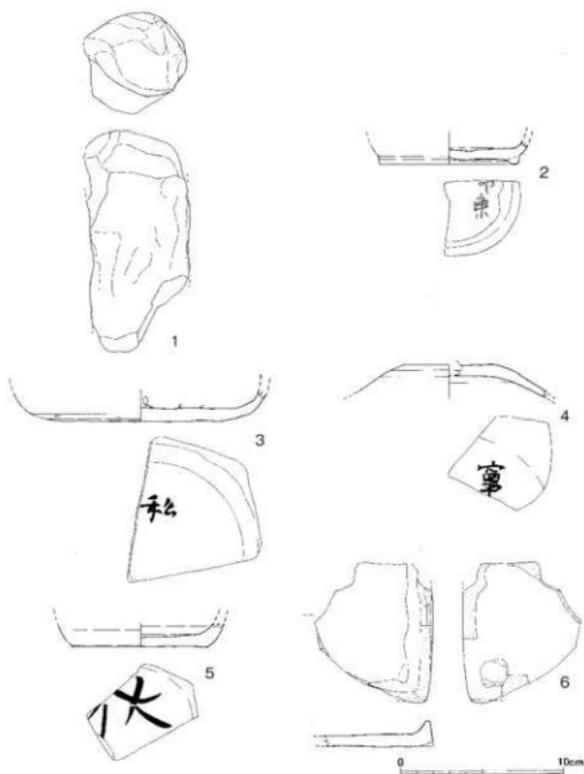
第4節 出雲国府跡と周辺遺跡の資料 (第6図・第7図)

そのほかの採集資料(第6図) 1は大草町在住の三島利幸氏からの寄贈資料である。日岸田地区か堂田地区で採集された筋砥石である。三面を使用し、そのうち二面に四条の溝がある。2の砥石は、1981年に大倉原地区の南を東西に走る水路工事の際に採集された。筋砥石で、二面に計9条の筋がある。2点とも細粒花崗岩製である。

出雲国府跡周辺の遺物(第7図) 出雲国府跡の遺物に混じって収蔵されていたものである。1は1969年11月11日に来美東古墳群南接開墾地で採集されている(第1図D)。北新造院跡(来美庵寺)の東に所在する住宅地において採集された可能性がある。土製支脚だが、風化がひどく突起の形状など不明である。2～5は、島根県2003において出雲国府出土品として報告されていた。しかし、国府出土品でないことが確認されたため、訂正のうえあらためて報告する。2は風土記の丘駐車場横で採集された須恵器高台付きの坏である(第1図E)。外面底部に「印東」と刻書される。3～5は出雲国分寺跡出土品である。3は土師器坏で底部外面に「私」と墨書がある。4は須恵器坏蓋で頂部内面に「寒」の墨書がある。5は須恵器坏で底部外面に「秋」の墨書がある。6も出雲国分寺出土品で、風字硯である。表面は研磨され、立ち上がり部の内縁にそってわずかに窪んでいる。表面には脚部の剝離した跡が円形に残っている。

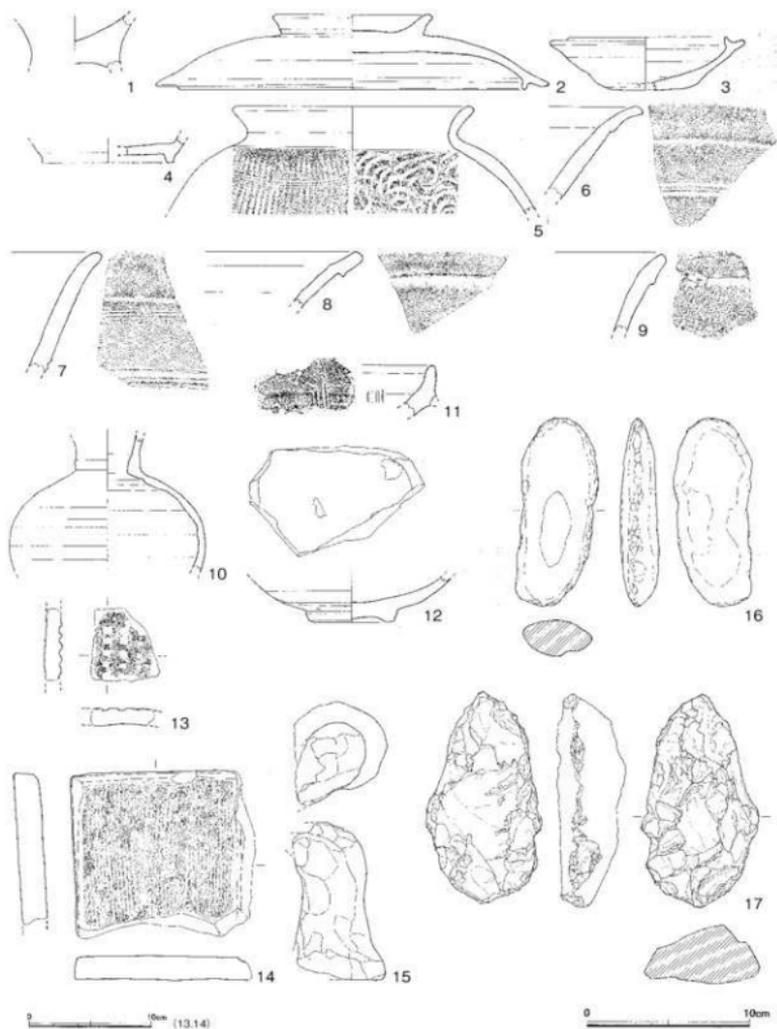


第6図 出雲国府跡採集遺物実測図 (S=1:6)



第7図 出雲国府跡周辺の遺跡出土・採集遺物実測図 (S=1:3)

神魂神社所蔵(県寄託)資料(第8図) 神魂神社は、出雲国府跡から約1.7km南西に所在する(第1図C)。本殿は1583(天正11)年の建造で、国宝に指定されている。ここに掲げるのは、本殿下に保管収蔵され、1982(昭和57)年2月19日に、当教育委員会に寄託されたものである。1は弥生土器の甕底部である。上げ底になっている。2~10は須恵器である。2は輪状つまみを持つ坏蓋で、口径21.2cmの大型品である。3は坏身で低い立ち上がりがり内傾して付く。4は高台を有する坏身である。5は甕で、外面カキメ調整のち平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕をのこす。6~9は甕の口縁部~肩部に沈線と波状文を施す。10は長頸瓶である。11は備前焼の播り鉢である。内面に4条以上の播り目を施す。12は唐津焼の碗である。13は平瓦である。焼成は須恵質で硬い。凸面に5mm四方の格子タタキを施す。14は埴である。側部に沈線を入れ分割している。凸面に縄タタキ、凹面は糸切り痕がのこる。15は土製支脚で、3方向に突起をもつ。16は打製石斧である。全体に摩滅している。17は玉髄製の石器である。側面が敲打で潰れていることから、火打ち石の可能性もある。このほかに掲載していないが巻き貝の化石と思われるものもある。(間野・人見)



第8図 神魂神社所蔵遺物実測図 (S=1:3、1:4)

引用・参考文献

- 伊藤徳広・稲田陽介・深田浩・丹羽野裕2008「恩田清氏資料の整理報告」『古代文化研究』No16鳥根県古代文化センター
 近藤 正1968「出土品」『寺跡』『鳥根県文化財調査報告書』第5集 鳥根県教育委員会
 鳥根県古代文化センター2003『山陰古代文字資料集成1』
 山本清1991「第五 出雲」『新修出雲国分寺の研究 第四巻』吉川弘文館

第2章 2006～2007年度の発掘調査

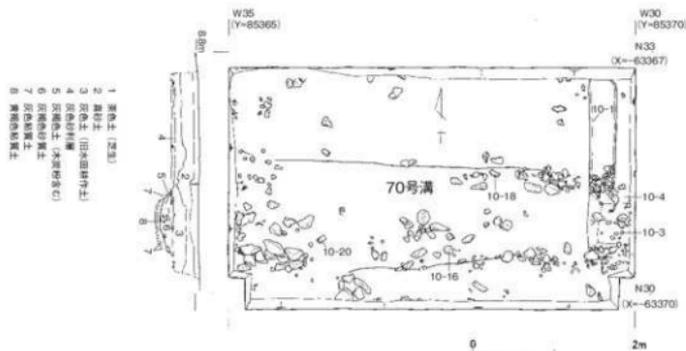
第1節 範囲確認調査

(1) はじめに

範囲確認調査は、3地区5箇所でおこなった。宮の後地区は、大舎原地区で検出された国司館の遺構の広がりを確認するために、史跡公園として整備された北端の中央に第46トレンチを設定した。六所脇地区では、1970年度（昭和45）調査区（I区）の再発掘を目的に調査をおこなった。2006年度に設定した第47トレンチでは、再発掘部分が非常に狭い範囲にとどまったため、2007年度に第49トレンチの調査を実施している。堂田地区では、工房域と考えられる日岸田地区から延びる62号溝の延長部分を検出することを目的として、第50・51トレンチを設定した。

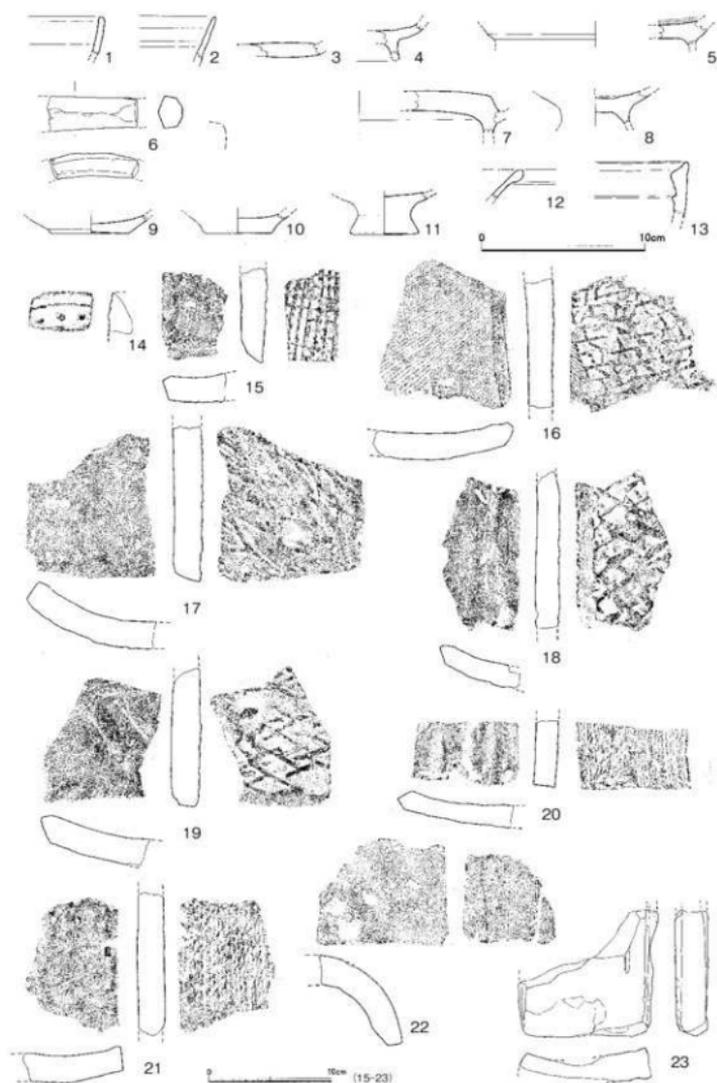
(2) 宮の後地区 第46トレンチ（第9図～第10図）

層序は、上位から順に、公園整備にかかる真砂土、その下に旧水田耕作土がみられる。この下層が古代から中世の遺物が混ざった砂利層になる。さらに下層が黄褐色粘質土の整地土となる。この上面で遺構を検出している。標高は8.6mである。検出した遺構は東西方向に延びる溝、70号溝1条である。溝の幅は1.0m前後、深さ16cmで断面は皿状をしている。両側には緑石が並べてある。1～4は70号溝から出土した。いずれも須恵器小破片である。1・2は坏身の口縁部、3は底部である。4は高台付の坏である。5は漆のパレットとして使用された坏で高台が付く。漆のパレットとして使用された須恵器はほかにも小破片1点が出土している（図版16上）。6は平瓶の把手である。丁寧に面取りがしてある。7は凹面硯である。陸部は良く磨られている。8～11は砂利層出土の平安時代後期の土師器である。8は八字に開く高台が付く。9・10は坏、11は高台付きの皿である。12は白磁碗の口縁部である。13は中国陶器鉢1-1b類の口縁部である。14は出雲国分寺2類軒丸瓦の瓦当部である（山本1991）。焼きはあまい。15～21は平瓦である。15～17は須恵質で焼きは硬い。15は側縁と凹面端縁を面取りする。凸面成形は斜格子タタキとする。16は凸面成形を変形の格子タタキ、17～19は格子タタキとする。20・21は凸面成形を縄タタキとする。焼成は20が須恵質で硬く、21は軟質である。20の凹面には横骨痕状の段がみられる。22は丸瓦で、軟質の焼成である。



第9図 第46トレンチ実測図 (S=1:60)

凸面はナデ調整、凹面は側縁を面取りし、他は未調整で布目を残す。23は畝斗瓦である。切りこみを入れて割る切割畝斗である。軟質の焼成で全体に風化摩滅している。幅は9.7~10.8cmである。凸面は格子タタキとする。

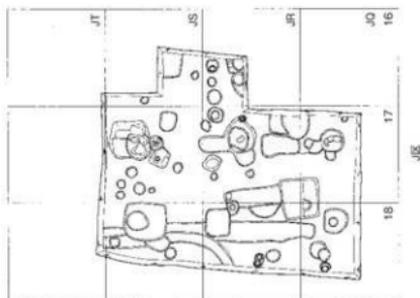


第10図 第46トレンチ出土遺物実測図 (S=1:3、1:4)

(3) 六所脇地区

トレンチの位置は第11図のとおりである¹⁾。1970年度調査区との合成は第49トレンチのSB019柱穴の測量結果をもとにおこなった。

第47トレンチ（第12図～第15図） 1970年度調査区のうち再発掘できたのは、想定していたより



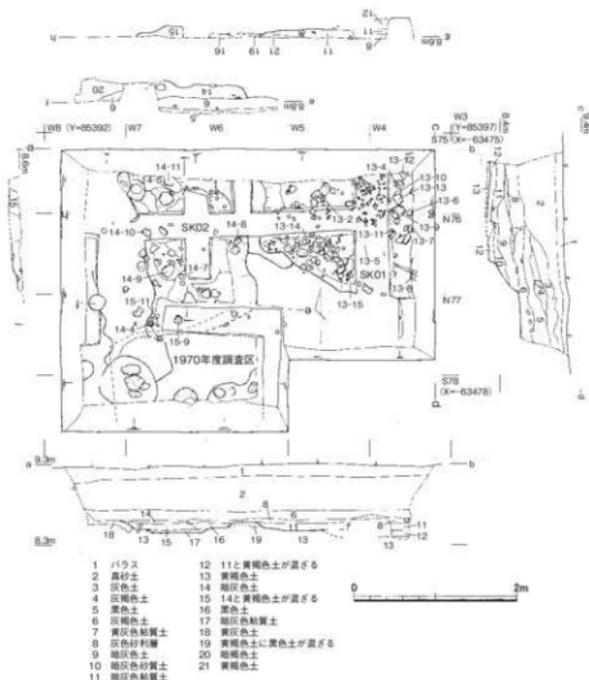
第11図 第47・49トレンチと昭和調査区的位置 (S=1:150)

も狭い約3㎡であった。未発掘調査範囲であらたに土坑2基を検出した。層序は、上位から公園整備にかかる造成土、畑の耕作土があり、その下層が古代～中世の包含層となる。さらに下層が黄褐色土の整地土で、この上面で遺構を検出した。標高は8.78mである。

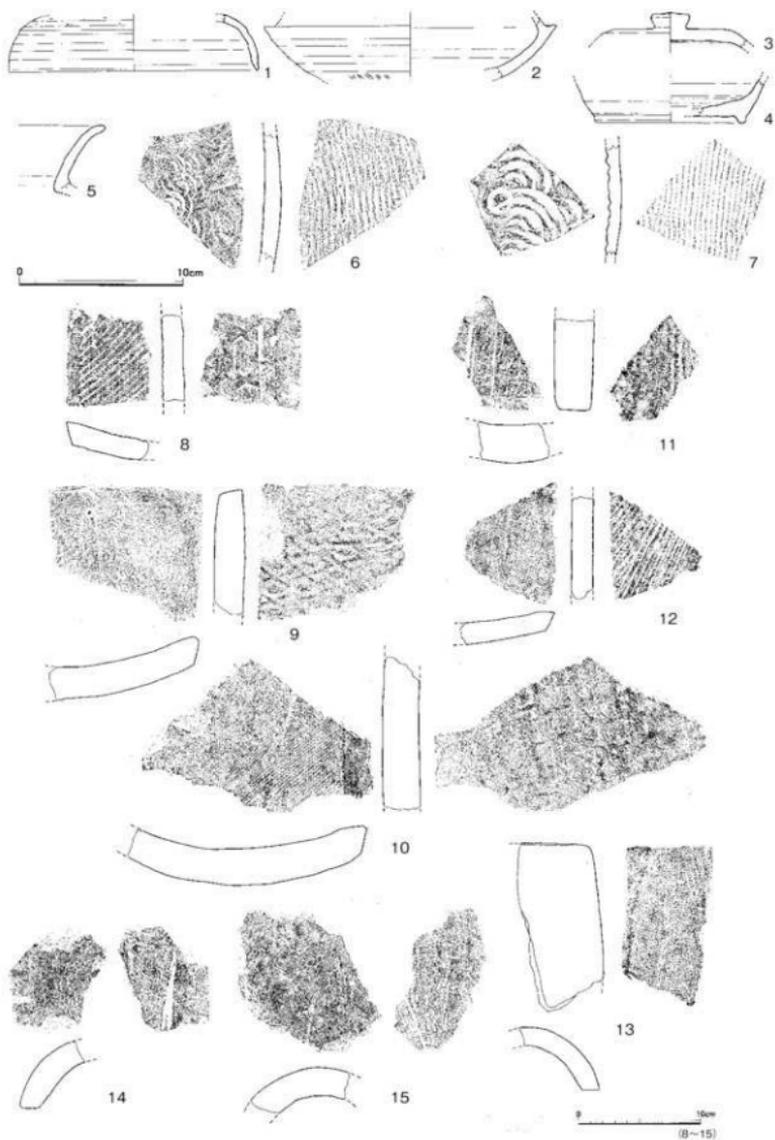
SK01 東西1.9m以上、南北1.4m以上で、深さは20cmある。埋土には、掘りこぼし大ほどの石が多数あり、そのなかに古代の土器・瓦類、古墳時代後期の須恵器が混ざっている。

第13図1・2は古墳時代後期の須恵器坏である。1は坏蓋である。天井部は丁寧な回転ヘラズリとする。2は有蓋高坏の坏部である。立ち上がりは内傾する。3は坏蓋である。頂部にボタン状のつまみが付く。4は高台付きの坏である。5は須恵器甕の口縁部である。6・7は甕の胴部破片である。外面を平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕を残す。8～12は平瓦である。凸面成形は8～10が格子タタキ、11～12は縄タタキとする。13～15は丸瓦で、13は無段式である。13は軟質で焼きはあまい。凸面はナデ調整、凹面は未調整で布目を残す。14は凸面にタテ方向の縄タタキ目が残る。

SK02 南北方向に細長い形をしている。南北1.55m以上、東西1.25m、深さは10～15cmである。南端は、土層断面の観察から、1970年度調査区北端でおさまるものと判断した。第14図1は須恵器坏身である。体部は直線的に立ちあがる。2は須恵器坏か皿で、底部に高台が付く。3・4は土師



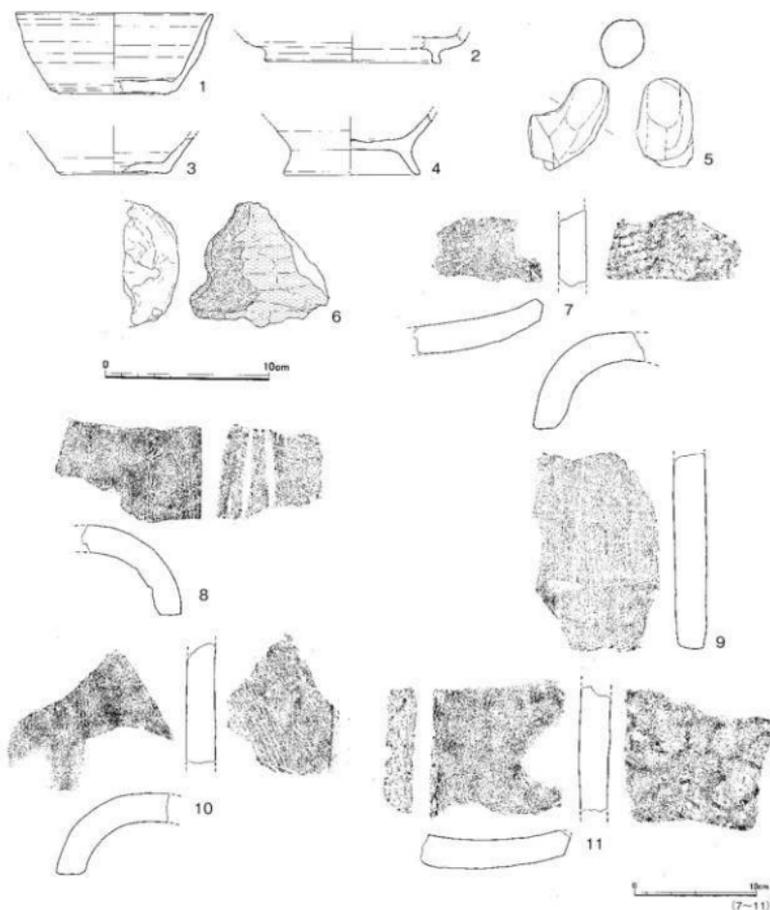
第12図 第47トレンチ実測図 (S=1:60)



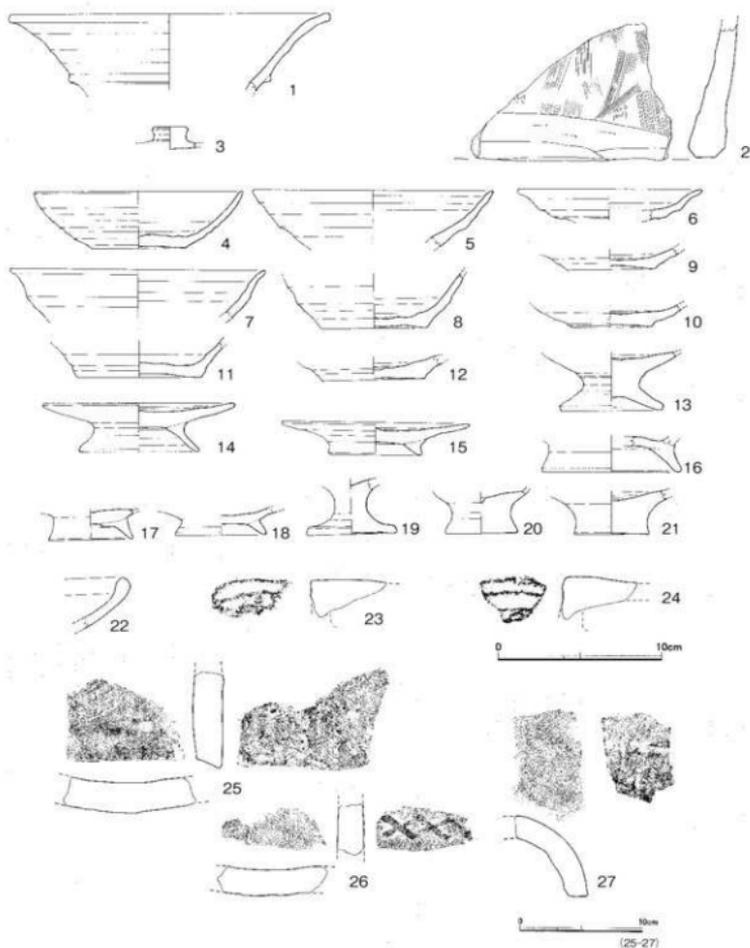
第13図 第47トレンチ出土遺物実測図 (1) (S=1:3、1:4)

器である。4は八字に開く高台が付く。5は瓶の把手である。粗いナデで整形している。6は羽口である。外径は8.0cmある。先端はガラス質化している。7は平瓦である。凸面は格子タタキとする。凹面は未調整で布目を残す。8～10は丸瓦である。焼成はいずれも軟質である。凸面は縄タタキ成形後、ナデ調整する。11は製斗瓦である。切割製斗で、最大幅は12.1cmである。凸面は格子タタキとし、凹面には布目を残す。

そのほかの遺物（第15図） 1～7は耕作土、黒色土から出土した。1は鼓型器台である。2は移動式竈の底部である。3は土師器坏蓋で頂部にボタン状のつまみが付く。4～21は平安時代の土師器である。4～12は坏である。13は八字に開く高台をもつ坏である。14・15は高台が付く皿である。



第14図 第47トレンチ出土遺物実測図（2）（S=1：3、1：4）

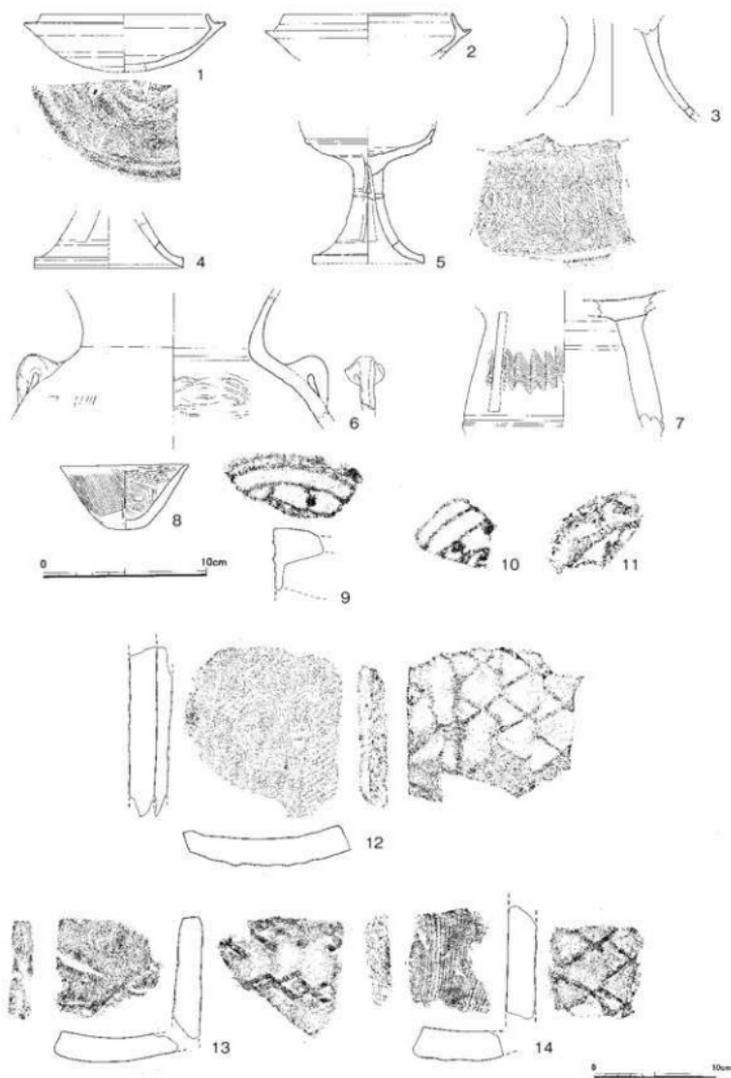


第15図 第47トレンチ出土遺物実測図(3) (S=1:3、1:4)

22は瓦質土器の鉢である。口縁部が玉縁状に肥厚する。23・24は軒丸瓦である。23は出雲国分寺2類、24は同3類にあたる。いずれも軟質で焼きはあまい。25・26は平瓦である。25は風化のため凸面成形は不明。26は格子タタキである。27は丸瓦である。凸面をタテ方向のナデ、凹面は未調整で布目を残している。

第49トレンチ(第16~18図) 大型柱穴があるSB019の再検出を目指して、推定政庁後殿の東に東西3m×南北5mで設定した。調査の結果、所期の目的どおり、SB019柱穴を含む1970年度調査区の一部を再検出できた。1970年度調査では、古代の遺構と考えられるSB019などの柱穴を標高8.5mまで掘り下げて検出している(第17図)²⁾。またIQ09グリッドは、平安時代後期の遺構面(標高9.2

も底面中央でまわりと土質が異なる範囲がみられた。湧水により十分な観察ができていないが、柱位置にあたる可能性がある。中世の遺構面では、あらたに5つの柱穴を検出した。いずれも径20～30cm前後の小柱穴である。また既掘の柱穴1基で、埋め戻し土を除去したところ、柱痕部分が確認



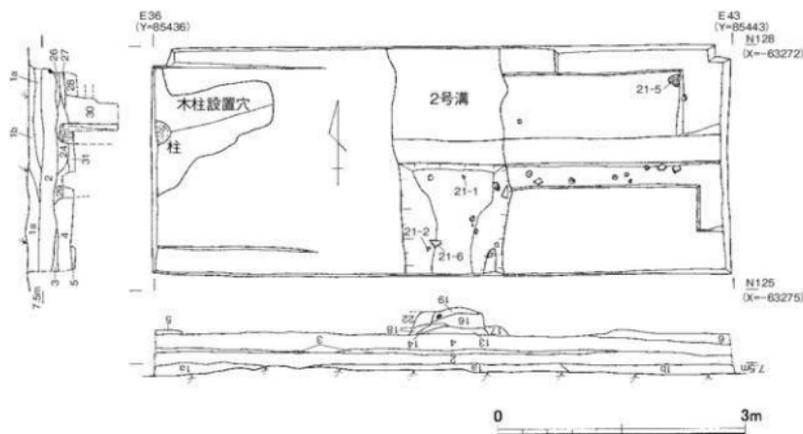
第18図 第49トレンチ出土遺物実測図 (S=1:3, 1:4)

されたため、半裁し調査している。

遺物は、古墳時代の土器類と古代の瓦類を中心に報告する。第18図1・2は古墳時代後期の須恵器坏身である。立ちあがりは内傾し、底部を体部の境は明瞭でない。3・4は高坏の脚部でスカシをもつ。5は長脚無蓋高坏である。脚部に三角形の透かしが2段2方向にあく。6は提瓶である。把手は環状をし、上側の付け根はしっかりと接合している。7は高坏型器台の脚部である。波状文に長方形の透かしが2方向以上あく。8はミニチュア土器の坏である。内外面をハケム調整する。9～11は軒丸瓦の瓦当部である。3点とも焼成はあまく軟質である。9・10は出雲国分寺3類である。12～14は駝斗瓦で、切割駝斗である。いずれも焼成は軟質である。凸面は格子タタキとする。12は幅が13.8cmある。

(3) 堂田地区 第50～51トレンチ

第50トレンチ(第19図・第21図) 2006年度堂田地区西調査区とその北側の第6トレンチで、平安時代後半の道路遺構(盛り土した路面と側溝(2号溝)の一部が確認されている。この調査区では、①平安時代後期の道路遺構延長部分を検出する、②2号溝西側でさらに古い段階の道路遺構を検出する、③日岸田地区から延びる東西大溝62号溝の延長を確認する、ことを目的とした。調査区は2号溝延長線と62号溝延長線の交点を中心に東西7m×南北3mで設定した。調査の結果、①は2号溝の延長を確認することはできたが、盛り土による路面は検出できなかった。②と③も確認できなかった。62号溝は、第51トレンチの調査で、この調査区までは延びていないことが確認された。



- | | | |
|-------------------------|------------------------------|-----------------------|
| 1 a 黒色土 (H18調査の残土) | 13 褐色土 (2号溝埋土) | 26 褐色土 (同) |
| 1 b 褐色土 (同) | 14 黒褐色土 (同) | 27 褐色土に明褐色土を塊状に含む (同) |
| 2 褐色土 | 15 黒色土 (同) | 28 明褐色土と褐色土砂質土が混ざる |
| 3 灰褐色土 | 16 黒色土 (同 粘性あり) | 29 褐色土 |
| 4 褐色土 | 17 褐色土 (同 腐葉土、燻灰石) | 30 黄褐色土 (粘性強い) |
| 5 褐色土 | 18 明褐色土粗砂 | 31 褐色土と粗砂混ざる |
| 6 褐色土と褐色土が混ざる | 19 灰白色土 (2号溝埋土 腐葉土) | 32 褐色土 |
| 7 黒色土 (遺物多い、木炭粉混ざる) | 20 褐色土 | 33 褐色土粗砂-粗砂 |
| 8 褐色土 (褐色土) | 21 褐色土 | |
| 9 褐色土 (粘性強い、木炭粉混ざる) | 22 灰白色土 | |
| 10 褐色土 | 23 に少し褐色土 (燻・瓦含む) | |
| 11 灰褐色砂質土 (盛り土大以下の層を含む) | 24 褐色土に明褐色土を塊状に含む (木柱設置穴の埋土) | |
| 12 褐色土砂質土 | 25 未分析有機物 (同) | |

第19図 第50トレンチ実測図 (S=1:60)

2号溝(第19図)

(規模と構造) はばE39.5(Y=85439.5)ラインを中心線として南北に走る。規模は現状で上面幅1.2m、下面幅0.65~1.0m、深さ0.35mである。底面の標高は6.88~6.80mである。堂田西調査区の標高とくらべると10~20cm低い。

(土層堆積状況) 内部調査は調査区の南半部のみ行った。溝の埋土は側方から崩落したと思われる土が堆積し、その上層に黒色土がみられる。

(遺物出土状況) 上層の黒色土から出土している。遺物は、平安時代後期の土師器、白磁のほか須恵器、瓦がみられる。

(出土遺物) 第21図1は白磁皿で大宰府分類ⅢⅥ類もしくはⅦ類である。2は白磁碗Ⅱ類である。6は平瓦である。凸面成形を縄タタキとする。

(路面など溝周辺の状況) 2号溝の西側には堂田西調査区でみられた盛り土は確認できなかった。堂田西調査区では、盛り土上面が標高7.4m、盛り土の厚さ10~20cmであった。第50トレンチ西側は、遺構検出面の標高7.1mで堂田西調査区よりも30cm低い。盛り土は削平されて残っていないものと思われる。2号溝の東には黒色土が堆積する。黒色土下は整地層があり、2号溝はこの整地層から掘り込まれている。黒色土には、緑釉陶器、白磁、柱状高台付きの坏や皿が混ざっている。第6トレンチと堂田西調査区の状況と同じである。

そのほかの遺構 調査区西壁で電線(高圧線)の支柱と考えられる木柱とその設置穴を検出した。設置穴の底面まで検出していないため、木柱の全長は不明である。木柱は径26cm、長さ73cm以上である。先端は標高7.1mのところでは折れている。木柱の横から径3mmの針状の金属が突き出していた。確認はできないが木柱のまわりに巻かれている可能性がある。設置穴の規模は、調査区西壁で南北1.5m以上、深さ0.76m以上である。平面は木柱の立つ位置から東1.3mまで、0.6~0.8mの幅で広がっている。横倒しにした木柱を引き起こすために掘り広げである可能性がある。また、木柱から北東86cmの設置穴南壁際で杭を検出した。杭は径2cm、長さ18cm以上である。

遺構にともなわない出土遺物(第21図) 3、4は土錘で、3は紡錘形、4は紡錘形と円筒形の中間のような形態を呈する。5は平瓦である。凸面成形は格子タタキとする。

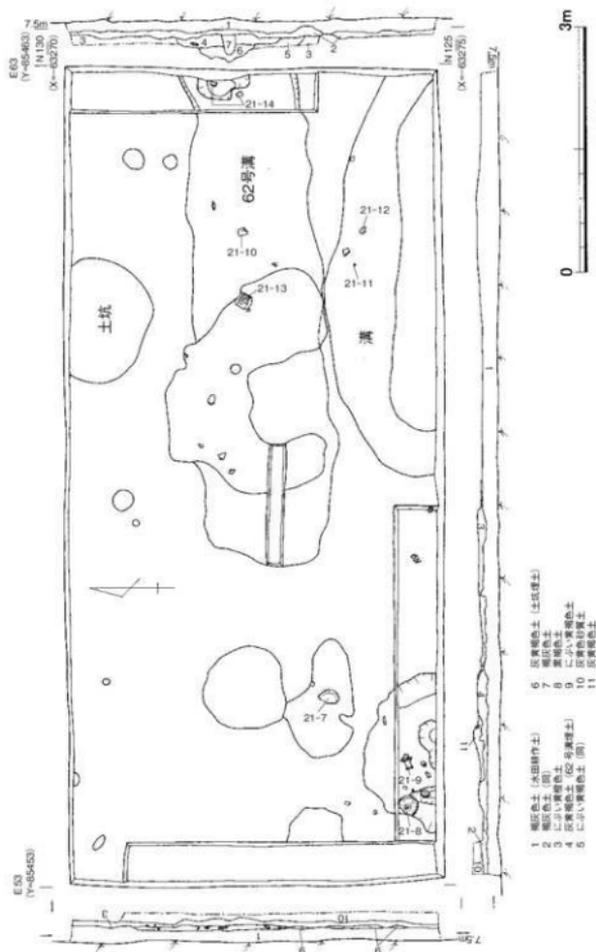
第51トレンチ(第20図~第21図) 62号溝と68号溝の延長部分を確認することを主眼に設定した。62号溝は日岸田地区を東西に走る大溝である。漆運搬容器の須恵器長頸類がまとまって出土したことから、工房域の区画溝と想定されている。溝の西端は、平成18年度堂田地区東調査区まで確認されている。68号溝は同西調査区を南北方向に走る溝で、工房域の西限を区画する大溝の可能性が考えられている。今回の調査では、この二つの溝の延長を確認するために、想定される交点を中心に南北5m×東西10mの調査区を設定した。

田水田耕作土を除去すると標高7.4mで遺構面に達する。遺構面では62号溝のほか平安時代後期の土坑1基、溝跡1条、柱穴3基を検出した。

62号溝(第20図)

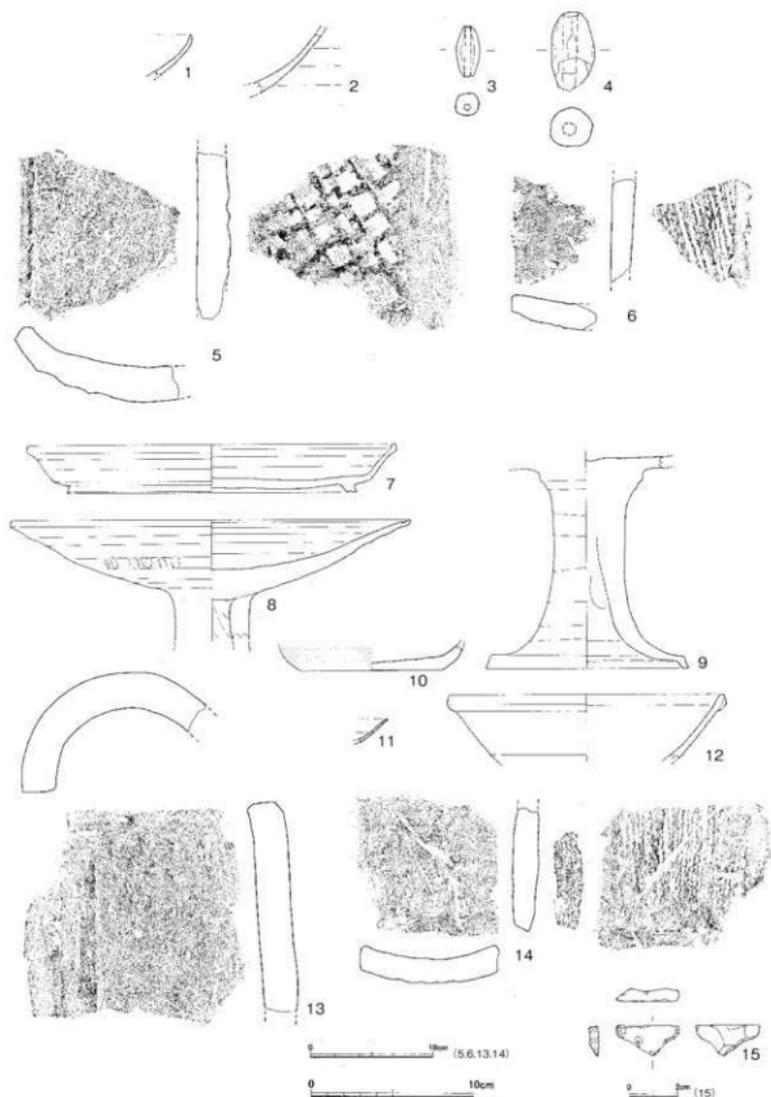
(検出過程) 遺構面を精査したが明瞭に確認できなかったため、調査区西壁で断ち割りをおこない溝の断面を確認した。あらためて西にむけて精査しE57ラインまで溝状に確認した。ここから西側は、溝状でなく土坑が南北方向につながって確認された。調査区西溝の断ち切りで溝の掘方が確認できなかったことから、溝は南に屈曲し、削平により底面が連続土坑状に残っているものと考えた。

(規模と構造) ほぼN127.5 (X=-63277.5) ラインを中心線としてE57 (Y=85457) ラインまで東西方向に走る。溝は幅1.53~1.95m、深さ10cmである。底面の標高は、調査区西壁とE57ラインで7.3m前後となる。調査区南壁の土坑状の部分では、幅1.95m、深さ0.12mで底面の標高は7.28mとなる。(土層堆積状況) 埋土は1~2層で石や瓦を含んだ灰黄色土を主体とする。調査区南壁の土坑状の部分では木炭粉が混ざっている。



第20図 第51トレンチ実測図 (S=1:60)

(遺物出土状況) E57ラインまでは瓦が多く、わずかに土師器皿(赤色塗彩)や須恵器の小片がみられる程度である。そこから南に連続土坑状に残った地点では、須恵器高坏・盤・皿などの供膳具がまとまって出土している。



第21図 第50・51トレンチ出土遺物実測図 (S=1:2, 1:3, 1:4)

(出土遺物)第21図7は須恵器高台付皿である。口縁部は端部が垂直に折られ、段を有する。底部は、ヘラ切りの痕跡が残る。内面に墨痕が一部残存するが、摩滅した形跡はない。8、9は須恵器高坏である。8は坏部から脚部の一部が残存しており、坏部の口縁部は強く押圧され、段を有する。また、坏部外面の一部に棒状の工具の圧痕が施される。9は高坏の脚部である。内面にはしほり痕が観察される。10は土師器環の底部で、外面に赤色顔料が塗布される。14は甃斗瓦である。切断面が欠けているが切割甃斗と思われる。幅は11.1cm、厚さ2.0cm前後ある。凸面は縄タタキ成形する。凹面は銅線をケズリ、ほかは布目をナデ調整で消している。

そのほかの遺構と遺物 土坑1基、溝跡1条のほか径20～30cm前後の柱穴を検出した。

土坑は調査区北壁近くにあり、東西1.4m、南北0.95m以上である。埋土は黒色土で、上面から白磁が出土している。内部調査はおこなっていないが井戸の可能性が考えられる。

溝跡は調査区東壁の南隅からN125(X=-63275)ラインあたりを西に向けて弧を描きながら走り、E58.3(Y=85458.3)ラインで南に屈曲している。幅70～75cm前後で埋土は黒褐色土である。上面から白磁、青白磁が出土している。第21図11は白磁皿である。12は玉縁をもつ口縁で、碗Ⅳ類である。13は62号溝が攪乱された部分から出土した丸瓦である。焼成はややあまい。凸面をナデ調整、凹面は布目を残す。15は旧水田耕作土から出土した。石製品の未製品である。石材はカド石で、形態がやや方形に近く、2箇所に貫通していない小さい穴があり、巡方の未製品である可能性が考えられる。

(4) 総括

宮の後地区 あらたに東西溝が確認された。この成果をうけて、2008年度に調査区を拡張し、溝の性格と遺構の広がり解明のために調査を行っている。次の節で詳述する。

六所脇地区 1970年度調査区の再発掘結果から、六所脇Ⅰ区的位置が、南へ1m、東へ1mずれることが分かった²⁾。これにより、SB020(推定政庁正殿か後殿)の中心を基準としている想定中軸線も東へ1m移動し、座標値Y=85386.5となる。第47トレンチでは、平安時代前期の土坑を検出している。1970年度の調査でも、当該期の土師器のほか、黒色土器や緑釉陶器、京都府篠栗郡群篠壺Ⅱに類似した須恵器などが出土している¹⁾。また、IS10グリッドでは緑釉陶器皿を伴う土坑も検出している³⁾。これらは、SB020周辺やSB020と重複して造られていることから、建物廃絶後に造られた廃棄土坑と考えられる。さらに、平安時代後期になると盛土造成がおこなわれている。この上面からは、多くの小柱穴のほか跡SK123を検出している。調査区から埴場も出土しており、この地区で金属器生産が行われていたようである。また、1970年度の調査で、政庁後殿(正殿)に推定される建物跡(SB020)やそれに先行する施設群(SB018・SB019)の存在が明らかになった。しかし、建物跡は未調査な部分が多く、今後の調査で構造や変遷について明らかにしていく必要がある。

堂田地区 第50トレンチでは2号溝の延長部分は確認できたが、盛り土や路面は削平により検出できなかった。また2号溝の西側では古い段階の側溝も検出されなかった。推定道路跡が現道と重複し、調査範囲は限定されるが、ひきつづき調査地点を増やし、線としてつなげ国府全体の景観復元を進めていく必要があるだろう。第51トレンチでは、62号溝の延長を確認することができた。これで日岸田地区からの総延長は約85mとなった。また今回の調査で溝は南に屈曲することが確認された。その延長線上に西調査区68号溝がある。68号溝は第6トレンチでは確認されておらず、時期も不明ではあるが、位置関係から両者は一連の溝である可能性が考えられる。あるいは68号溝が66号

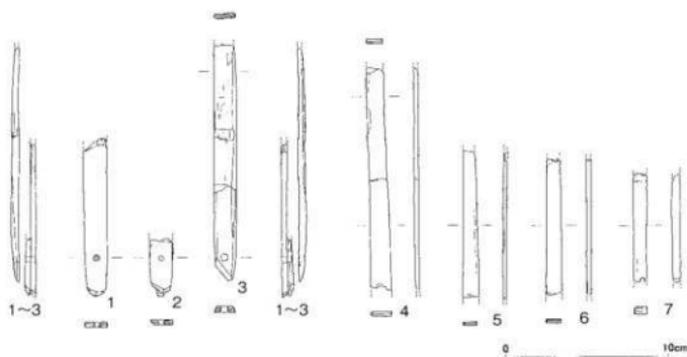
溝と対になる南北の区画溝の可能性もある。二つの溝の心芯距離は約90mとなる。今後、第6トレンチや周辺の調査をすすめ実態を明らかにしていく必要がある。(問野、中野)

(5) 堂田地区12号井戸出土木製品(補遺)

第22図1～4の木製品は「報告書5」において、用途不明として報告した。報告後、当センターにおいて保存処理をおこなう際、保存処理担当澤田正明の教示により、扇具と判明した。あらためて非掲載としていた木製品を調査し、あらたに骨の可能性のあるもの2点と4に接合する破片を確認している。7は、扇具の調査で抽出した木製品であり、扇具ではない。棒状をしており上下端を欠いている。扇の形態は蝙蝠扇である。樹種は1～4がスギである。1～3は、骨の下半部で本に近く、要孔があけられている。それぞれ幅1.4cm、厚さ0.3cmである。長さももっとも良く残っている3が14.5cmである。1と2は、要孔を重ね合わせると、本の端の加工痕(面)が連続する。2枚(それ以上)を重ねた状態で削っている可能性がある。3は外面側縁が面取りされており親骨と考えられる。本の端は片山形に裁ち落とされている。要孔で合わせると、本の端が3は2よりも末に約5mm近くなる。3の親骨と2の子骨のあいだに、もう1枚子骨が存在したものと考えられる。子骨は3枚以上となるが、類例からも子骨4枚、親骨2枚の計6枚からなるものと推定される(辻1998)。4～6は、幅0.7～1.3cm、厚さ0.2～0.3cmである。先端に向けて細くなっており、末に近い部分と考えられる。扇は、大舎原地区4号井戸でも出土しており、これが2例目となる。4号井戸は、12号井戸から直線98m南西に離れた地点に位置する。井戸の時期は平安時代後期、扇の樹種はスギである。2点を比べると、本の平面形が12号井戸出土品は不揃いであり、4号井戸出土品よりも粗雑な感じをうける。(問野)

(6) 日岸田地区63号溝出土獣骨(訂正)

「報告書4」では、ウシの可能性のあるものとして報告していたが、老齢のウマとわかった。獣骨は、南北に走る63号溝の西寄りから出土した。ほかの部位は出土しておらず、頭蓋骨のみ廃棄された可能性もある。(問野、伊藤)



第22図 堂田地区12号井戸出土木製品実測図(S=1:3)

第2節 宮の後地区の調査

(1) 調査区の設定 (第23図)

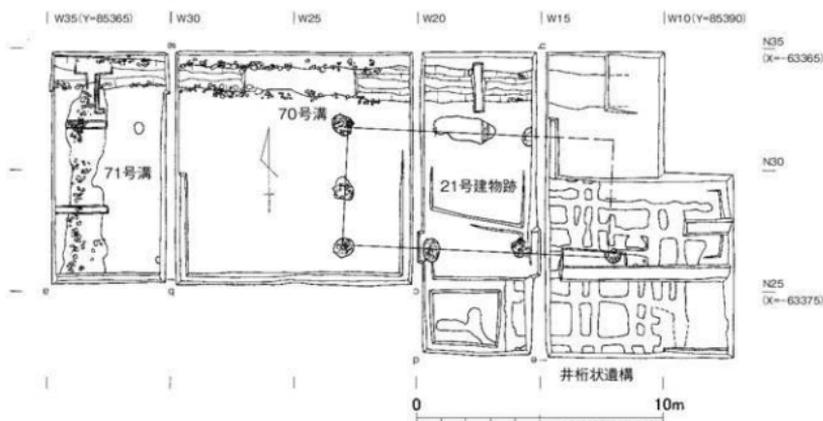
2006年度第46トレンチで確認された溝跡(70号溝)の延長を確認するとともに、周辺の施設の性格をあきらかにすることを目的とした。調査区は2006年度第46トレンチを北西隅、1969年度調査区C区を南東隅とする東西25~28m、南北10~13mの長方形に設定した。調査区内は、国土地理院第三座標系(日本測地系)の南北軸座標 $X = -63400\text{m}$ と、東西軸座標 $Y = 85400\text{m}$ の交点を原点とする区割りに準拠している。原点から西にW、東にE、北にN、南にSをふり、北西交点をグリッド名とし、 $N\bigcirc E\bigcirc$ と呼称する。

(2) 調査区の層序 (第24図)

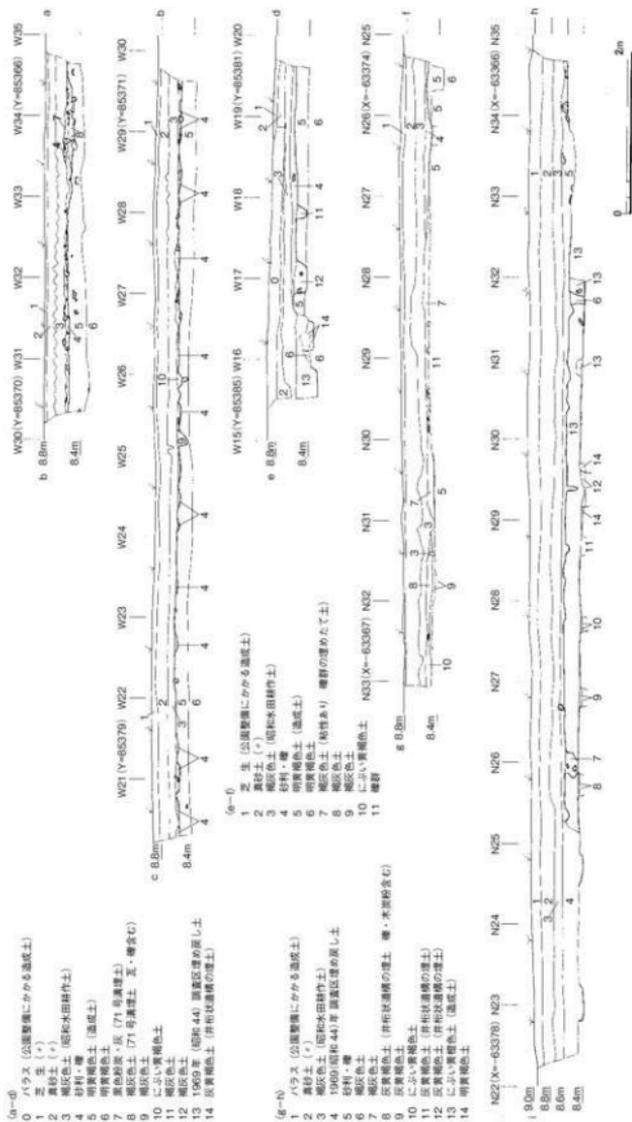
地表面から順に、①公園整備にかかる造成土(芝生・バラス・マサ土)、②水田耕作土、③砂利・礫、④整地土となる。③砂利・礫は調査区全面を覆っている。礫はW15ライン東が大きく、人頭大の石が多数みられる。礫のあいだには古代~中世の遺物が混ざる。瓦がとくに多い。W15ライン東では17世紀前半の肥前系陶器が出土している。中世~近世にかけて調査区内が流路になっていたものと考えられる。流路の方向はおおむね南西から北東方向と想定される。④整地土の上下2面で古代の遺構が確認される。

(3) 水田耕作にともなう遺構と遺物

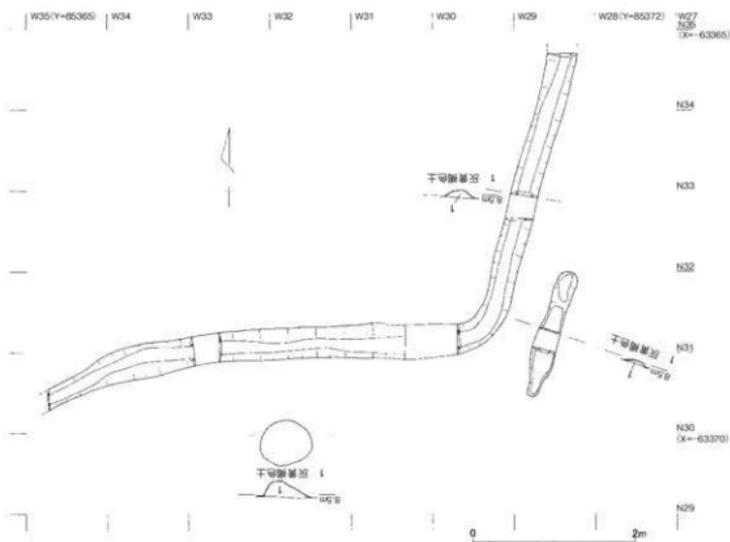
公園整備前の水田畦と畦を保護する杭、竹や板を検出した。公園整備にかかる整地工事は盛り土を主体としておこなわれており、車両の走行による攪乱はあるものの、水田畦は比較的良くのこっていた。畦の幅は20cm前後、高さは10cm前後である。畦に打ち込まれた杭には丸杭、角杭ともみられた。畦に平行して竹(径5.5cm)や板が埋設されている。



第23図 宮の後地区遺構配置図 (S=1:200)



第24図 宮の後地区土層断面図 (S=1:60)



第25図 宮の後地区旧水田耕作土下の遺構実測図 (S=1:60)

(4) 旧水田耕作土下の遺構 (第25図)

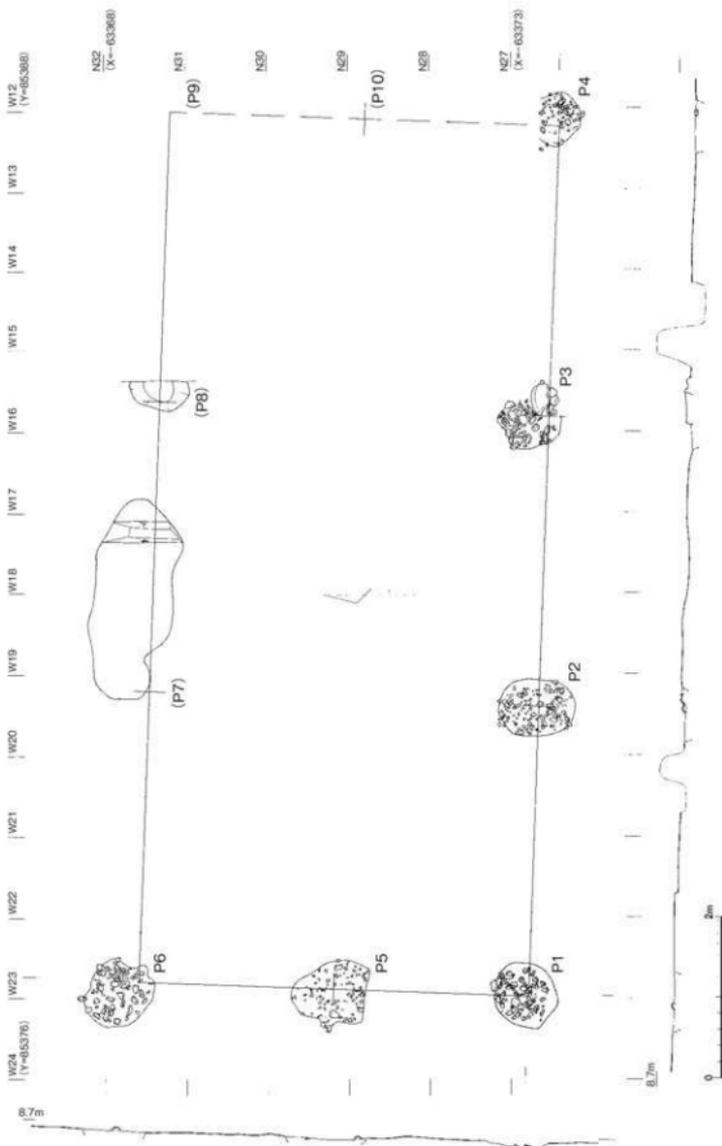
旧水田耕作土下で砂利・礫層堆積後に造られた溝4条、土坑1基を検出した。このうち第25図に溝2条、土坑1基を示した。1条は、調査区南壁N31.5ラインあたりからN31ラインを東に走り、N31W30付近で北に曲がり、W28.5ラインで北壁に達し、調査区外に延びていく。幅25～40cm、深さ10cm前後である。この溝の40cm東、N30W29付近から北東方向に平行してもう1条が走る。全長1.6m、幅24～30cm、深さ5～9cm前後である。北側は70号溝と重複し調査区外に延びる。ほかにもN35～30、W15～10で幅20cm前後の浅い溝が断続的に確認されている。土坑はN30W32付近にあり70号溝の南75cmに位置する。土坑上面と周囲には礫層がみられない。礫層を除去して掘削されたものと思われる。平面はほぼ円形で南北56cm、東西64cmである。深さは19cmで底面の標高は8.35mである。

(5) 整地土上面の遺構と遺物

建物跡1棟 (21号建物跡)、溝跡2条 (70号～71号溝)、柱穴5基、土坑1基を検出した。

21号建物跡 (第26図)

70号溝の南に位置する2間×3間の礎石建ち東西棟である。東西方向については、2007年度調査で、東側柱筋 (P10) が確認できなかったことから、さらに東に伸びる可能性も考えられた。しかし、2008年度、東に拡張した調査区で柱穴掘形が確認できなかったことから、東西3間と判断した。軸方位は西妻側の柱筋でN3°7'35"Eである。柱穴掘形は西側柱と南側柱筋のみ検出した。北側柱のうち、(P7)の位置には南北2.4m、東西1.2m、深さ10～15cmの土坑があり柱穴は検出できなかった。(P8)の柱穴は、厚く堆積した礫層を柱穴内の栗石と識別できず掘削しており、その深さは5cm前

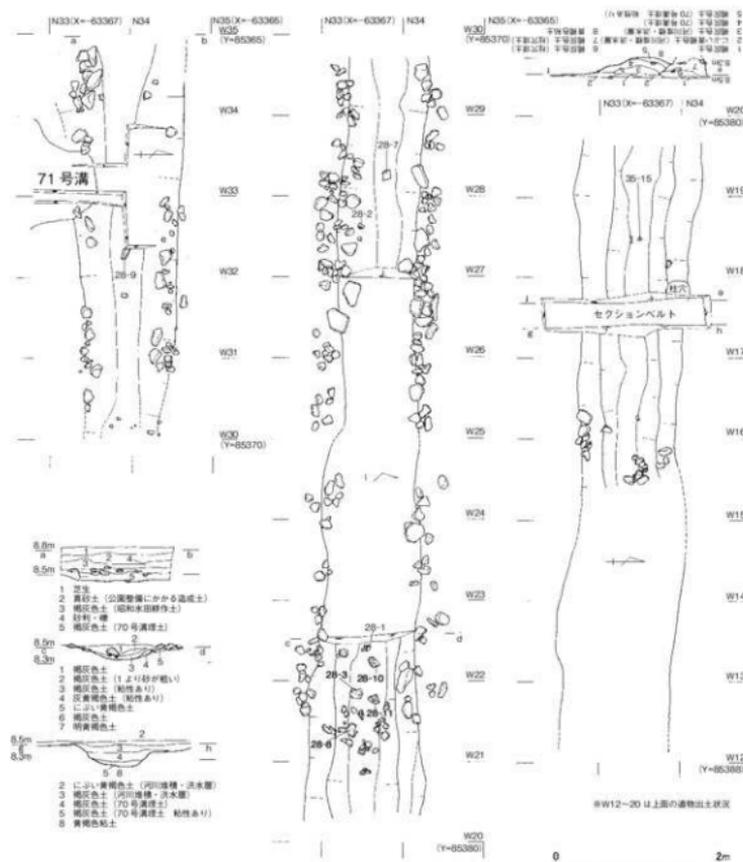


第26図 宮の後地区21号建物跡実測図 (S=1:60)

後である。ベルト内にかかり未調査となっている東半部分の調査で、掘形の確認が必要である。柱間は桁行き360cm、梁行き240cmである。柱間寸法は桁行きよりも、梁行きが狭いことから、建ちの低い構造が復元される。柱穴の掘形は径66～95cmの不整な楕円ないし円形をしている。内部には栗石と思われる礫を詰めている。礫は2～3cm角から10数cm角のものまでみられる。深さは断ち割りしたP4で10cm、底面の標高は8.4mである。大舎原地区の建物でみられた掘立柱からの建て替えは確認されなかった。

70号溝 (第27図・第28図)

(規模と構造) 方位はE-2°-Sをとる。検出長は25m、幅1.0～1.5m、深さ10～20cmである。底面の標高はW35ラインで8.4m、W30～20ラインで8.3m前後、W17.4～15.4ラインで8.2m前後である。西から東に向けてわずかに傾斜している。



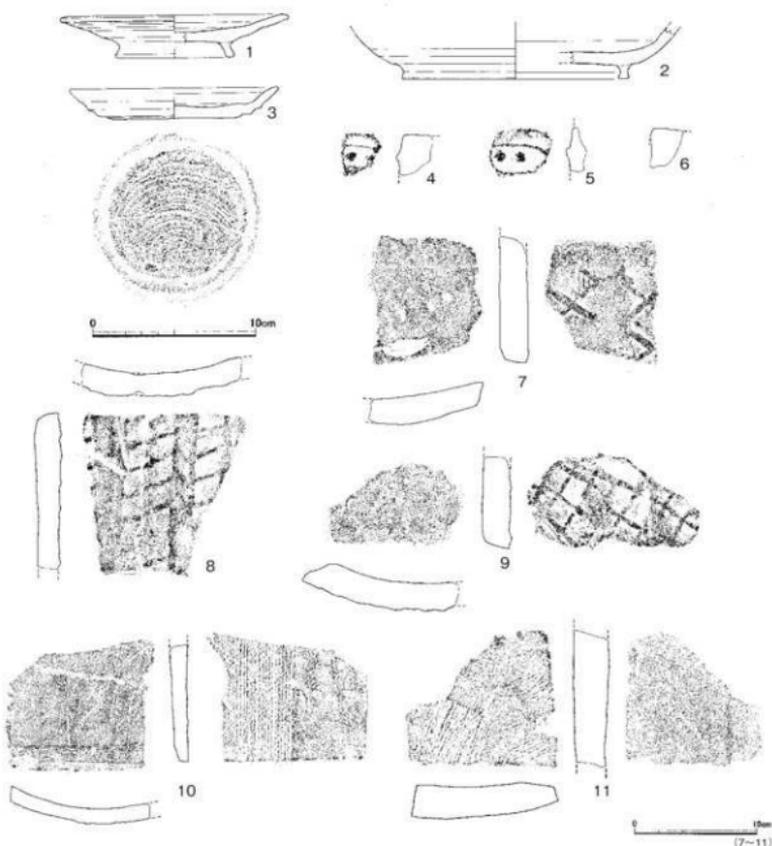
第27図 宮の後地区70号溝実測図 (S=1:60)

溝の両肩には石が1～2列程度並べてあったようだが、中近世の流路の影響により原位置を保つものはほとんどない。原位置を保っているW235ラインで内法幅は1.04mとなる。

(土層堆積状況) 埋土は礫を含んだ褐灰色土を主体とする。溝の上面には礫層が覆う。W17.4～15.4ラインでは、礫層が70号溝の内部まで落ち込んでいた。溝の埋土を押し流し堆積したものと考えられる。

(遺物出土状況) 須恵器、土師器の坏、皿の供膳具が出土している。

(出土遺物) 1、2は須恵器である。1は高台付皿で、皿の内面が摩耗しており、転用硯として使用されたものと思われる。2は、高台付坏である。3は土師器皿で、内外面回転ナデで、外面は底部から体部立ち上がりにかけて強くなでられる。底部は静止糸切である。4～11は瓦類である。4～6は軒丸瓦である。いずれも瓦当部の小片である。4・5は外区の珠文帯がわずかに残る。出雲

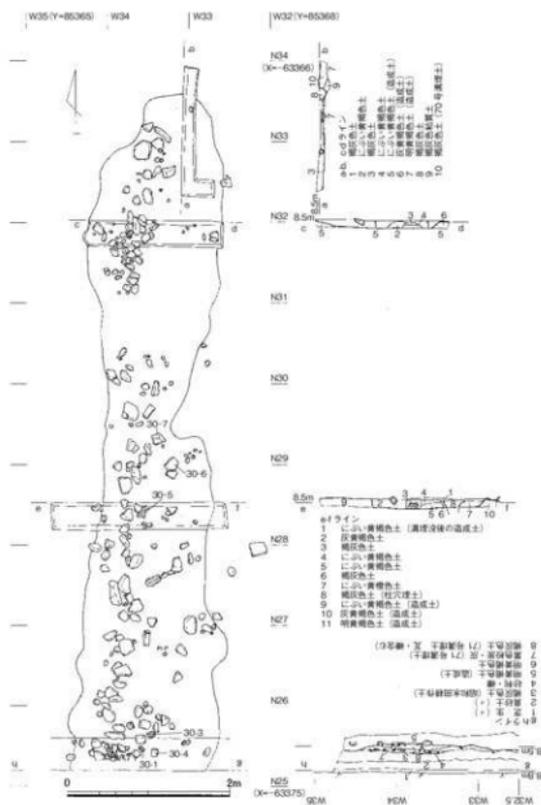


第28図 宮の後地区70号溝出土遺物実測図 (S=1:3、1:4)

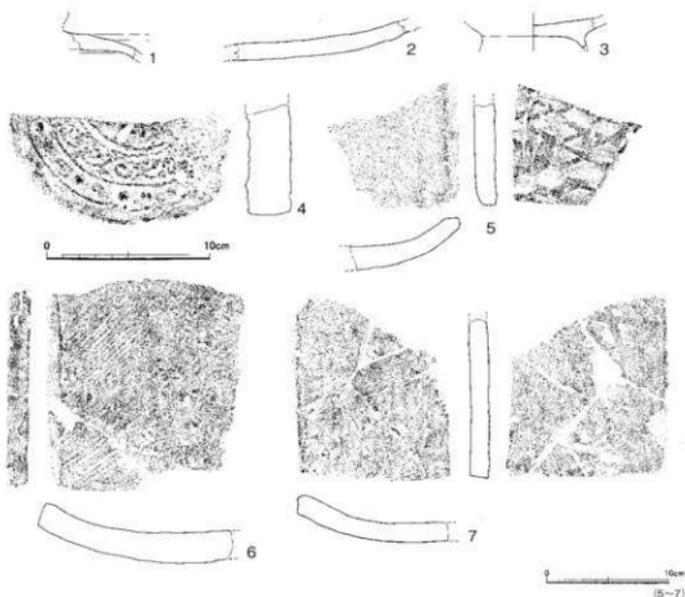
国分寺2類である。6は瓦当面が剥離しており文様は不明である。7～10は平瓦、11は鬘斗瓦である。7はいぶし焼き風のあまい焼成である。胎土中には粗い礫が混ざる。凸面成形は斜格子タタキである。格子のなかに縦方向の木目がみえる。凹面は側縁のみヘラケズリし、ほかは布目を残す。8と9は凸面成形を格子タタキとする。8は凹面をナデ調整し布目を消している。10は厚さ1.2cm前後の薄手の作りである。焼成は須恵質で硬い。凸面成形は縄タタキとする。凹面は端部側縁をヘラケズリし、ほかは布目を残す。11は鬘斗瓦である。焼成前に切断し裁断面をナデ調整した切鬘斗である。凸面成形は縄タタキし、離れ砂を用いている。凹面は側縁を幅2.5cmと広くヘラケズリする。

71号溝 (第29図・第30図)

W33.5ラインを主軸として南北方向に走り、70号溝と重複する。70号溝より新しい。長さ7.8m、幅は0.77～1.65mである。南側は調査区外まで延びる。断面は皿状で、深さ10cm前後と浅い。底面の標高は8.42～8.50mである。埋土には10cm角以上の石が混ざり、土器・瓦を多く含んでいる。N27.5ライン南側には木炭粉、灰がまとまってみられた。



第29図 宮の後地区71号溝実測図 (S=1:60)



第30図 宮の後地区71号溝出土遺物実測図 (S=1:3、1:4)

(出土遺物) 第30図1・2は須恵器である。2は溝東肩から1m東で出土している。1は坏蓋天井部の一部である。中心部にむかいやや立ち上がりが見られ、宝珠状つまみがつくものと思われる。2は高坏の坏部の底部の一部である。底部から体部への立ち上りの部分に凹線のような段がつく。3は土師器高台付皿ないし坏で、八字状に開く高台が付く。4は軒丸瓦の瓦当下半部の破片である。焼成は軟質であまい。複弁の一部とそのまわりの唐草文帯、珠文帯が残る。出雲国分寺2類にあたる。5～7は平瓦である。5と7は薄手の作りである。5は凹面の側縁をヘラケズリし、ほかは布目を残す。凸面成形は格子タタキである。6は凸面成形を格子タタキとし、離れ砂を用いる。凹面は側縁のみヘラケズリし、全体に糸切り痕を残す。7は凸面成形は斜格子タタキとする。凹面は側縁をヘラケズリ、他をナデ調整とする。

そのほかの遺構 柱穴を5基検出している。うち1基は70号溝に重複している(第27図e-ライン)。40cm×15cm以上、深さ14cm以上である。埋土には土師器の小片が多く混ざっている。時期は平安時代後期と思われる。

(6) 整地土下層の遺構

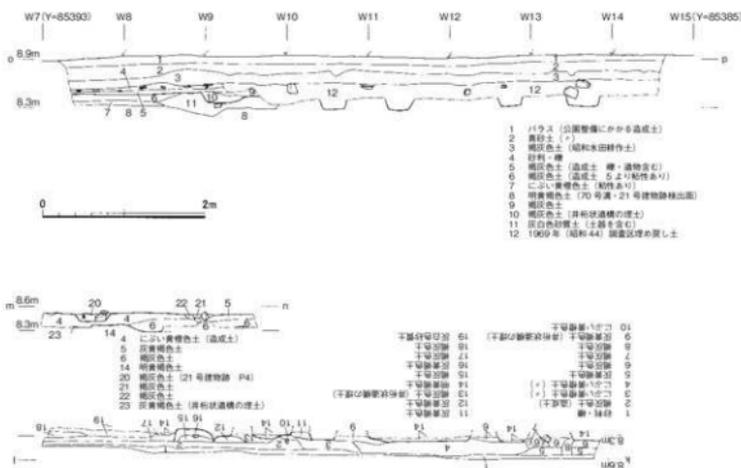
井桁状遺構 (第31図～第34図)

(検出過程) この遺構は1969年度調査区C区で検出されていた(第33図)。遺構に関して「概報」等に記載はない。「調査日誌」をみると「細かい溝が黄褐色土を井げた状に切り込んでいる。遺物はスエ ハジで特に新しいもの無し。性格不明」とある。

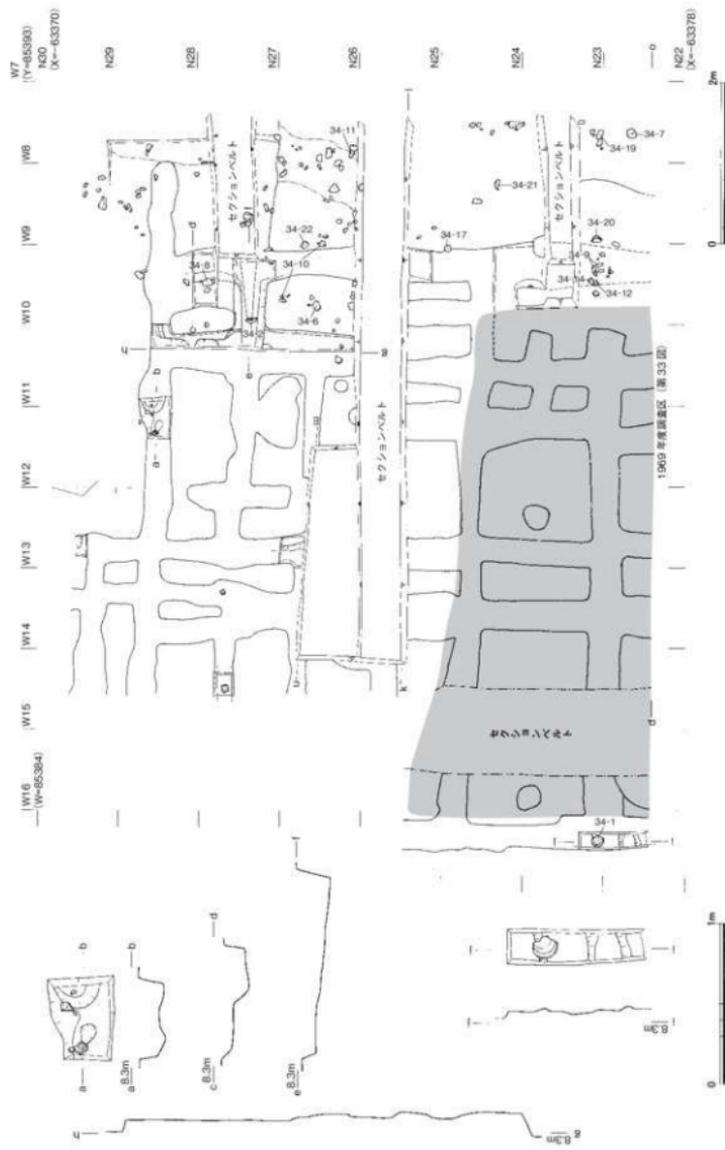
C区再発掘後、N30W15で遺構の検出を進めた。しかし整地土(厚さ5~15cm前後)上面では確認できず、この遺構が整地土の下に存在し、建物跡や溝跡よりも古いものとわかった。また南北溝は北にのび、あらたに複数の東西溝と交差していることも確認された。これらは切り合いによる新古がみられず一連の遺構と考えられた。そこで「日誌」の記述から遺構の名称を「井桁状遺構」とした。(位置)南北は北がN34.8ライン、南はN22.4ラインまで確認した。1969年度調査では、南19.6ラインまで延びている(第33図)。東西は東がW8、西がW15.5ラインまで確認した。北・東は明らかでないが、西側については、部分的な断ち割り調査の結果からみて、これ以上延びないと思われる。(規模と構造)幅20~50cm前後の溝が縦横に重なっている。1969年度調査では、東西方向と南北方向の溝に新古があり、南北方向の溝が新しいものとしている。じっさい、東西方向の溝が深く、南北方向の溝が浅くなっている。しかし、あらたに検出した部分で切り合い関係は確認できない。また、溝の深さも南北方向と東西方向で相対的な違いはみられない。溝の底面は、南北溝はW16.3ラインで段状に、W10.3ラインでは皿状になる。東西溝もN28.5ラインでは土坑状になっている。深さは3cm~10数cmまでで、底面の標高は8.2~8.3m前後である。

(土層堆積状況) 遺構は、W9ライン以东は灰白色砂質土に、以西は明黄褐色土に掘り込まれている。埋土は褐灰色土など一層で木炭粉や小礫が混ざっている。

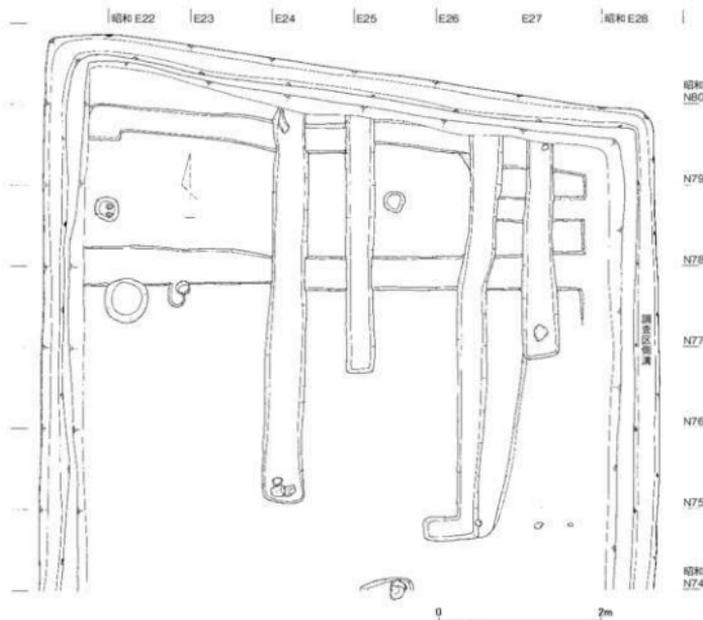
(出土遺物) 第34図1~22は、井桁状遺構および、井桁状遺構上部の整地土から出土した須恵器である。1は高台付坏である。底部外面に墨痕が付着するが、判読できない。2は、甕の口縁部である。3~9は坏蓋である。3はボタン状つまみ、4~8は宝珠状つまみをもつ。4は、口縁端部を下垂させる。5は、肩部外面の一部に線状の刻みが施される。9は、天井部が平坦になるように成形され、直線的な形態を呈する。10~13は坏である。10、11は口縁端部の内面がやや肥厚する。14~17、19は高台付坏である。15は、断面三角形の高台が付く。坏部内面には墨痕が観察されるが、



第31図 宮の後地区井桁状遺構土層断面図 (S=1:60)



第32図 宮の後地区井桁状遺構実測図 (S=1:30, 1:60)

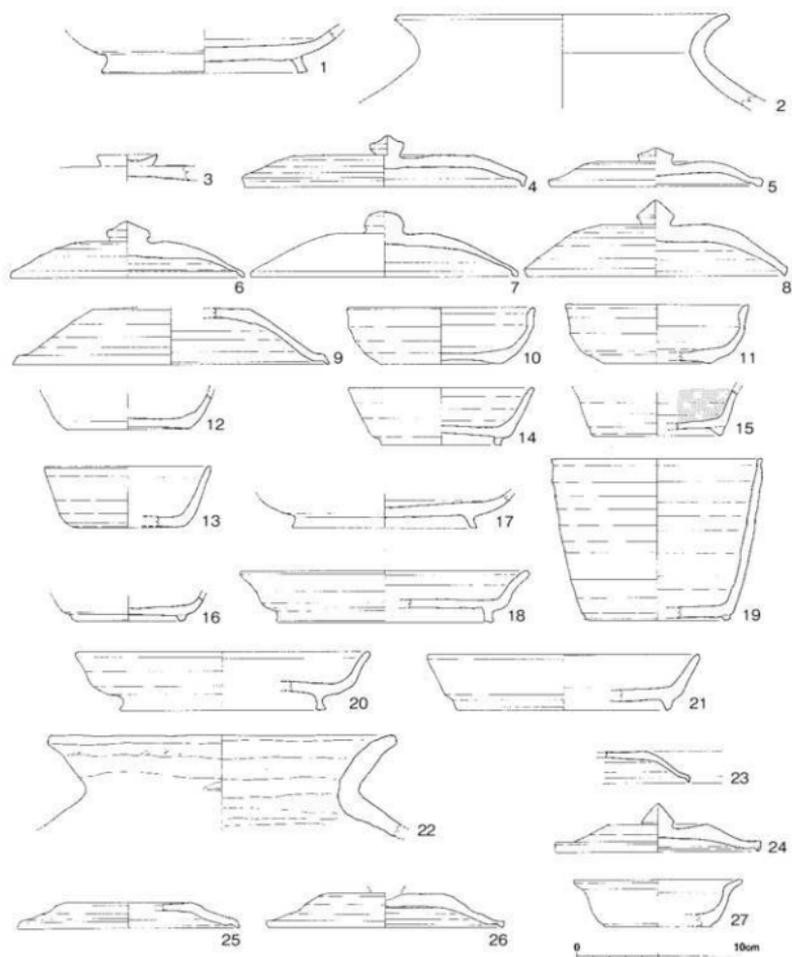


第33図 1969年度調査宮の後地区井桁状遺構実測図 (S=1:60)

摩耗はしていない。転用硯と思われるが摩耗がないため、墨入れであった可能性も考えられる。17は坏部内面が摩耗し、墨痕も観察されるため、転用硯である。19は、器高が高い坏部にやや小ぶりの高台が付く。18、20、21は、高台付皿である。20は、皿部内面がやや摩耗している。転用硯か。22は甕である。口縁部外面の一部に爪状の圧痕が残る。口縁部の内外面は粗くなられ、頸部外面にはヘラ状の工具痕が残るなど、やや粗雑なつくりである。23～27は整地土から出土した須恵器である。23～26は坏蓋である。24は宝珠状つまみをもつ。26には、宝珠状つまみが剥離した痕跡がのこる。内面は摩耗し、転用硯であると思われる。27は皿で、いわゆる灯明皿形土器である。

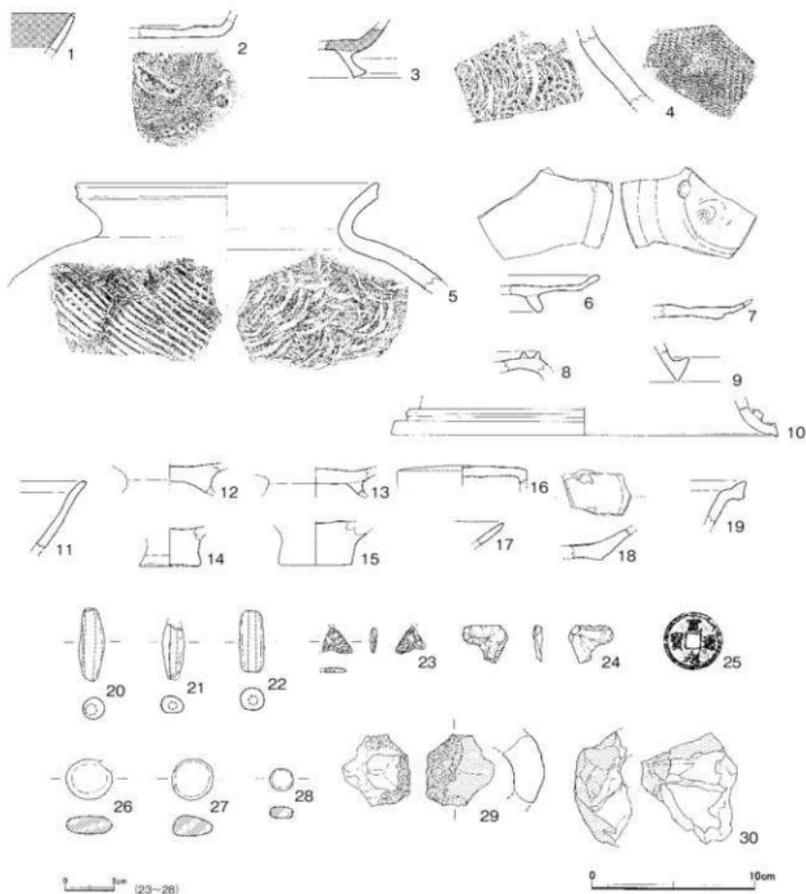
(7) そのほかの遺物 (第35図～第37図)

第35図1～5は須恵器である。1は坏の口縁部で内面に漆が付着する。2は坏の底部で、外面に切り離しのヘラの痕跡が残る。3は高台付壺の高台で、断面に漆が付着する。2、3ともに漆パレットとして使用されたものか。4、5は甕である。6～10は須恵器硯である。6、7は風字硯である。6は、皿状の硯面部に断面三角形の脚部を取り付けている。7は脚部および、硯面の口縁部が欠損しているが、おそらく6と同様の形態の風字硯であると思われる。硯面の底部は静止糸切りである。8～10は圈脚円面硯である。8は硯面から脚部が一体つくりのもので、硯面と脚部の境に2条の堤が取り付けられる。9、10は脚部である。10には、透かしの下端が残存している。11～15は土師器である。11は坏の口縁部で、全体的に風化が著しい。12、13は高台付坏なし皿で、八字状に



第34図 宮の後地区井桁状遺構及び整地土出土遺物実測図 (S=1:3)

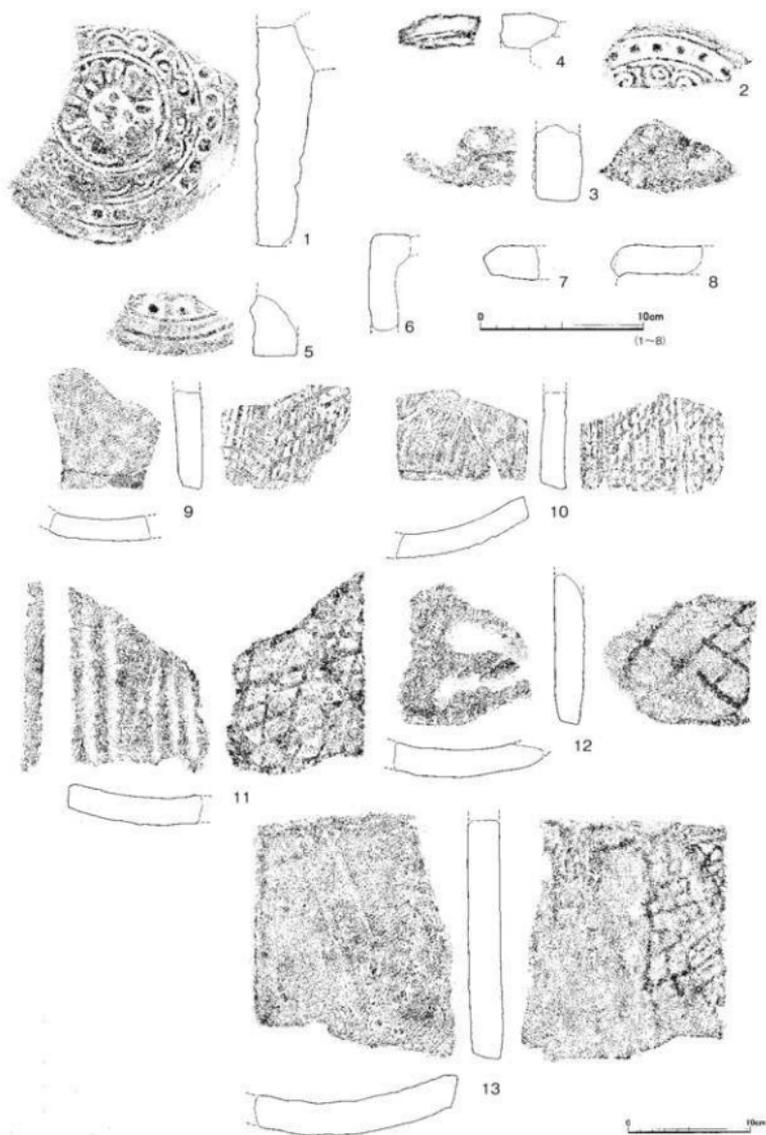
開く高台が付く。14、15は柱状高台付皿ないし坏である。16は灰釉陶器である。蓋か。17は越州窯系青磁の碗である。18は唐津系陶器の皿である。19は、内外面にオリブ灰色の釉がかかり、断面は灰白色を呈する。朝鮮半島系の陶磁器か。20～22は、土錘である。20、21は紡錘形、22は円筒形を呈する。21はやや小ぶりである。23は黒曜石製の凹基式石鏝である。基部の一部および刃部先端を欠損する。24は、二次加工の痕跡が残る剥片で、石材は玉髄である。25は古寛水通宝である。26～28は水晶製平玉である。26、27は径が1.7～1.9cmで、重量が3.28～3.29gと類似した形態を呈すが、



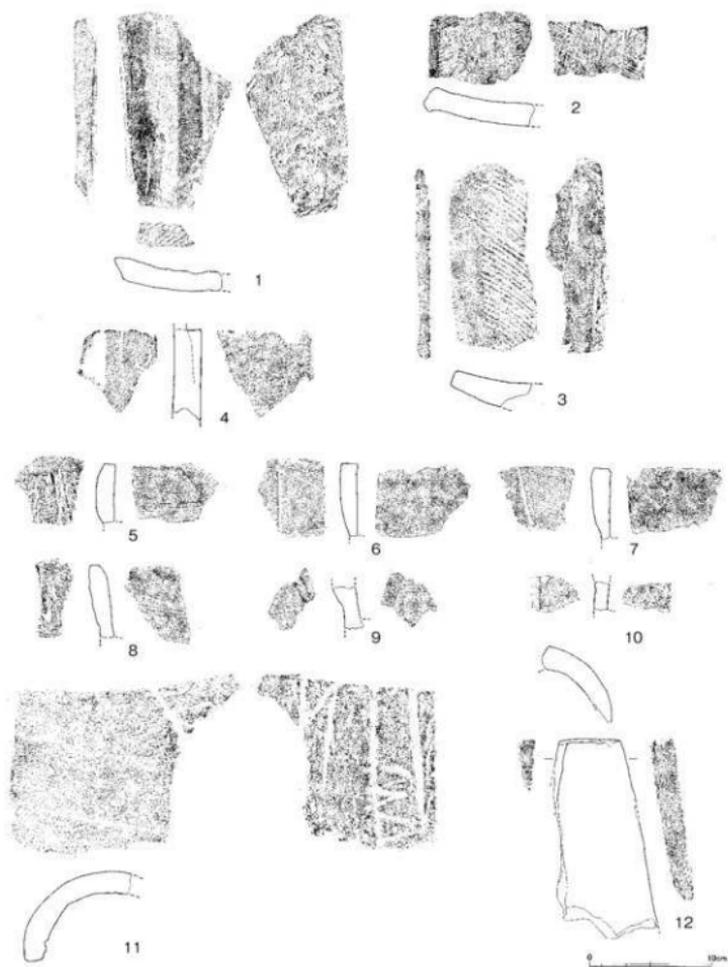
第35図 宮の後地区灰色砂利層ほか出土遺物実測図 (S=1:2, 1:3)

28は径1.0cm、重量0.74gとやや小ぶりとなる。29,30は羽口である。それぞれガラス質津が付着する。

第36図～第37図は瓦類である。1～9は軒丸瓦である。1～3は出雲国分寺2類にあたる。1は中房に1+4の蓮子を入れ、5葉の複弁、圏線で画した外に唐草文帯を巡らす。外区は珠文帯、外周に細い圏線が巡る。2は唐草文帯と外区の珠文帯が巡る。外周は平縁である。3は瓦当面が剥落し文様の痕跡しか見えない。4は分類不明、5は出雲国分寺3類である。外区の珠文帯のみ確認できる。6は文様不明、7と8は丸瓦部のみである。7は先端を楔形とする。9～13は平瓦である。9と10は硬い焼きで、凸面成形を斜格子タタキとする。凹面は側縁のみへラケズリし、他は布目と糸切り痕を残している。11～13は軟質のあまい焼成である。凸面成形は格子タタキとする。11の凹



第36図 宮の後地区出土瓦実測図(1)(S=1:3, 1:4)



第37図 宮の後地区出土瓦実測図 (2) (S=1:4)

面には布目と幅1.2～1.3cmの段がみられる。13は離れ砂を用いている。

第37図1～3は平瓦である。1は薄手の作りである。凸面成形は浅い縄タタキとする。凹面は側縁をヘラケズリする。幅1.5～1.7cmの模骨痕状の段がみられる。端部を平行タタキする。2は須恵質の硬い焼きである。凹面成形は縄タタキし一部をナデ調整で消している。凹面は側縁のみヘラケズリし、他は布目を残している。3は軟質のあまい焼きである。凹面は縦方向のナデ調整をする。凹面は側縁のみ幅2.5cm前後、ヘラケズリする。他は糸切り痕が残る。4～12は丸瓦である。4～10は有段式である。全体のわかるものはない。4と5はやや軟質の焼成である。玉縁は基部の高さ1.3cm、長さは4.7cm～5.9cmである。凸面は端縁と側縁をヘラケズリする。凹面も端縁と側縁をヘラケズリする。11～12は無段式である。いずれも軟質で焼成はあまい。11は凸面は風化のため調整不明、凹面は布目を残している。12は凸面をナデ、凹面は糸切り痕を残している。

(8) 総括

土器の様相 井桁状遺構は内部調査を一部しか行っていないため、出土遺物の量は少なく、なおかつ小片が多いため、不明瞭な点が多い。高台付坏の高台の様子をみると高くしっかりとしたもので、やや古めの様相を呈する。また、坏底部外縁に高台を貼り付けるものもある。同様の高台をもつ須恵器は整地土からも出土しており、井桁状遺構とその上層の整地土の間に明確な時期差はみられない。これらよりも新しい様相を呈するものが、70号溝出土の土器である。第28図1の須恵器皿は、古曾志平廻田1・2号窯灰原出土資料に類似しており、おおむね9世紀末から10世紀初頭頃と考えられる(島根県1989)。そして、71号溝出土の土器がもっとも新しくなり、時期は平安時代前半期頃である。

遺構の変遷と時期 整地土下層で見つかった井桁状遺構は、整地土中に、出雲国守第4～5型式の須恵器を含んでおり、8世紀末から9世紀初頭には埋めだてられていることが分かる。その整地土上面に、礎石建東西棟の21号建物跡、東西溝の70号溝が築かれている。21号建物は遺物が無いため、時期は明確でない。70号溝は、出土遺物から9世紀末から10世紀初頭頃に埋められたものと考えられる。70号溝の埋没後に南北溝である71号溝が造られる。時期はおおむね平安時代前期頃と考えられる。調査区は大舎原地区を中心とする「国司館」の南端部と想定されている。今回、検出された遺構は、同地区の変遷ではⅡ期に相当することになる。小期では井桁状遺構がⅡ-1期、21号建物跡・70号溝がⅡ-2期、71号溝がⅡ-3期である。

井桁状遺構 類似する遺構が、長岡京、大宰府で検出されている。長岡京水垂地区の小溝群は、左京五条三坊四町、左京六条三坊一・二・七・八町に広がる。小溝群は、基本的に建物廃絶後に造られている。一定間隔(約2～3m)ではほぼ東西あるいは南北方向に平行し、格子状になる部分もある。これらを畑作にともなう「中近世掘り小溝」と同じ性格であるとし、この地区に大規模な菜園遺構が存在したと想定している(吉崎1994、京都市1998)。太宰府では14条路と15条路のあいだで、9世紀代の大規模な格子状の溝が確認されている。これを長岡京の例から、畑痕跡の可能性があると、格子状をしているのは、若干時期が異なる東西の畑と南北の畑が交差した結果とする(太宰府市2006)。井桁状遺構を二つの遺跡の例と比較すると、溝の規模や埋土、遺物の出土状況などで類似点はみられる。しかし、井桁状遺構は狭い範囲でおさまり、溝の間隔も一定でなく、溝が密に重なる部分もあり様相は異なっている。井桁状遺構が検出されたのは、「国司館」の一角にも想定

される地点であり、南には後方官衙の施設群が展開している。こうした施設配置から、この遺構が畑作にともない、周辺が生産活動の場になっていたとは考えにくいものと思われる。

成果と課題 今回の調査で、あらたに建物跡、溝跡が確認され、「国司館」の施設配置や変遷を検討する貴重な手がかりが得られた。これまで、国司館の敷地南限は東西大溝SD034で区画されるものと考えられていた。これからの調査で、SD034と70号溝との関係を明らかにする必要がある¹⁷⁾。整地土下層で見つかった井桁状遺構の性格もさらに検討が必要である。2008年度におこなわれた本調査区東側の調査でも、整地土下層に遺構が存在することが確認された。1974年度環境整備事業にともなう調査結果（第3章第2節）からも、この宮の後地区北半は、古代の遺構面が2面存在する可能性が高い。下層遺構の広がり、性格を明かにするなかで、井桁状遺構についても再検討していく必要がある。また、平安時代後期の遺構は柱穴数基と少なく、遺物も微量である点が注意される。当該期の小柱穴が多数検出される大舎原・日岸田・堂田地区とは様相が異なっている。本調査区の東でおこなった2008年度調査や、1974年度環境整備事業にともなう調査の状況から、平安時代後期には、この地区が生産活動の場に変わっていることが考えられる。当地区の調査は、今後も継続しておこなう計画であり、こうした課題をひとつひとつ明らかにしていく必要がある。（間野・中野）

注

- (1) 第11図は「史跡出雲国府跡」第57図(5-57)を訂正したものである。訂正したのはⅡ区平面図と全体のグリッド割である。Ⅱ区平面図は縮尺1/20の図面5枚からなる。これらを組み合わせる際に南北方向のラインを間違えて、図面で1cm(遺構では20cm)余分に重ね合わせてしまった。このため、5-57は、E27.8からE28ラインまでの図が消えたものになっている。全体図5-57・58とは別に示したSD020(鑑定政庁後校正殿)建物の図面5-64・5-65も訂正が必要となる。これについては、あらためて訂正したものを示したい。また、グリッド割は、5-68の原因に記入されていたグリッド杖と日誌の記載から、ずれていることがわかった。
- (2) 第17図は、第49トレンチの測量結果をもとに、5-59に示した標高を修正したものである。なお、5-59ではⅡ区西壁としているが、Ⅱ区東壁の誤りであり訂正する。
- (3) 第76図で宮の後地区との位置関係は修正している。しかし、宮の後地区A~D区も、位置が単標値で確定できていないので、あくまで暫定的な図面である。
- (4) 鳥根県立古代出雲歴史博物館角田幸徳の教示による。県内では中祖道跡Ⅱ区(大田市仁摩町)に類例がある。(鳥根県2008a 第34図128)
- (5) 1970年11月21日の日誌による。緑輪陶器はⅡで9世紀後半の京都系である。(鳥根県2008b 第69図27)。
- (6) 山陰地方の古代の扇は鳥根県2004で集束した。その後、鳥根県内では青木遺跡(出雲市)、里方本郷遺跡(岡)で出土している。青木遺跡は8世紀前葉~9世紀前葉の檜扇(鳥根県2006 第137図W081)、里方本郷遺跡は奈良・平安時代の扇(鳥根県2008c 第81図182)と報告されている。
- (7) 2008年度調査で、本調査区の東側を調査した。調査の結果、70号溝はさらに東に5m延長することが分かった。

引用・参考文献

- 京都市埋蔵文化財研究所1998「水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊」京都市埋蔵文化財研究所第17冊
- 鳥根県教育委員会1989「第5章第3節古吉志平懸田遺跡」『古吉志遺跡群』
- 鳥根県教育委員会2004「第5章第3節(4)古代の扇」『史跡出雲国府跡2』
- 鳥根県教育委員会2006『青木遺跡Ⅱ 弥生~平安時代編』
- 鳥根県教育委員会2008a「第3章中祖道跡の調査」『中祖道跡 ナメラ道遺跡』
- 鳥根県教育委員会2008b「第4章第4節六所協遺跡の調査」『史跡出雲国府跡5』
- 鳥根県教育委員会2008c「里方本郷遺跡・山持遺跡4」
- 大宰府市教育委員会文化財課2006「大宰府条坊跡(西鉄二日寺停車場跡)の発掘調査成果(中間報告)」
- 辻祐司1998「古代都城出土の扇」『財団法人京都市埋蔵文化財研究所研究紀要5』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 山本浩1991「第五 出雲」『新修出雲国分寺の研究 第四巻』吉川弘文館
- 吉崎伸1994「長岡京地の土地利用-水垂地区の小溝群について-」『文化財論集』文化財論集刊行会(奈良大学文学部考古学研究室内)

第3章 1972～1974年度環境整備事業にともなう調査他

第1節 はじめに

この章は、これまでの調査報告の補遺である。第2節は、1972～1974年度に行われた環境整備事業にともなう調査報告である。このときの調査は整備報告書として刊行されているが、遺構・遺物に関する記載が充分でなく不明な点も多かった。当センターでは、1968～1970年度調査資料の再整理作業と平行して、当該事業にかかる出土遺物の実測作業を進めてきた。今回、出土遺物については既報告書掲載分も含めて、あらためて再実測し収録した¹⁾。また、あらたに遺構図の作成をおこなうとともに、遺物の出土地点についても可能な限り特定している。第3節は1974年度に枉北道に推定されている市道でおこなわれた確認調査の報告である。調査は、水道管理設工事が計画されたことによるもので、島根県文化財愛護協会が調査主体となりおこなわれた。第4節は、1989～1990年度におこなわれた土地改良総合整備事業にともなう調査報告である。同事業に関わる調査結果は、島根県1988で報告されているが、本報告はその後におこなわれた調査に関するものである。とくに1989年度調査箇所は、正西道に推定されている道路部分にあたっている。各節とも紙数の関係もあり、事業目的や経緯等については詳しく触れていない。既報告書を参照いただきたい。(問野)

第2節 1972～1974(昭和47～49)年度環境整備事業にともなう調査

(1) 調査に至る経緯

環境整備事業は1972(昭和47)年度から1974(昭和49)年度の3ヵ年度にわたり実施された。事業2年目となる1973年度に行われた東西素掘溝(SD005)、南北素掘溝(SD004)の復元工事中に、まとまった量の遺物が採集された。このため、翌1974年度、北側素掘溝部分について工事と平行として発掘調査を実施することとなった。調査は1974年12月から1975年1月にかけて行われた²⁾。

(2) 北側素掘溝の位置と層序(第3図、第38図～第41図)

北側素掘溝は、1969・70年度調査で検出されたSD034を推定復元している。調査で確認されているのは、東端がCM12まで、西端はCM29付近で北に屈曲している³⁾。未調査部分については想定中軸線から対称に折り返し復元している。しかし、復元溝は、実際の遺構位置とは一致しておらず、未調査部分で推定復元部分となる49mラインから東では完全に外れてしまっている⁴⁾。

北側素掘溝は幅2.5m、総延長170mの規模である。調査区は、コ字形につながる一連の溝を、東から東溝・東西溝・西溝と呼称した。東西溝はさらに1～5区に分けている。

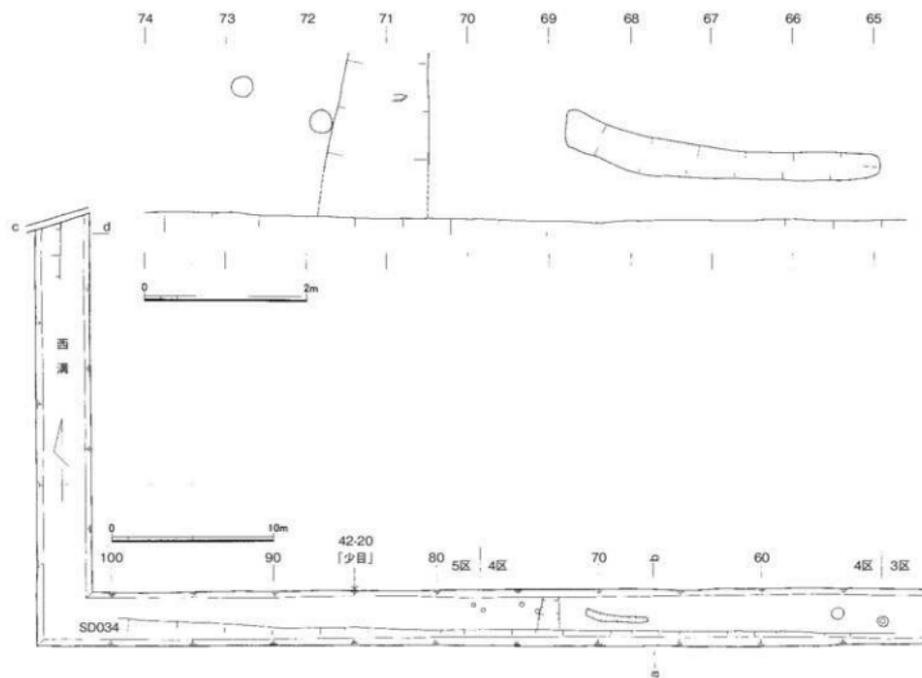
基本層序は上から順に盛土(第1層)、耕土(第2層)、礫(バラス)層があり、その下が遺構面をなす粘土層である。遺物は礫(バラス)層のほか、遺構面をなす粘土層上部からも出土している。

(3) 検出した遺構と遺物(第38図～第46図)

東溝調査区 遺構は検出していない。礫層下には灰や炭化物層が2～5cmの厚さで広がる。白磁や土師器片が混ざっており、平安時代後期の所産と考えられる。第42図21は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。

東西溝1区 15mライン付近で打ちこまれた立杭6本を検出した。これは水田畦畝の保護杭の可能性はある。第42図4・5は1区14.5mラインで出土した。無高台の坏で体部は丸みをもつ。4は口縁部が短く屈曲する。第43図の和鏡は地表下45cm、灰黒色土層（第40図第4層）から出土した。いわゆる擬漢式鏡で、日月山水図鏡と呼称される鏡（佐藤1996）である。「環境整備報告書」では、「室町時代初期のものともみられる」とされているが、記年銘をもつ類例などから室町時代後半のものと思われる。鏡については、(7)総括で詳しく述べる。

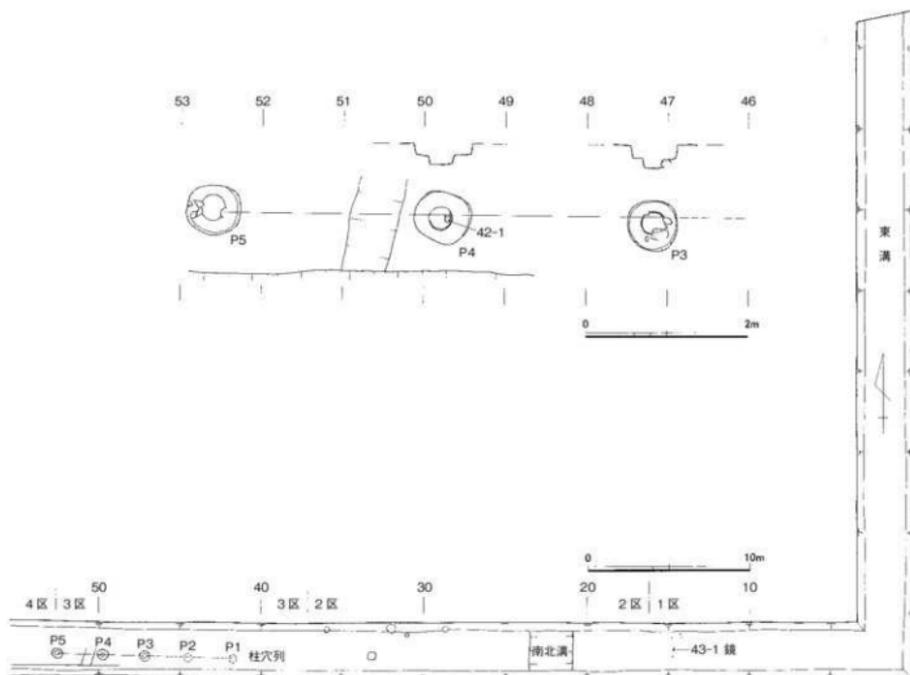
東西溝2区 大溝1条、柱穴4、土坑1基を検出した。大溝は21~24mラインを南北方向に走る。規模は幅2.7m、深さ16cm前後である。調査区（復元溝）の南壁面では、西側掘形が不明瞭になっている。埋土は炭化物の多い黒色土（第19層）で須恵器片、平瓦が出土した。掘形西側は上面を礫層が厚く覆っている。土坑（柱穴）は33mライン西で検出した。52×46cmの方形をし、深さは12~13cmある。埋土中に、炭化物が多く残存していた。炉跡の可能性もある。この土坑からは第42図2・3が出土した。2は須恵器坏、3は土師器の甕である。調査区からは第42図6・7の須恵器長頸瓶、第44図の瓦類が出土している。長頸瓶は頸部内面に漆が付着しており、運搬容器と考えられる。7



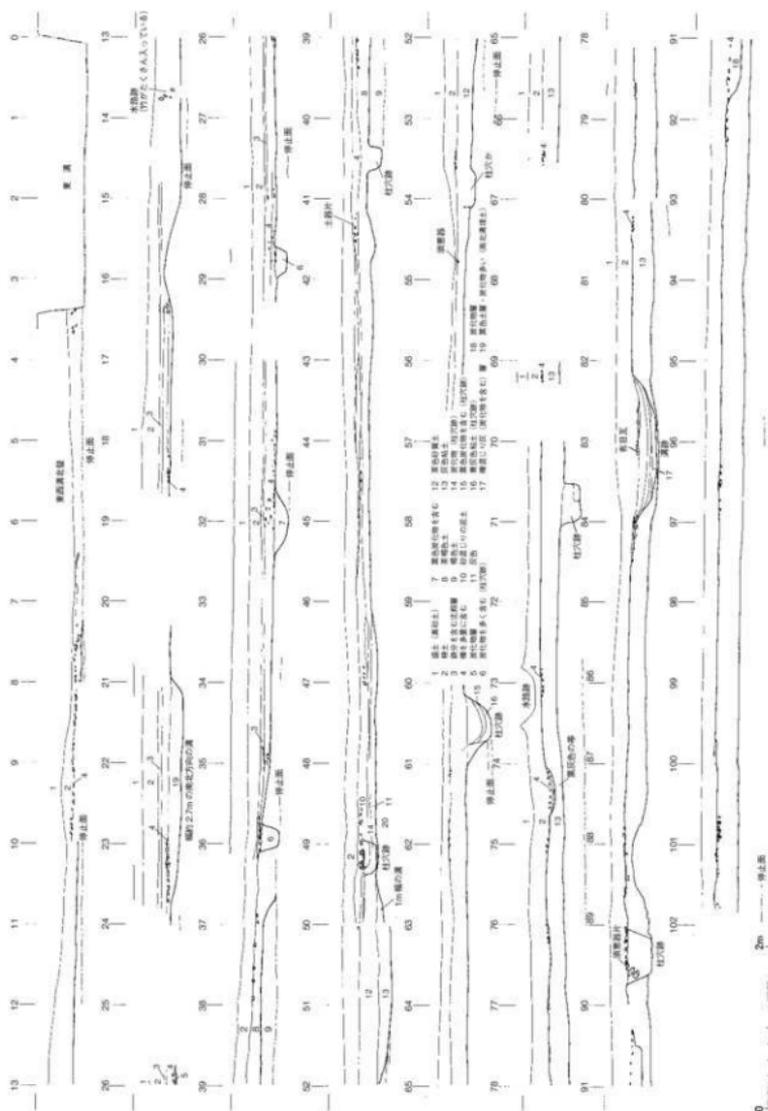
第38図 環境整備事業1974年度調査遺構実測図(1) (S=1:60, 1:300)

は、破断面にも漆が付着しており、壺を破砕した後に漆の取り出しを行い、使用している事がわかる。第44図1は軒丸瓦、2・3は平瓦である。軒丸瓦は瓦当部を欠き、凹凸面にわずかに補強粘土がみられる。2・3は凸面に斜格子タタキがみられる。凹凸面側縁は面取りする。

東西溝3区 柱穴列、溝1条を検出した。柱穴列は41～53mライン間にあり東西4間からなる。このうち東の2穴は検出面が下がったため痕跡しか確認できなかった。柱穴は直径60～70cmの円形で、深さは30cm前後ある。柱根は残っていなかった。柱穴の埋土は、中央に径30cm程度の柱痕跡が認められ、その周囲に根巻き石が詰められていた。柱間寸法はP3-P4が260cm、P4-P5は280cmである。P4からは第42図1が出土した。須恵器皿である。口縁部は外反する。またP5内には平瓦片が混ざっていた。溝はP4-P5間を北東から南西方向に走る。幅は56cm前後、浅い溝である。SD034と重複するが前後関係は不明である。また調査区北壁49.4mライン西で幅1.0m、深さ10cmの溝の断面を確認している。この調査区からは第42図8・9、第45図1～3が出土している。8は須恵器坏蓋で宝珠状つまみを持つ。9は無高台の坏身である。第45図1は平瓦である。いぶし焼き風のあまい焼成である。凹面は未調整で布目を残す。凸面成形は、変形格子タタキで、離れ砂が



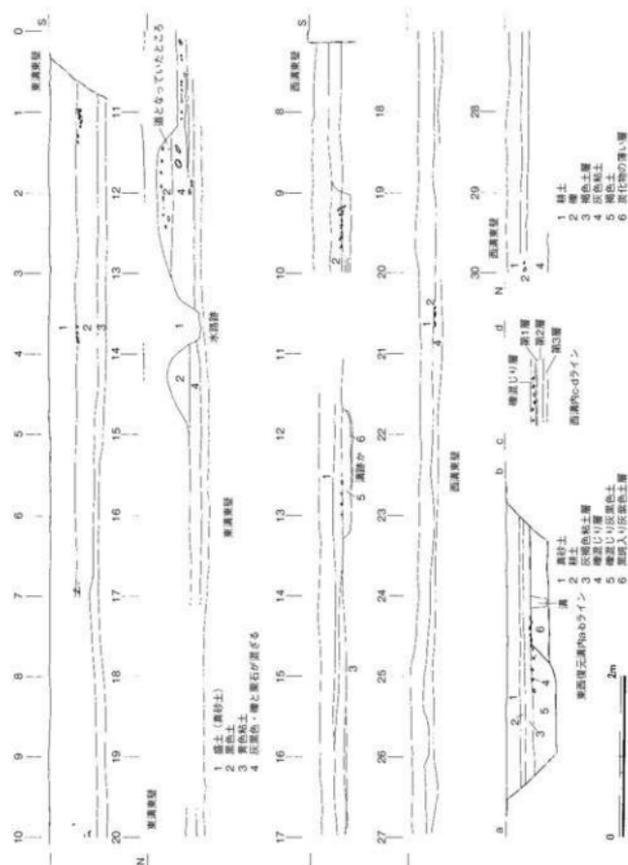
第39図 環境整備事業1974年度調査遺構実測図(2) (S=1:60, 1:300)



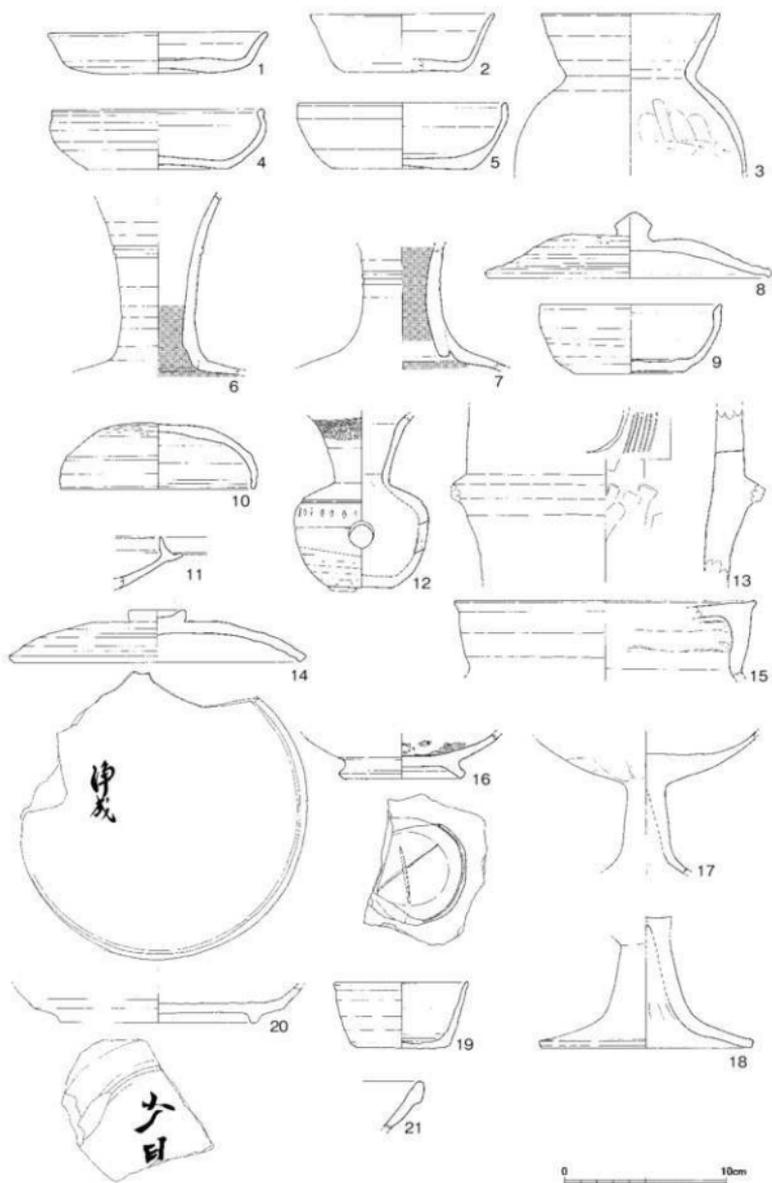
第40図 環境整備事業土層断面図(1) (S=1:60)

用いられている。2は出雲国分寺2類の軒丸瓦である。3は有段式丸瓦である。須恵質で基部高1.0cmである。筒部凹面側の側縁を面取りする。

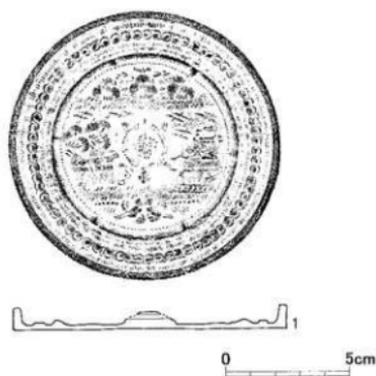
東西溝4区 東西溝1条、南北溝1条と柱穴4基を検出した。東西溝は65～69mライン南北の調査区中央に位置する。規模は幅34～48cm、深さ20cmである。西端が北に向けて弧を描く。この溝は遺構面をなす粘土層下で検出されている。南北溝は、ほぼ71mラインを中軸線とする大溝である。幅は北端で1m、南端で1.3mある。検出面からの深さは10cmである。溝の南端は1970年度調査区には入っていない(第38図の点線部)。この溝の西に柱穴4基がある。径25～28cm、深さ20～25cmである。なお、調査区北壁82.2～84mラインで大溝の断面を確認している。第42図10～12は古墳時代後期の須恵器である。10は完全な形で出土している。口径11.8cm、天井部は丁寧な回転ヘラケズリ調整である。11は坏身の口縁部である。12は甕である。底部は平底で別の須恵器片が着着している。13は



第41図 環境整備事業土層断面図(2) (S=1:60)



第42図 北側素掘溝出土遺物実測図(1) (S=1:3)



第43図 北側素掘溝出土遺物実測図(2)(S=1:2)

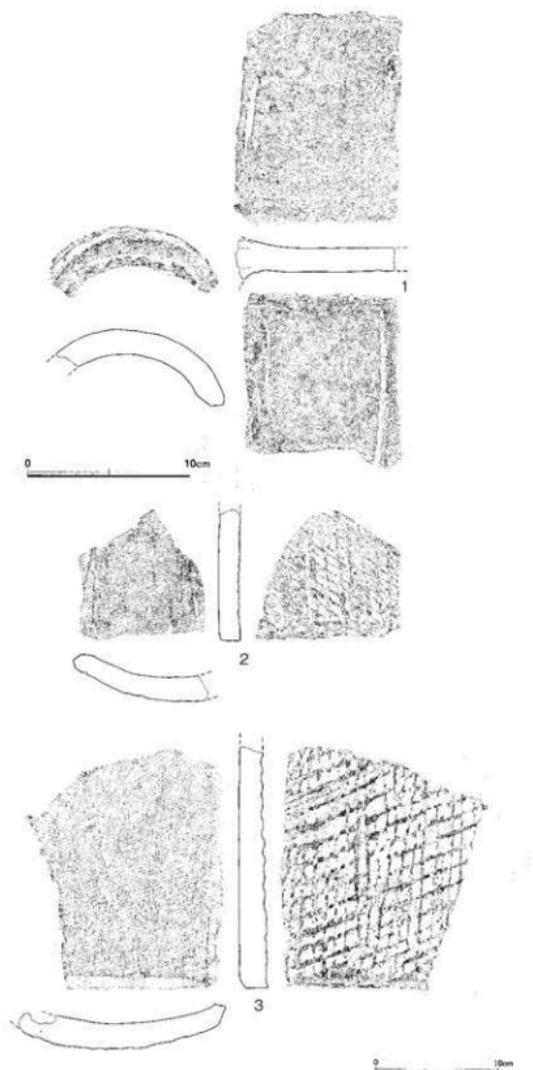
円筒埴輪である。タガは下方に突出する。外面はナナメハケ、内面に角柱状の当て具痕が残る。14は須恵器坏で内面に「浄成」の墨書がある。55m地点のSD034の中から出土している。15と16は4区中央から出土している。15は円面視、16は漆のパレットとして使用された高台付坏である。

東西溝5区 4区との境、75m付近で柱穴1基を検出した。出土遺物は第42図17～20がある。17、18は古墳時代中期の土師器高坏である。いずれも調査区の壁面精査中に出土している。19は須恵器坏である。口径8.1cmの小型品である。20は5区85m付近で出土した。須恵器高台付坏で、底部外面に「少目」の墨書がある。

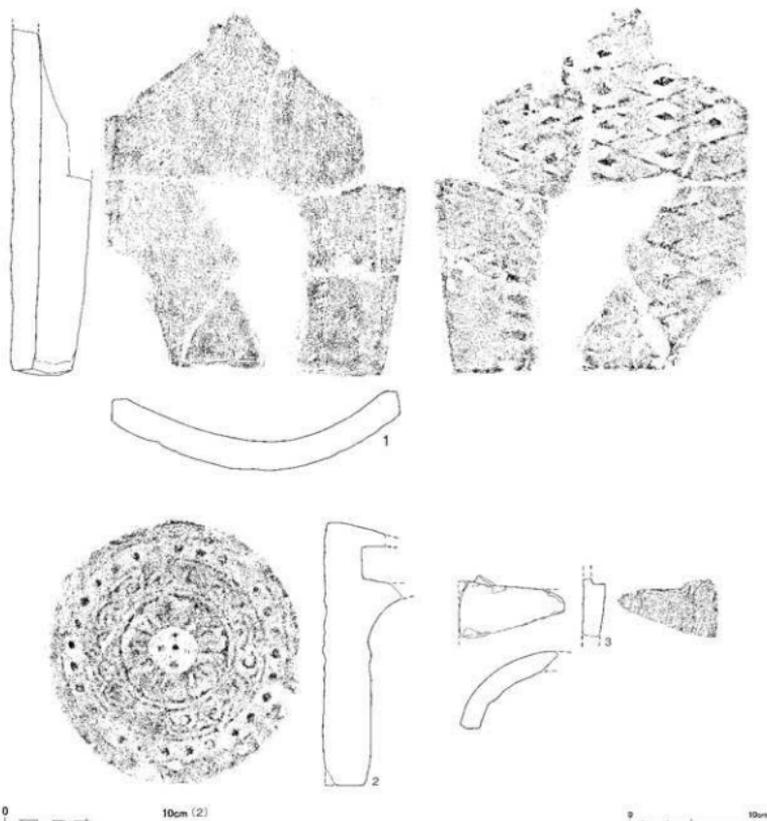
西溝調査区 調査区(溝)北隅に近い中央部分で遺構を検出している。この遺構を既報告では、SD034に連なる溝の一部と認識している。しかし、遺物整理の結果、「西溝北隅」と注記された古墳時代中期の遺物がまとまって確認された。西溝北隅の遺構は、当該期の堅穴住居ないしは溝と考えられる。遺構の掘形は東西復元溝西南隅から23m北を南北方向に延びる。規模は南北3.4m、東西1.1m以上、深さ20cmある。埋土は3層からなり、いずれも炭化物を含んでいる。第46図1～3は須恵器坏である。坏蓋は口縁端部が外反し、頂部との境に稜をもつ。頂部は丁寧なヘラケズリである。坏身は口縁部がやや内傾気味に立ちあがる。底部外面はヘラケズリ調整である。4～20は土師器である。4～7は土師器坏で、4のみ口縁端部が外に折れ曲がる。内外面は手持ちヘラケズりする。底部の形状は7のみ丸底とわかる。8と9は甕である。8は僅かに複合口縁の名残がある。10は壺の頸部である。内面に絞り痕が残る。器壁は厚い。11は小型丸底壺と思われる。口縁部は逆八字に開き、器壁は薄く仕上げられている。12は直口壺である。13～20は高坏である。14は口縁部が大きく開き、坏部との境に稜をもつ。16は外面に赤色顔料が塗付される。このほか、東壁11.7～13.3mラインでも、深さ10cmの溝の断面を確認している。

(4) 東西復元溝工事にともなう出土遺物(第47図～第56図)

1973年出土「東西溝バラス」と注記されている。発掘調査で検出したSD005の推定復元工事で出土したものである。注記にはバラス層とあるが、遺存状態が良いものも含まれており、遺構・遺構面から出土した可能性が考えられる。



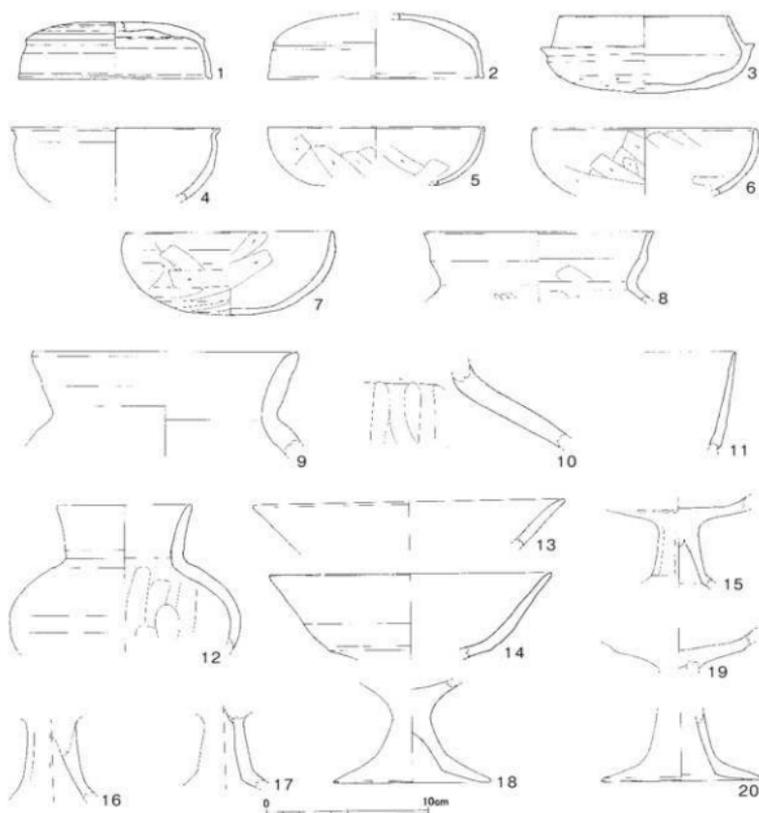
第44図 北側素掘溝出土遺物実測図(3) (S=1:3、1:4)



第45図 北側素掘溝出土遺物実測図(4) (S=1:3、1:4)

須恵器(第47図～第52図) 第47図は坏蓋である。つまみの形態は、1～23は擬宝珠状、24～27は頂部が窪むボタン状、28は輪状である。口径は121～22.5cmのものまでである。第48図は坏身である。1～15は高台を有する。1は体部にやや丸みをもつが、その他は外傾して立ち上がる。16～29は無高台の坏身である。16～24は口縁部が短く屈曲する。第49図1～10は無高台をもつ皿である。8、9は口唇部に段が付く。11～20は無高台の皿である。20は口縁部が短く屈曲する。内面に油煙と思われる付着物がみられる。21から26は高坏である。21は円孔が脚部上位の三方向に穿たれている。第50図は甕である。1・2・7は外面に波状文を施す。4は頸部外面に「卍」のヘラ記号を施す。第51図1～10は甕である。4は平底の底部をもち、口縁部は外に開く。5・6は短頸甕である。5は蓋で宝珠状のつまみを持つ。口縁部は内傾し口唇部は平坦である。7は肩部に把手が付く。11の長頸瓶、12の甕は運搬容器で内面に漆が付着している。第52図は鉢である。12以外は口縁部が短く屈曲している。1・2は底部に高台が付く。3・11・13は体部に把手が付く。

墨書・刻書土器(第53図1～9) 2は今回の整理作業で見つかった。墨書は頂部ないし底部の外



第46図 北側発掘出土遺物実測図(5) (S=1:3)

面にある。1は「長弁」、3は「本」「阪」、4は「石□」、5は「□[評カ]」、6は「尔」、である。9は内面に「由」のスタンプがある。湯峠窯産である。

転用硯・硯(第53図10~14) 10~12は転用硯である。10・11は内面に墨痕、12は内面に研磨痕がみられる。13は圈脚円面硯、14は風字硯である。

土師器(第54図1~5) 1は坏で内外面に赤色顔料が塗布されている。外面に6条以上の凹線がみられる。2・3は高坏である。3は脚部を多面体に面取りする。内外面に赤色顔料が塗布されている。4・5は皿で底部に八字に開く高台が付く。平安時代後期の所産である。

陶磁器(第54図6・7) 6は黒色土師の碗である。全体に風化しているが、内面と外面の口縁部付近を黒色処理している。7は白磁碗Ⅱ類である。

金属器生産関係遺物(第54図8) 8は埴塙か取瓶である。被熱により外面は赤く、内面は黒くなっている。

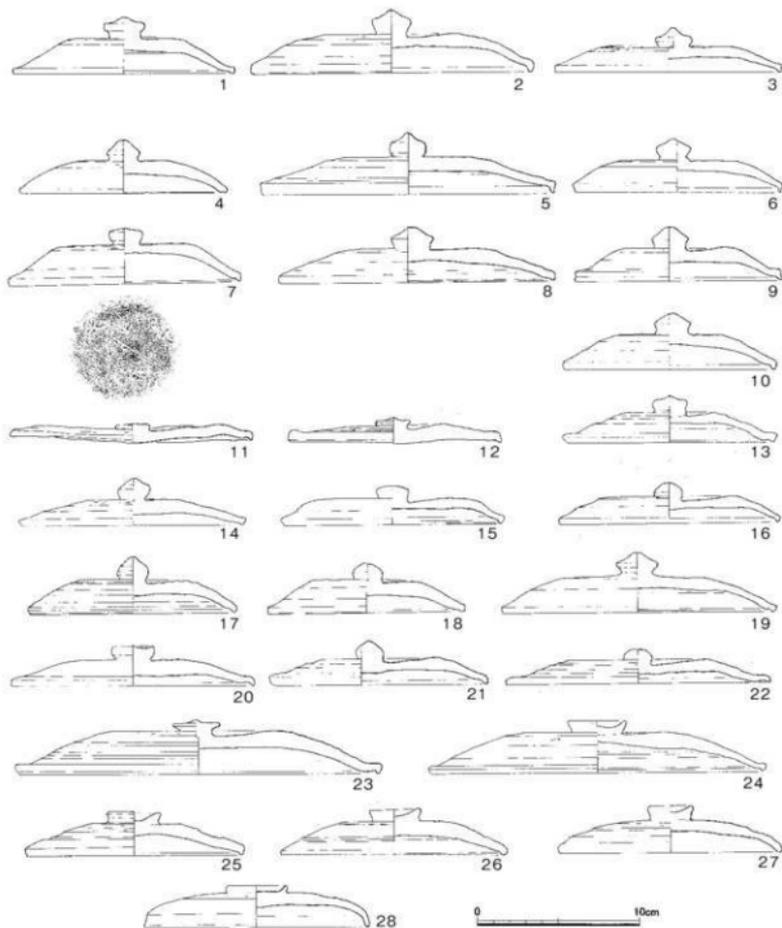
製塩土器(第54図9~15) いずれも口縁部の破片である。外面に指頭圧痕を残し、内面には粗い

ナアを残している。布目圧痕はみられない。

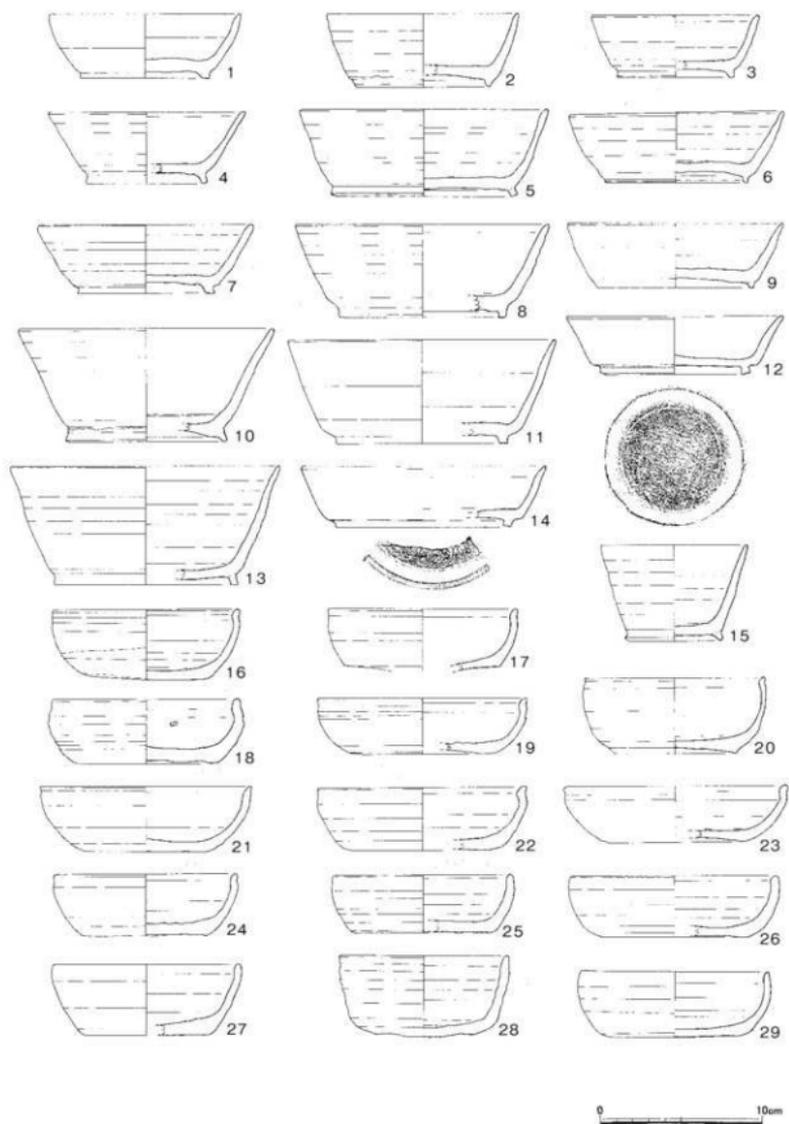
移動式竈(第54図16~18) いずれも此の部分と思われる。16は外面および竈本体からの剥離面にもハケメ調整がみられる。

円筒埴輪(第54図19~21) 20は円形スカシをもつ。タガは1.1cm突出する。21は外面にナナメハケとタタキ痕がみられる。端部は工具でカットしている。

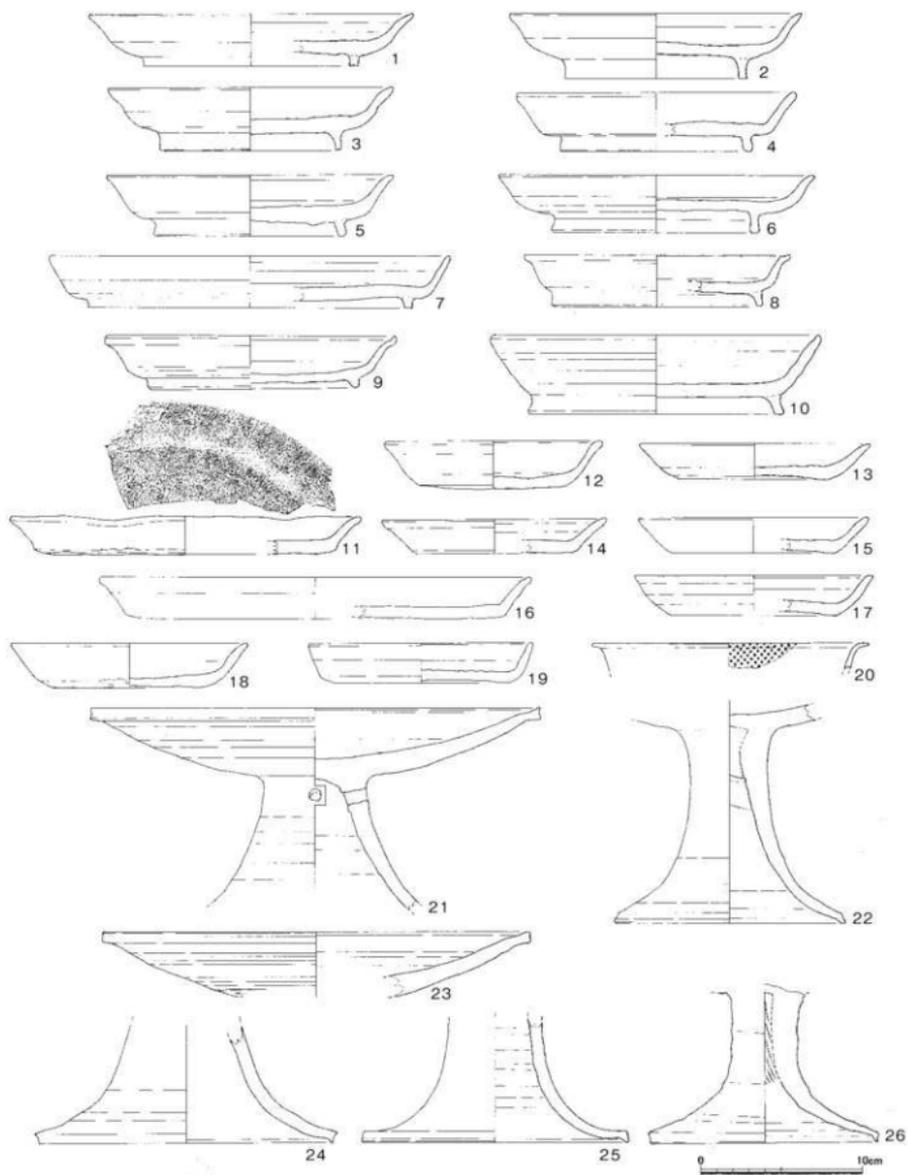
瓦類(第55図~第56図)⁵⁾ 第55図1~3は平瓦である。1は軟質の焼成で凸面成形は変形格子タタキとする。2・3は凸面成形を縄タタキとする。2は凹面に模骨痕があり、側面は内傾する。桶巻き作りと考えられる。3は硬い焼成で、凹面に模骨痕状の段がある。凸面成形は浅い縄タタキで



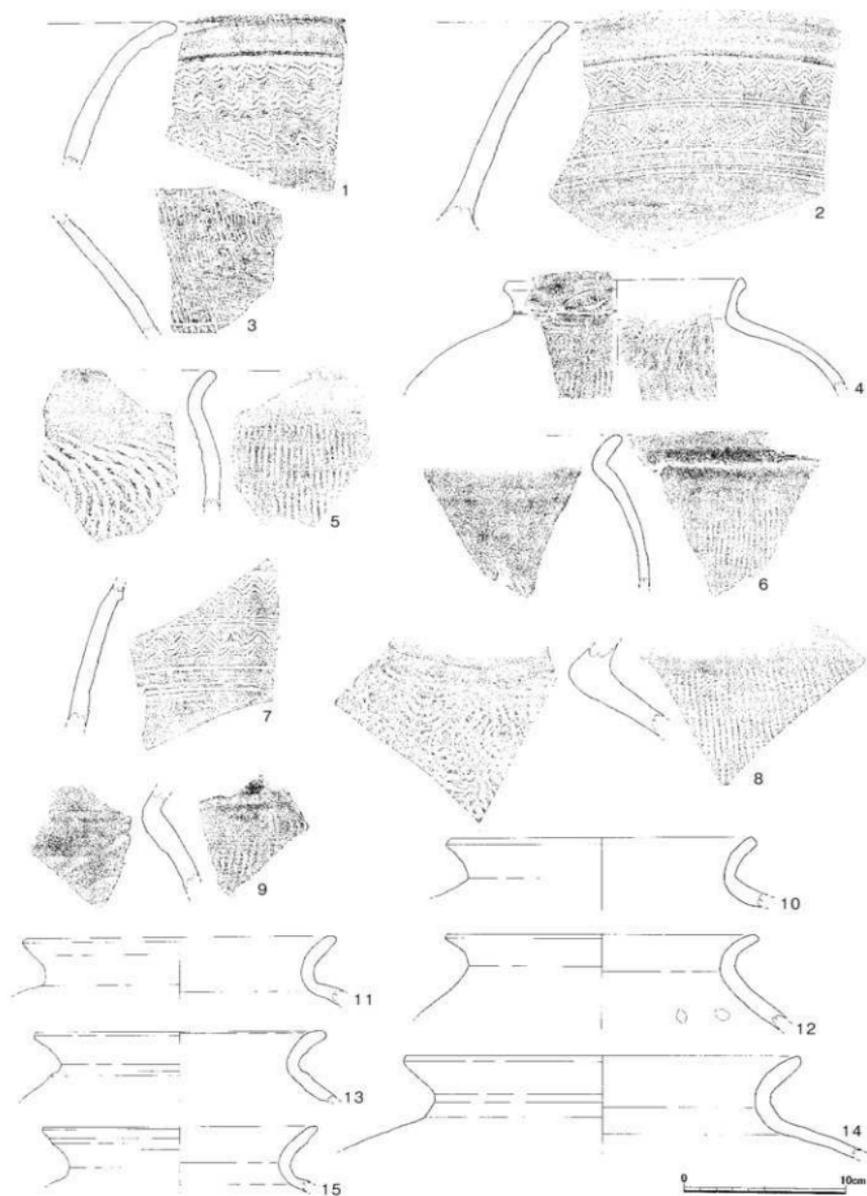
第47図 東西溝復元工事出土遺物実測図(1)(S=1:3)



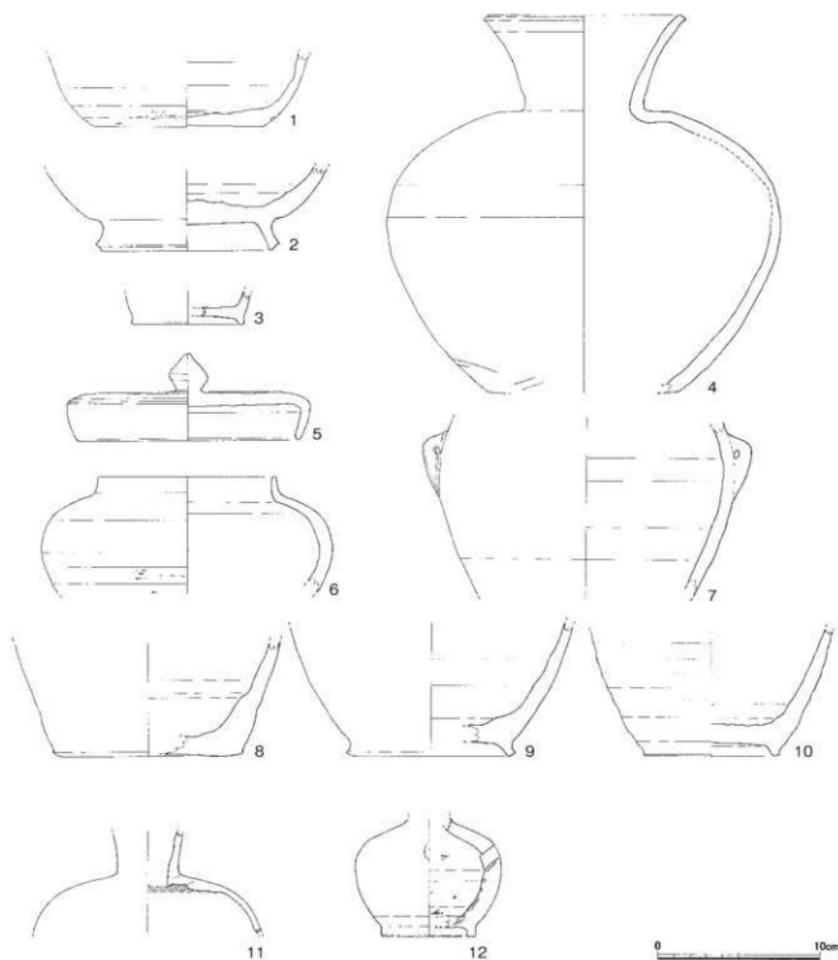
第48図 東西溝復元工事出土遺物実測図(2)(S=1:3)



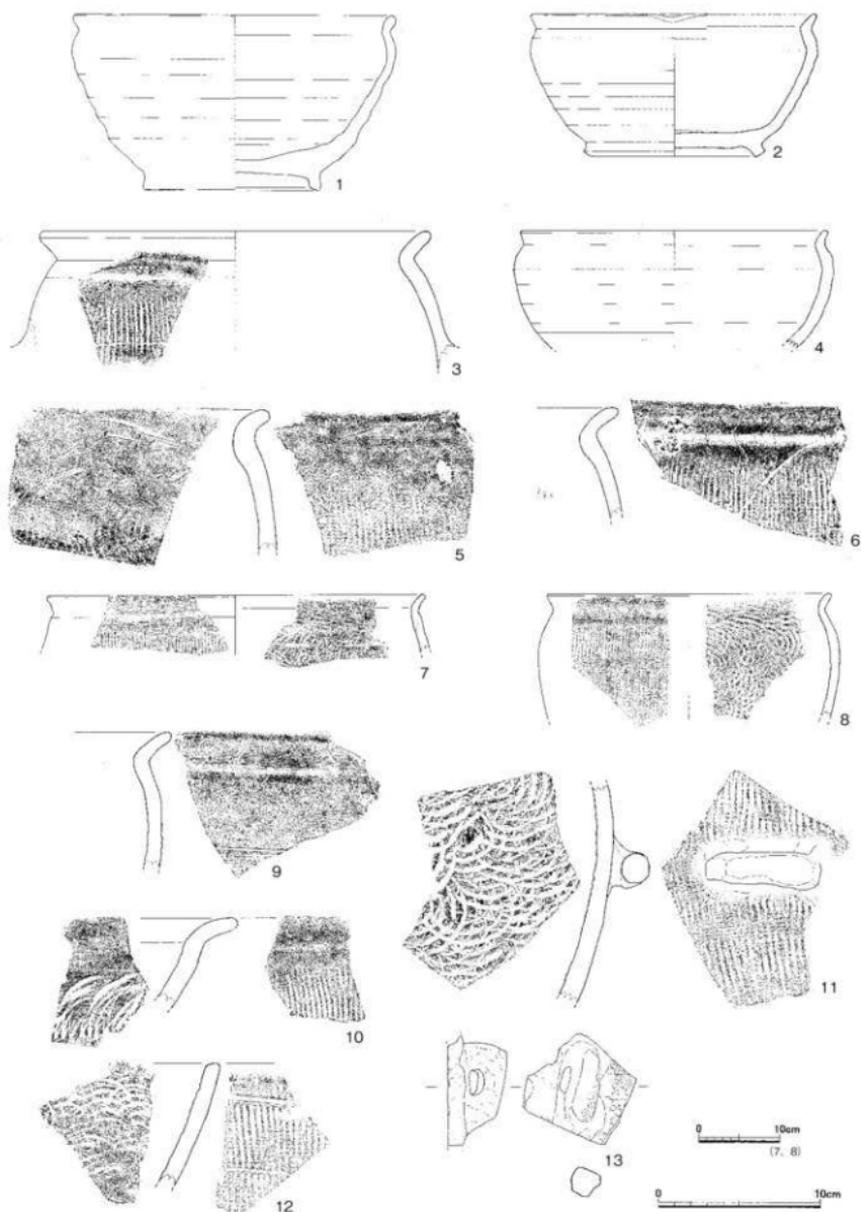
第49図 東西滿復元工事出土遺物実測図(3) (S=1:3)



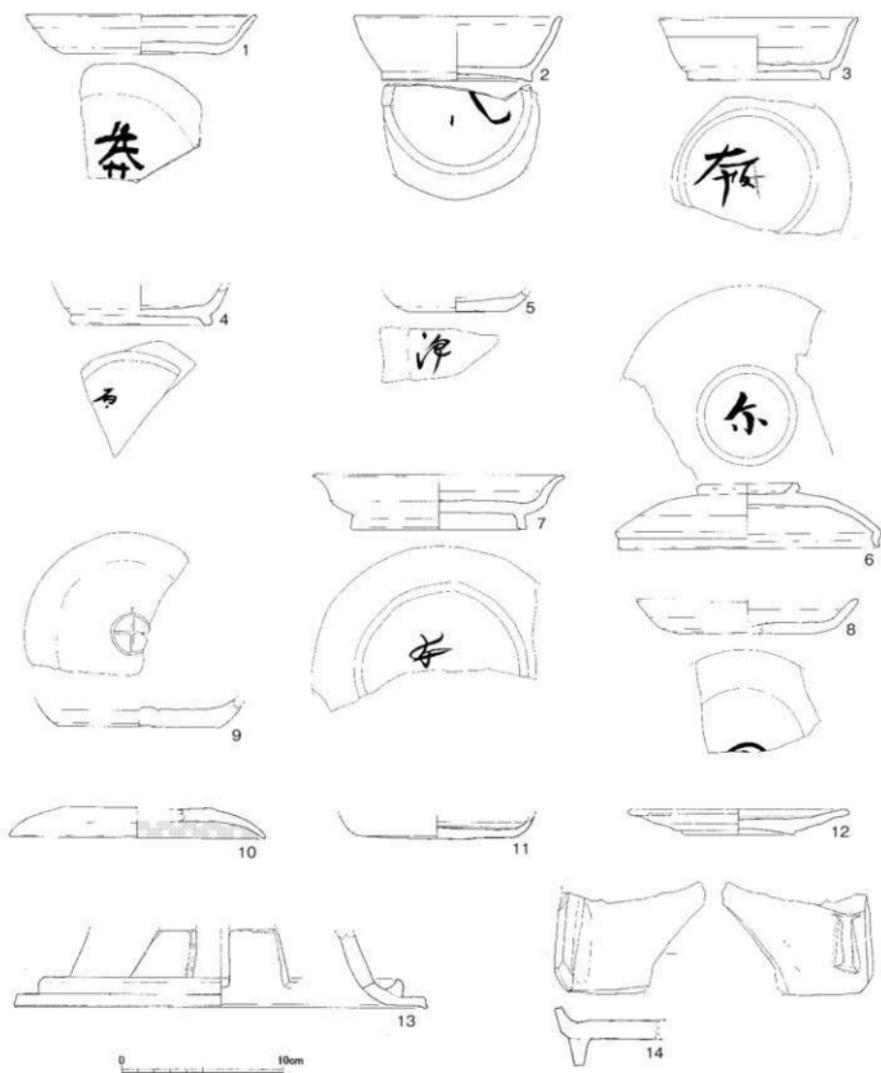
第50図 東西溝復元工事出土遺物実測図(4) (S=1:3)



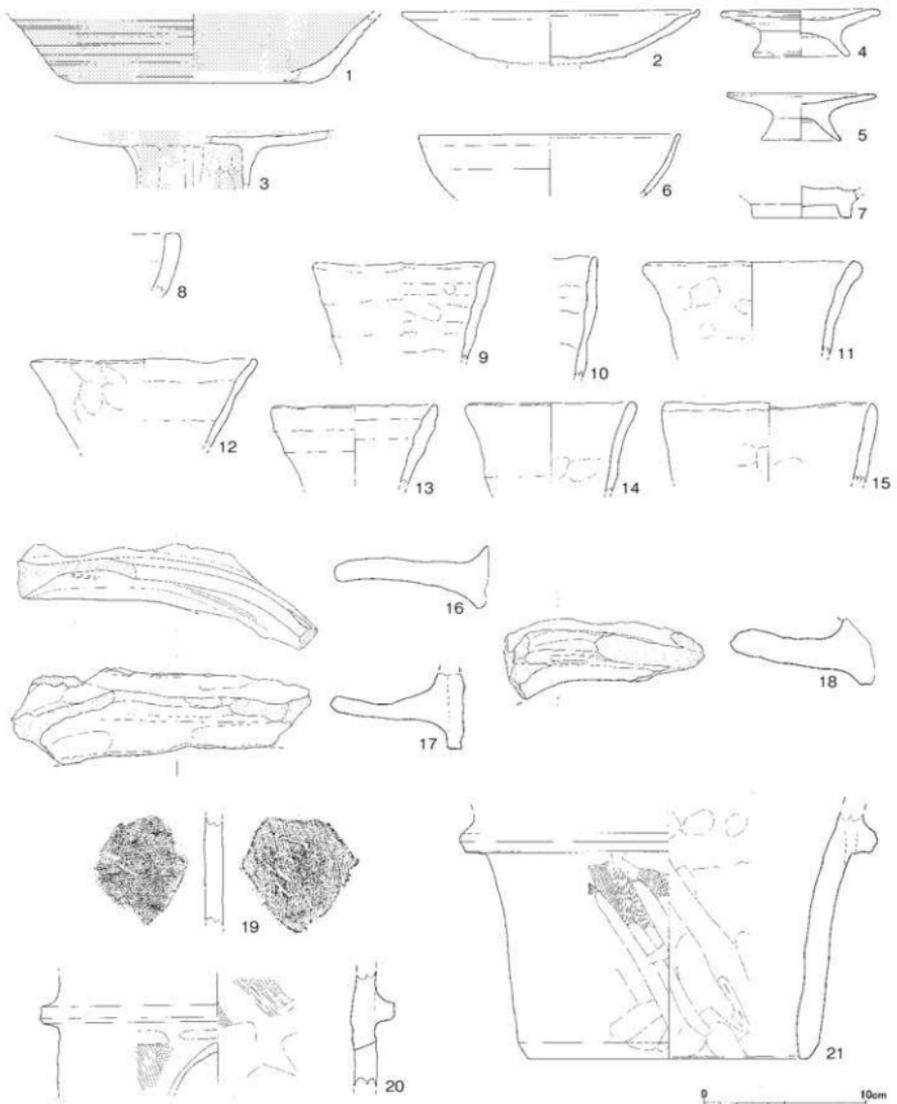
第51図 東西溝復元工事出土遺物実測図(5) (S=1:3)



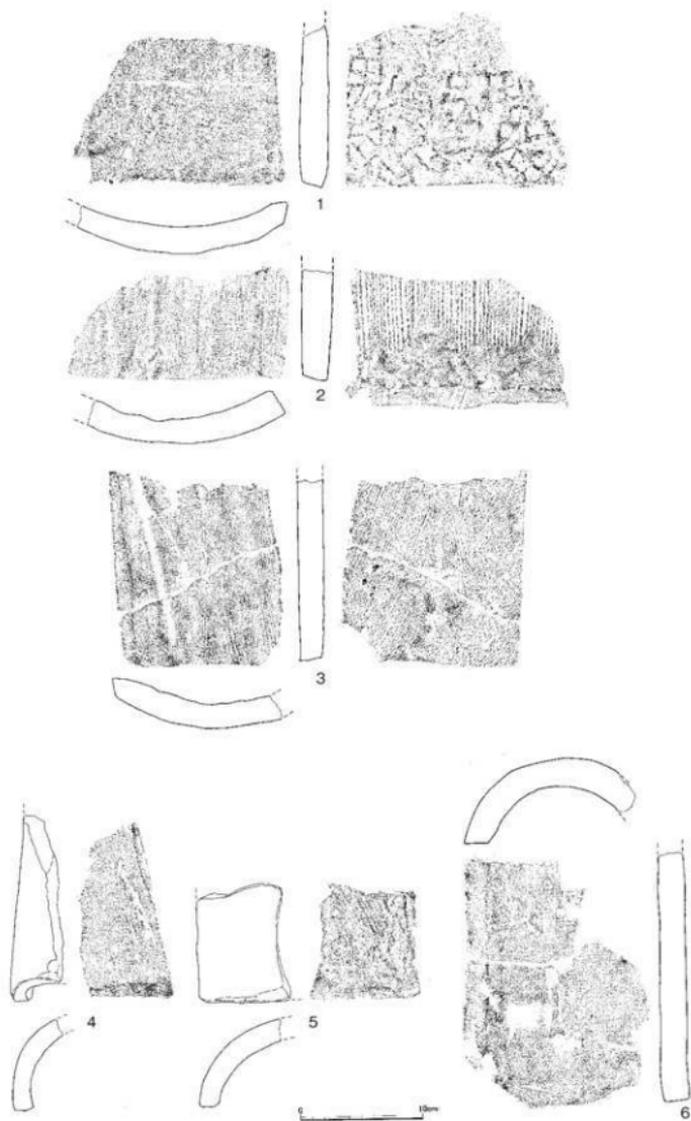
第52図 東西溝復元工事出土遺物実測図(6) (S=1:3、1:6)



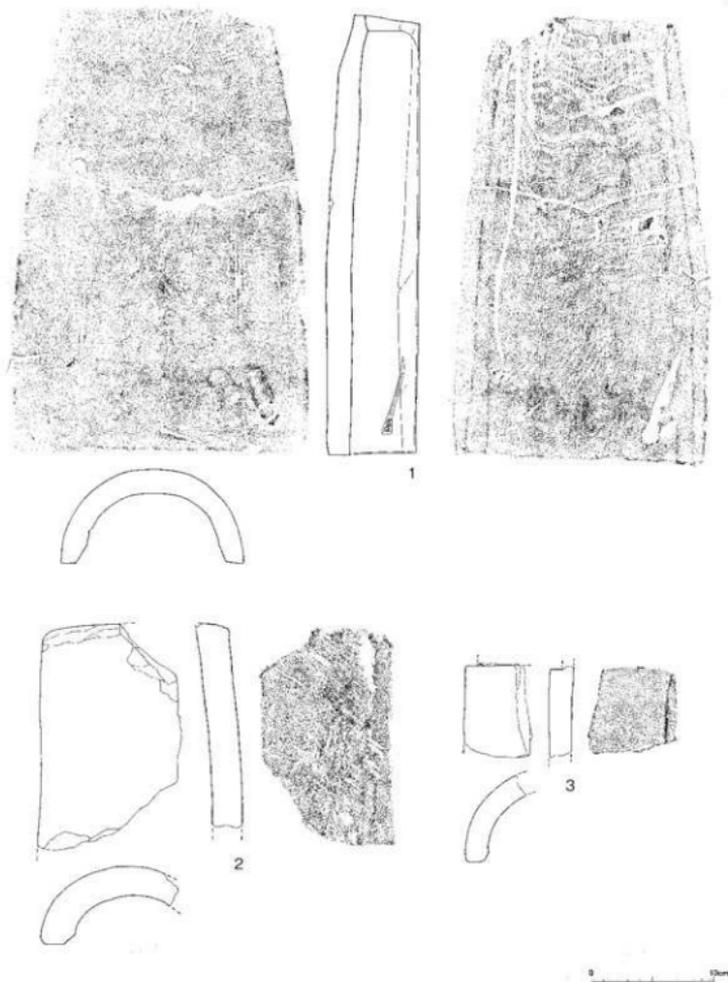
第53図 東西溝復元工事出土遺物実測図(7)(S=1:3)



第54図 東西溝復元工事出土遺物実測図(8)(S=1:3)



第55図 東西溝復元工事出土遺物実測図(9) (S=1:4)

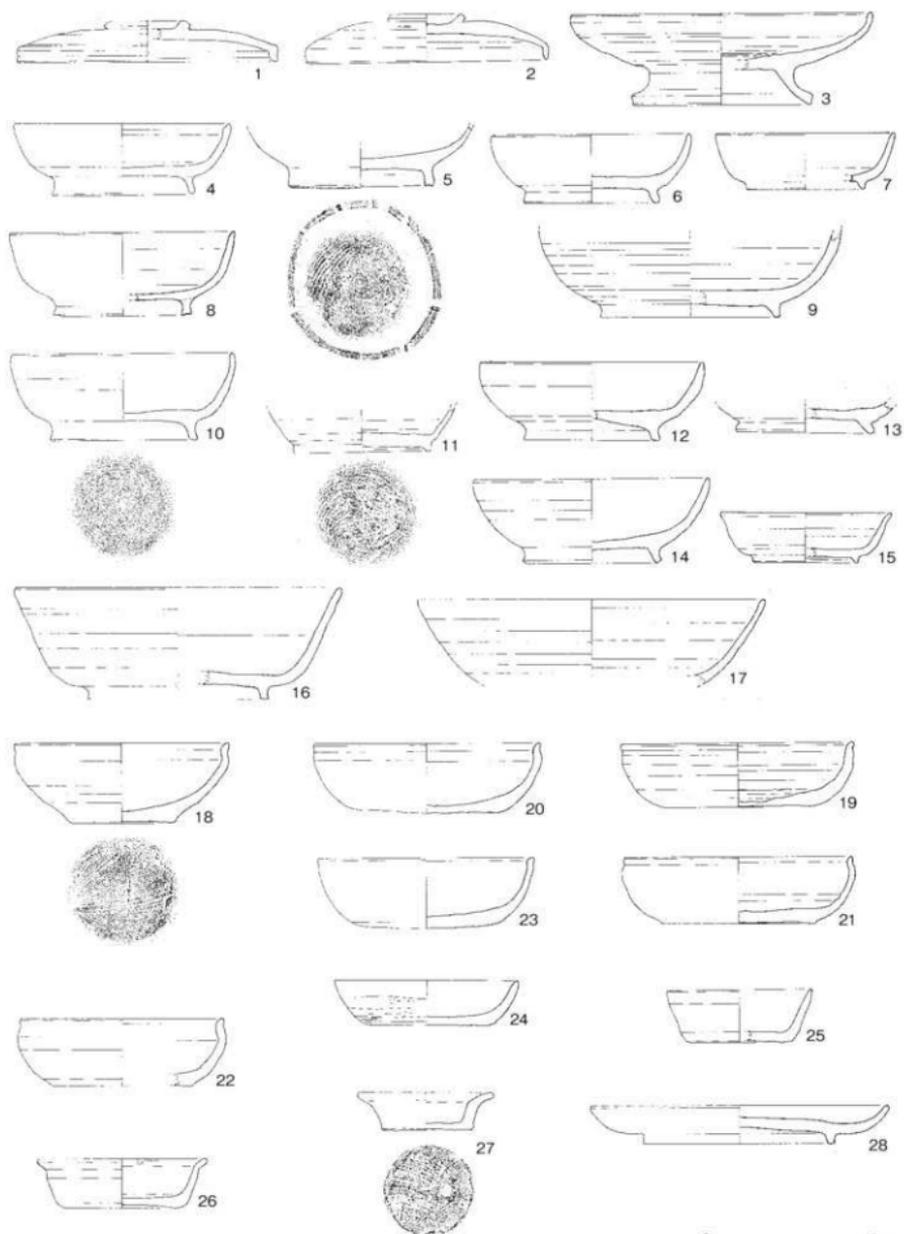


第56図 東西溝復元工事出土遺物実測図 (10) (S=1:4)

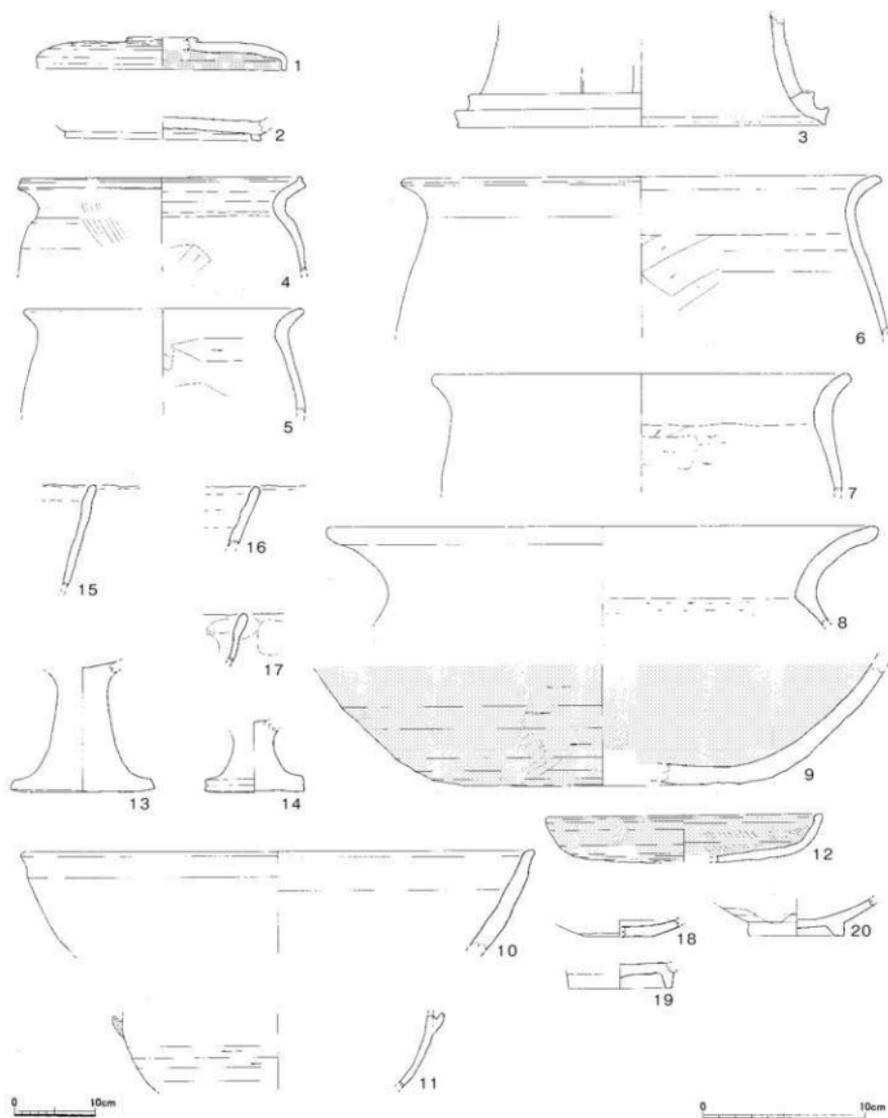
ある。4は道具瓦と考えられる。広端部から狭端部に向けて側面を直線的に切り落としている。5と6は丸瓦の広端部付近である。いずれも焼成は軟質である。凹面は広端部側縁のみ面取りする。他は未調整で布目を残す。第56図1は無段式丸瓦である。全長36.3cm、広端部幅15.0cm、狭端部幅10.5cmである。2は無段式丸瓦の狭端部である。3は有段式丸瓦で、須恵質の硬い焼成である。基部高は1.0cmある。

(5) 南北大溝復元工事にもなう出土遺物 (第57図～第60図、第101図)

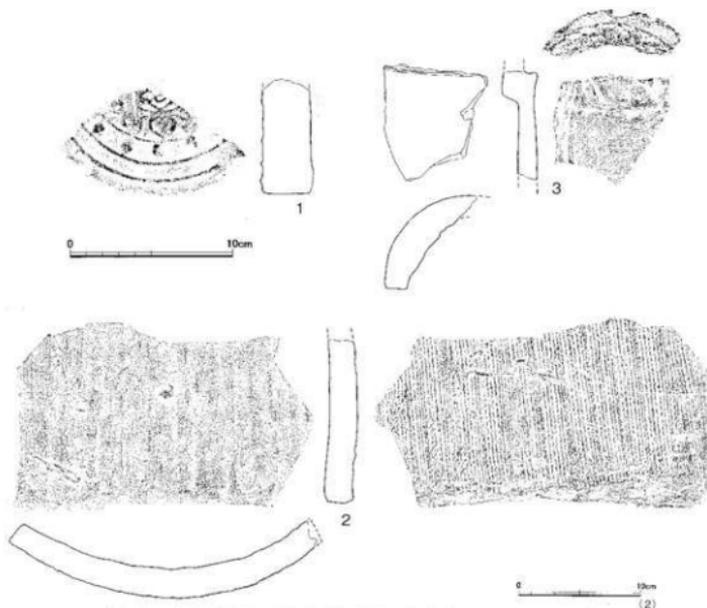
1973年「南北溝バラス」と注記される。SD004を推定復元した南北素掘溝の工事の際に出土した



第57图 南北满復元工事出土遺物実測図(1)(S=1:3)



第59図 南北滿復元工事出土遺物実測図(3)(S=1:3、1:6)



第60図 南北溝復元工事出土遺物実測図(4) (S=1:3、1:4)

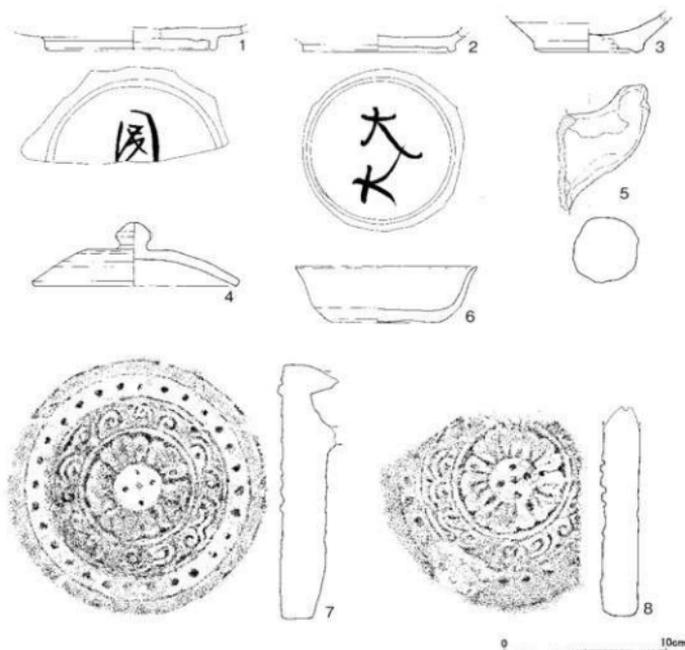
ものと考えられる。

須恵器 (第57図～第58図11) 第57図1・2は坏蓋である。いずれも輪状つまみを持ち、口縁部が屈曲して直立する。3～16は高台をもつ坏である。3は脚部が高く脚端部は面をもつ。15は口縁部が短く外反する。17は大型の坏で口径20.9cmある。18～25は無高台の坏である。18～23は口縁部が僅かに屈曲し体部は丸みをもつ。24・25は体部が直線的に外へ開く。底部は18が静止糸切り、そのほかは回転糸切りである。26～28は皿である。26・27が灯明皿型をしている。27の底部は静止糸切りである。28は高台が付く皿である。第58図1は短頸壺の蓋である。宝珠状つまみをもつ。2～6は甕である。口径18.0～23.6cmある。7は短頸壺である。口縁部は短く屈曲する。底部には低い高台が底部の端につく。全体にごつごつとした粗い作りである。8も壺の底部と思われる。底部外縁に高台がつく。9～11は鉢である。10は口縁部が短く外反し、11は単純口縁である。

漆付着土器 (第58図12～16) 12は横瓶で内外面に漆が付着している。13は壺で内面に漆が付着している。14と15は甕である。15には現在は残っていないが、円孔に木栓が差してある状態で出土した。16は坏で、パレットとして使用されており、内面に漆が付着している。

墨書・刻書土器 (第58図17～20) 17は須恵器皿で、底部外面に「大」とある。18は高台付坏で底部外面に「玉女」とある。20は底部外面に「御」と刻書がある。

硯・転用硯 (第59図1～3) 1と2は転用硯である。1は輪状つまみをもつ坏蓋で内面に墨痕が残る。2は高台付坏で外面に研磨痕がみられる。3は圓脚円面硯である。幅3.2cmの方形スカシの上位に2条の沈線はいはる。



第61図 環境整備事業出土遺物実測図 (S=1:3)

弥生土器(第59図4) 弥生時代後期の甕である。外面をハケ、内面頸部以下をヘラケズリしている。土師器(第59図5~14) 5~8は甕である。単純口縁で口径16.8~34.0cmある。内面頸部以下をヘラケズリする。9~11は鉢である。11は把手が付く。12は赤彩が施された皿で内面には暗文をもつ。13・14は高台付の皿である。

製塩土器(第59図15~17) 口縁部の破片である。指押さえ、ナデが見られる。

陶磁器(第59図18~20) 18は白磁皿、19~20は白磁碗である。

瓦類(第60図・第101図) 1は軒丸瓦で出雲国分寺3類にあたる。2は平瓦である。凸面を縄タキ、凹面には模骨痕ある。側面は内傾し、凹面端縁を面取りする。桶巻き作りと考えられる。3は有段式丸瓦である。玉縁基部の高さ1.2cm、段部長は2.7cmある。須恵質で焼きは硬い。第101図は、泥条盤築技法(大脳1991)の丸瓦である。須恵質で焼成は硬い。凸面はタテ方向のナデ、凹面はヨコ方向のヘラケズリとする。

(6) 調査区不明の遺物(第61図)

1・2は墨書土器である。この2点は出土地点等の注記が全くない。第40図の原因には4区68.6~68.7mラインの礫層下で墨書土器が出土したとあり、この2点が該当する可能性が高いものと思われる。1は底部外面に「国」、2は「大大」とある。3は白磁碗である。東西復元溝の工事中出土の可能性もある。4は東西復元溝ないしは南北復元溝工事中の出土である。5は瓶の把手、6は須恵器坏である。7・8は1973年4月16日に採集されている。採集地点は不明だが、日付から素掘

溝の工事にともなうものではないことがわかる。2点とも出雲国分寺2類である。(神柱・間野)

(7) 総括

今回の報告によって、あらたに確認された点について触れるとともに、出土品のうち和鏡について検討を加え、まとめたい。

東西・南北素掘溝の出土遺物 既報告では、遺物の出土地点について記述されていないものが多かった。今回の整理作業の結果、出土遺物の大半が、東西素掘溝、南北素掘溝の復元工事にともなうものと確認された。東西素掘溝は、後方官衙の北を画するSD005、南北素掘溝は西を画するSD004を復元したものである。出土遺物は、後方官衙の施設群において使用・廃棄されたものと考えられる。今後、公園整備されている想定中軸線から東側についても調査を進め、後方官衙全体の構造を解明していく必要がある。

北側素掘溝調査区の遺構と遺物 2区南北大溝は、調査当初から、SD034と連結する溝である可能性が指摘されていた(島根県1975)。1999年度からおこなわれた大舎原地区の調査で、あらたに国司館の施設群とその東を区画する南北大溝である4号溝が検出された。2区南北大溝が、この4号溝を南に延長した所にあることから、4号溝、2区南北大溝、SD034が国司館の東と南を区画する一連の溝と想定されることとなった(島根県2003)。この想定に基づきおこなった2008年度調査で、2区南北大溝の北側延長部分が検出され、4号溝とつながる一連の溝である可能性がさらに高まった。今後、2区南北大溝の南について調査し、溝の屈曲部分を明らかにする必要がある。また、出土遺物で、注目されるものに国司の職名「少目」の墨書土器がある。国司館の一角である大舎原地区で出土した「介」の墨書土器とともに館の居住者を示すものである。出土状況は不明な点も多いが、国司館の南を画するSD034より北で出土したことは確認できた。国司館の南辺付近は、現在、継続して調査が進められており、今後、施設群の配置・変遷について検討を加える必要がある。また、この地区は平安時代後期に、生産活動の場に変わっていることも明らかになった⁶⁾。炉跡などの主要な遺構は、2008年度に調査区北側でおこなった調査状況から、調査区南から東にかけて存在する可能性が考えられる。今後、未調査範囲の調査を進め、実態を明らかにしていく必要がある。さらに、古墳時代後期の須恵器、円筒埴輪が出土している点も注意される。宮の後地区では、東西復元溝工事箇所や2008年度に調査した第52トレンチ(A区南西隅)からも円筒埴輪が出土している。当地区にあった古墳が国府造宮にともない削平された可能性が考えられる⁷⁾。これまでに、国府下層の古墳時代集落については、詳細な検討がなされている(角田2008)が、今後、古墳時代後期の様相についても検討していく必要がある。(神柱・間野)

和鏡(第43図) この鏡は、径11.2cm、重量は305gである。外区には内側から堅線文帯、目玉型連珠文帯、堅線文帯をめぐらせている。単界圏の内側を六等分する形で三角形の突起を配し、省略化された唐花界圏が内区と外区とを隔している。内区は上部に雲のかかった月もしくは太陽と推定される天体、遠景には車輪松と洲浜、中景には社殿、車輪松、鳥居、楡垣、雁行する10羽の鳥、近景には洲浜に打ち寄せる波、双雀が描かれ、中央には亀形鈕を置いている。佐藤直子氏はこの種の鏡を外区の文様帯や内区のモチーフから擬漢式日月山水鏡と仮称し、その変遷を示している(佐藤1996)。佐藤氏の分類によると、この鏡はⅡ-C期の②グループに分類され、14世紀半ば以降の時期にあたりと推定している。また、Ⅱ-C期に続くⅢ期の鏡については15世紀末にその下限を置き

ている。久保智康氏は、本例と同様のモチーフは「住吉を詠んだ和歌を意匠化したものと解釈される苅絵の手箱・硯箱とまったく意匠構成が同じである」（久保1999）と指摘し、そこに使用者の「王朝文化への憧憬」を見出している。本例には、ほぼ同じモチーフを描く類例が存在する。法隆寺西円堂に奉納された鏡に非常に似通った表現をとるものがある。（宝隆寺1988）『法隆寺の至宝』第9巻の番号311「社殿双洲雀の図円鏡」がそれで、室町時代後期のものとされている。遠景の天体、中景の鳥居、楡垣、近景の波の表現を欠くが、それ以外のモチーフの表現方法、配置などが酷似している。また、この鏡も佐藤氏の分類によるとⅡ-C期にあたり、国府出土の鏡とほぼ同時期の鏡と見ていだろう。この類例に与えられた時期と佐藤氏の考察から、本例の制作年代は14世紀半ばから15世紀半ば頃と考えられよう。（神社）

第3節 1974年度推定枉北道の調査（第2図・第62図）

I 調査に至った事情 松江市企業局水道部では、昭和49年度事業として、松江市大草町への水道管理設工事を計画し、その管線の一部が出雲国風土記の記載されている枉北道（きたにまがれるみち）および十字街（ちまた）に推定されている場所を通ることになった。

鳥根県教育委員会では、当地が国指定史跡の一部になっていることから、現状変更申請と共に遺構の重要性を確認するための事前調査を指示し、それによって松江市企業局は、調査を鳥根県文化財愛護協会へ委託した。調査は横山純夫（県教育委員会文化課主事）が担当し、昭和50年3月19日から同月23日まで実施した。なお、調査にあたって吉岡勝次氏をはじめとする地元有志の方々の暖かい援助をうけた。記して深甚の謝意を表する次第である。

II 位置・環境 出雲国風土記には「国の東の堺より（中略）西二十一里にして国庁、意字郡家の北なる十字街に至り、即ち分かれて二つの道となる。一つは正西道一つは枉北道なり。枉北道は北に去くこと四里二百六十六歩にして郡の北の堺なる朝酌渡に至る。」という記載があり、現在意字平野に残っている条里制遺構の様子から調査地が枉北道および十字街に推定されていた。即ちそれは意字平野のほぼ中心にあたり、出雲国庁、国分寺にはさまれた扇状地の端にあたる。

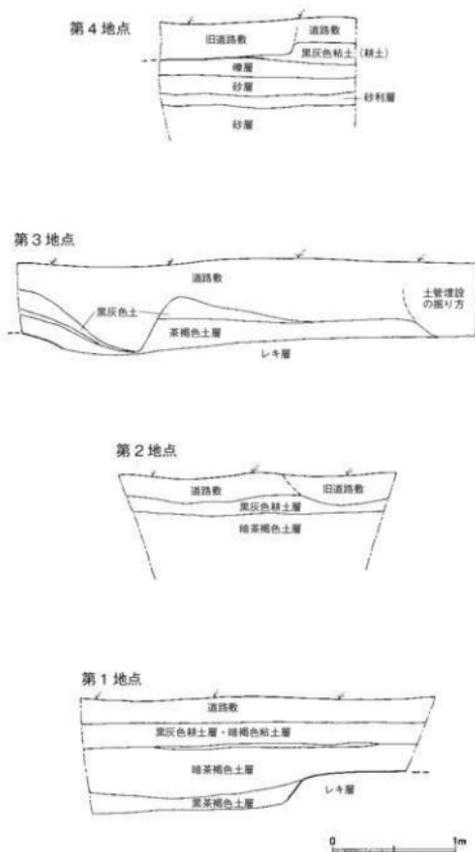
III 遺跡の概要 指定地内枉北道は、総延長500m余りであるが、任意に4か所の調査地点を設定し、旧道の遺存状況を調べた。

〈第1地点〉 枉北道の南端にあたり、長さ1m、幅3mのトレンチである。旧耕土下に暗褐色土層が入り、その下に旧道と思われる礫層が認められた。礫層はトレンチ内東半部が20cm余りの段がつき盛り上がり、拳大の礫であるのに対し、西半部はやや小さい砂利混りの礫層である。この段が旧道の西端と思われる。

〈第2地点〉 十字街より約800mの地点で、1m×22mのトレンチである。暗褐色土層の下は厚い粘土層になり、礫は全く認めることができなかった。

〈第3地点〉 十字街と推定されている場所で、2m×3.7mのトレンチを設定した。現在の道路敷の礫層が厚く、又その下は湧水が著しいため十分な調査はなし得なかった。トレンチ東半部は土管が埋設されているため攪乱されているが、他の部分については、道路敷の下に黒灰色土、茶褐色土が入っており、その下に礫層が遺存する。礫層はトレンチ西端が若干盛り上がり、旧道の東端と推定される。

〈第4地点〉 表面からの礫層が厚く、現在の道路敷に重なって礫層が認められ、旧道と思われる。



第62図 1975年度調査区土層断面図 (S=1:40)

IV 出土品 出土品は皆無に等しく、わずかに第1地点暗褐色土層中より奈良時代のものと思われる須恵器、瓦の小片、第4地点表面より玉磨砥石片を検出したのみである。

しかし第1地点から出土した遺物は、それが旧道と思われる礫層上部より検出したということで、礫層イコール奈良時代以前の道と断定する重要な手がかりとなった。

V 結語

以上4か所の地点を調査したのみであるが、第2地点において礫層が全く認められない事実は、他の地点の礫層が自然堆積ではないことを裏付け、道路の一部であると思われる。

道路の規模については何の記録もないが、以前調査を実施された出雲国分寺の南へ続く天平古道から推定すると、巾20尺(6m)の石敷道であったと考えられ、その大部分は水田下に埋没していることが、ボーリング調査からも判明した。

このように、わずかに4か所の調査で、全体を明らかにすることは不可能であるが、図のように調査結果をもとに復原すると、現在の道路とは若干方向を異にした石敷の20尺道路が推定される。

なお、このようにして推定した道路敷は、天平古道と方向をほぼ同じくすることからも、枉北道と断定してもよさそうである。(横山)

付記1 本節は昭和50年3月27日付け島教文財第7号で、島根県文化財愛護協会長から島根県教育長あてに提出された終了報告書を再録している。

付記2 現在の知見では、道路と認識している石敷は河川氾濫による自然堆積の可能性が高いものと考えられる。

付記3 整理作業の結果、ビニール袋に「枉北道第1地点 50.3.23」とマジックで書かれた遺物を確認した。遺物の内訳は、平瓦3点、土師器2点、須恵器5点であった。土師器のなかには、柱状高台2点が含まれている。

付記4 1999(平成11)年度の調査再開後、推定枉北道、推定十字街の周辺で次の調査を実施している。1999(平成11)年度に推定十字街の周辺に設定した第11・12・13トレンチでは、推定山陰道と平行するように東西方向に延びる杭列を検出している(島根県2003)。2001(平成13)年度に枉北道推定線上にあたる、十字街の北、約220mの第23・24トレンチでも南北方向に延びる杭列を検出している。いずれの調査でも、確実な道路遺構の検出まで至っていない。十字街から国府政庁に至る道路については、大舎原地区で西側溝と想定される56号溝が検出されている。その東に位置する堂田地区では、平安時代後期の道路遺構、路面と側溝が確認されている。しかしながら、対になる道路側溝を検出できておらず道路の規模は明らかになっていない。(間野)

第4節 土地改良総合整備事業にともなう調査

1. 調査の経緯 松江市土地改良区が実施する土地改良総合整備事業に先だって島根県教育委員会が1989～1990(平成元～2)年度におこなった調査の報告である。同事業にかかる詳しい経緯については島根県1988(昭和60～62年度調査報告)を参照されたい。なお、平成元年度調査は、正西道に推定されている現道の簡易舗装に先立つものである。

2. 1989(平成元)年度調査の概要(第2図・第63図、写真1～3)

調査区 平成元年度は、8号道路(875m・幅4m)の簡易舗装に先立ち調査を実施した。

出雲国府周囲に残る条里制遺構のうち、字名上ノ免と水垣(A)及び、石ヶ坪と横枕(B)の間にある1町を区画する幅の広い地割線に直交する調査区を、それぞれ1ヶ所ずつ設定した。

A地点 長さ5m、幅2.5mの調査区を設定。現在使用されている北側の水路の反対側(南側)に幅1.9m、深さ0.2mの東西に走る溝を検出。遺物は須恵器片と近世以降の陶磁器片が数点出土した。

B地点 長さ5m、幅2.3mの調査区を設定。現在使用されている北側の水路の反対側(南側)に幅約0.7mの東西に走る溝を検出。遺物は須恵器片と近世以降の陶磁器片が数点出土した。

まとめ A・B地点から、時期不明ではあるが東西方向に走る溝跡が確認された。この溝は山陰道正西道の側溝の可能性も考えられる。正西道の推定線上では、これまでに、第30・31トレンチ(鍛冶ヶ免地区)、第34トレンチ(深坪地区)で調査が行われてきたが、道路遺構は確認されていなかった(島根県2004、同2005)。今回の調査は、調査が及んでいない現在の道や水路と重複して、道路



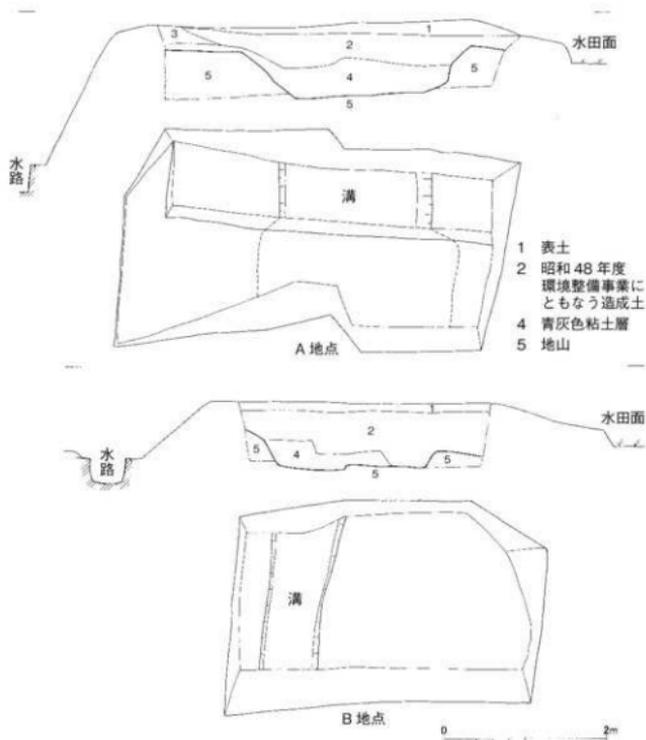
写真1
1989年度調査A地点溝



写真2
1989年度調査B地点溝
検出状況



写真3
1989年度調査B地点溝
完掘状況



第63図 1989年度調査区遺溝実測図 (S=1:60)

側溝が存在する可能性を示しているともいえる。A・B地点周辺での更なる調査が望まれる。

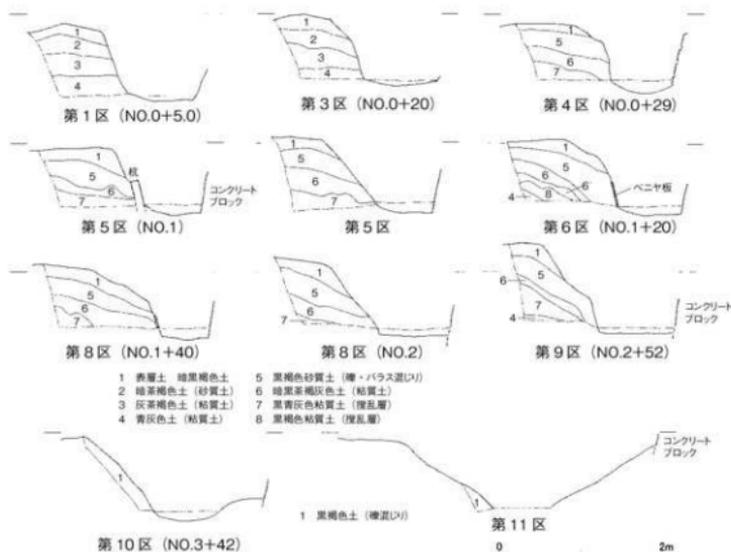
3. 1990(平成2)年度調査の概要(第2図・第64図)

調査区 茶臼山の南東山裾を走る県道竹矢八重垣線に沿ってある29号水路(長さ224m・幅1.1m)のコンクリート水路化にともなう掘削部分を対象に発掘調査を実施した¹⁵⁾。このうち既設の水路でコンクリート三面張りになっている区間等は工事立会で対応することとした。

概要 調査は事業との関係で便宜上11区に分けて行った。遺構は、道路法面のブロック積工の際の土留工にともなうものと考えられる杭列(一部でベニヤ板を組む)以外、何ら認められなかった。遺物は第11区を除いて各区からまんべんなく出土している。おもに須恵器片と近世・近代以降の陶磁器類でコンテナ1箱分ある。

まとめ 今回の調査は水路工の掘削範囲までの調査にとどめている。さらに下層まで調査がおこなわれている、大坪遺跡1区～3区では、現地表面から1.2m下で古墳時代前期の土器、木製品が出土している(松江市2002)。また、出雲国府内の茶臼山南裾については、第25トレンチ(天間田地区)、第36トレンチ(水ノ尻地区)で確認調査がおこなわれたが、遺構は検出されていない(鳥根県2003、同2004)。

(内田・鳥谷・間野)



第64図 1990年度調査区土層断面図 (S=1:60)

注

- (1) 本報告と鳥根県1975掲載遺物との対応関係は第36表備考欄に記している。
- (2) 本報告は、鳥根県1975のほか、調査を担当した勝部昭氏の野帳、原因をもとにおこなった。
- (3) 1968～1970年度調査時のグリッドによる〔鳥根県2008 第74図〕、SD034は、鳥根県2008の117～119頁に報告を、第75図 (84頁)・第105図 (118頁) に遺構、第133図 (149頁) に遺物を掲載している。
- (4) 第38図に示したSD034平面図は、1974年度調査時のものである。このときは49mラインから、100mラインの間で、溝の北岸のみ確認されている。この平面図と1968年度・1970年度調査図面との合成を試みたが、整合性のとれた図面は作成できなかった。
- (5) 瓦類の集計結果は第46表 (152頁) にまとめている。
- (6) 分析をおこなっていないが、金属滓3830gも出土している。
- (7) 当地区北西の一貫尻地区Ⅱ区北側では、古墳周囲の可能性のある湾曲した溝 (59号溝) が検出されている。また、同Ⅰ区からは、朝顔型埴輪の破片も出土している (鳥根県2005)。
- (8) 1991年春、岩橋孝典氏によって真名弁神社参道付近で採集された遺物は、この工事によって出土した可能性が高い (岩橋2001)。

引用・参考文献

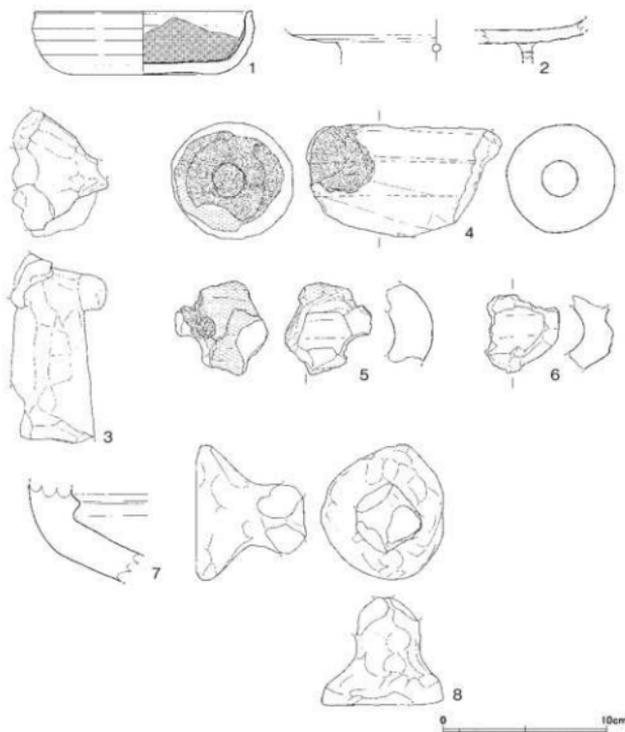
- 岩橋孝典「松江・真名弁神社参道付近採集の遺物について」『松江考古』第9号松江考古学談話会
大脇 謙1991「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅴ』奈良国立文化財研究所
角田徳幸「出雲国府跡下層の古墳時代集落」『鳥根考古学会誌』第25集 鳥根考古学会
久保智康 1969「中世・近世の鏡 日本の美術 第394号」至文堂
佐藤直子1996「法隆寺西門堂奉納の擬漢式鏡について」『MUSEUM』544号
鳥根県教育委員会1975「史跡出雲国府跡環境整備報告書」
鳥根県教育委員会1988「土地改良総合整備事業に伴う史跡出雲国府跡発掘調査報告書」
鳥根県教育委員会2003a「第5章第3節奈良時代・平安時代の施設群」『史跡出雲国府跡1』
鳥根県教育委員会2003b「第3章総論確認調査」『史跡出雲国府跡1』
鳥根県教育委員会2004「第4章総論確認調査」『史跡出雲国府跡2』
鳥根県教育委員会2005「第3章一貫尻地区の発掘調査」『史跡出雲国府跡3』
鳥根県教育委員会2008「史跡出雲国府跡5」
鳥根県古代文化センター2003『山陰古代出土文字資料集成1』
法隆寺昭相寶財帳編集委員会 1988「法隆寺の宝室」第9巻
松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団2002「5平成12年度調査について」『市道真名弁神社線整備事業にともなう大坪道跡発掘調査報告書』

第4章 1968～1970年度調査の補遺と再検討

第1節 土器類・文字関連資料他

(1) 土器類 (第65図～第70図)

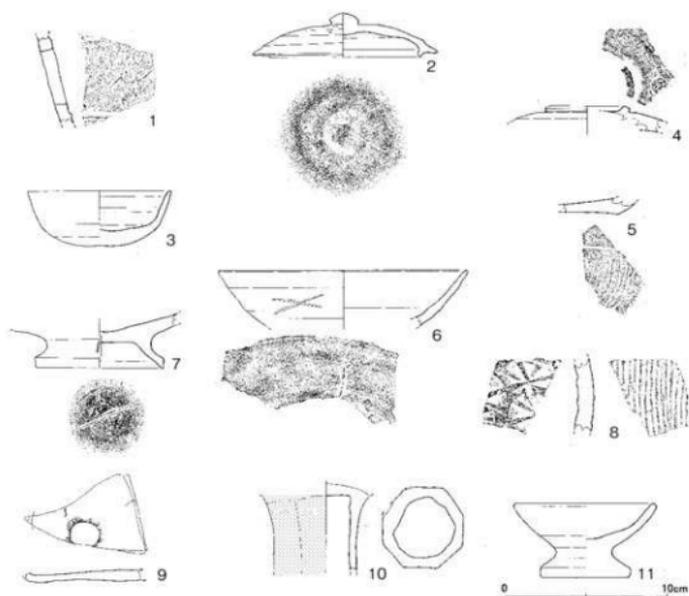
樋ノ口地区 (第65図1～6) 1と2は東トレンチSD106出土である (5-37・38)。東トレンチからは平行して南北に走る溝4条を検出している。そのうちSD106は最も西側の溝である。1は須恵器坏である。内面に漆が付着しパレットとして使用されている。2は皿かと思われる。内面には重ね焼き痕が残る。底部に付く高台には径5mmの円形透かしがあく。3は南北トレンチES39グリッドから出土した。土製支脚で三方向に突起が付く。山陰地域土製支脚分類のⅡ-A類にあたる (岩橋2003)。4～6は南北トレンチFI39グリッドから出土した羽口である。層位は黄褐色土の床土である。4は外径6.4cm、内径2.1～2.5cmである。先端はガラス質化し、周辺は熱を受け変色している。外面には筋状の成形痕がある。5と6は小破片である。



第65図 樋ノ口・一貫尻・六所脇地区出土遺物実測図 (S=1:3)

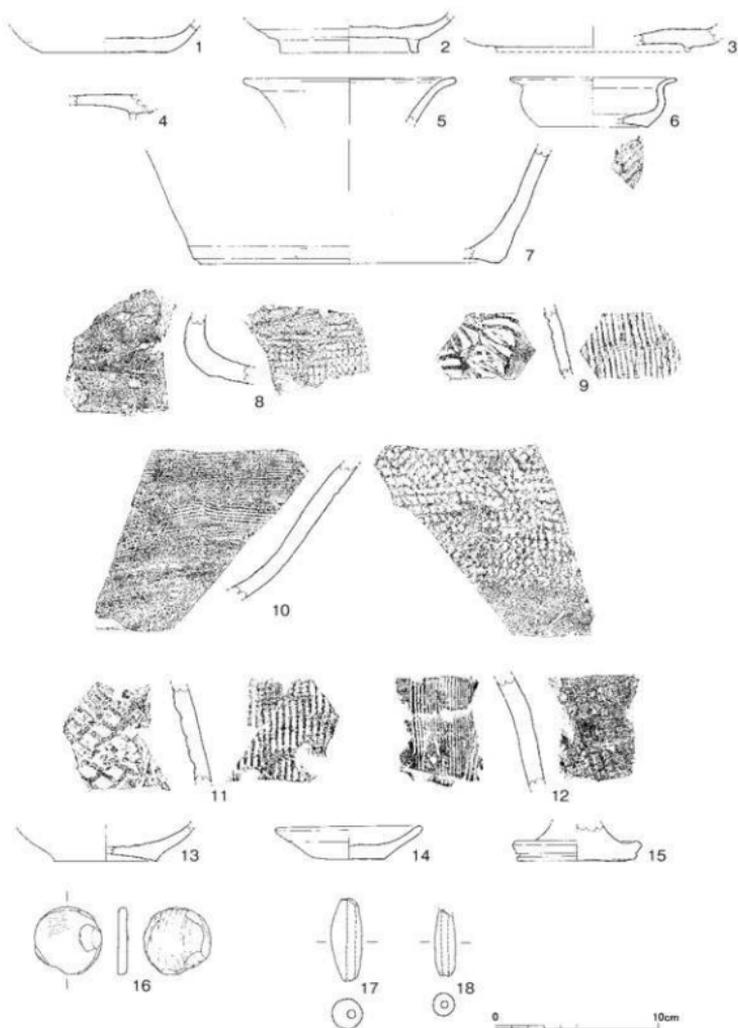
一貫尻地区（第65図7） 出土地点は、地区南東隅に近いGO29グリッドで、層位は床土下である。古墳時代中期の土師器大型壺の頸部で突帯が巡っている。5-55-5・6と同一個体の可能性もある。六所脇地区（第65図8） 出土地点はI区IP11グリッドで、層位は暗褐色土である。この層は古墳時代の遺物を多く含んでいる。土製支脚で突起は欠損するが三方向に付く。この地区から土製支脚は他に2点出土している（5-71-11・12）。

宮の後A区（第66図） 1～9は須恵器である。1は器台脚部で、方形もしくは逆三角形の透かしが観察される。2は坏蓋で、宝珠状つまみをもち、口縁部はかえりをもつ。内面に「×」のヘラ記号が施される。出雲国庁編年第1形式。3は坏で底部にヘラ切りの痕跡が残る。4は輪状つまみをもつ坏蓋である。天井部外面に「○」のヘラ記号が施される。5、6は坏で、5は底部外面にヘラ記号が施される。6は坏部外面に「×」のヘラ記号が施される。7は高台付坏で、坏部の底部外面にヘラ記号「-」が施される。高台には縦線状の切り込みのような透かしが二方向に施される。8は甕の体部で、内面のあて具痕は「*」状の形態をしており、同様のあて具痕が宍道町小松窪出土の資料でも観察される（宍道町1983）。9は器種不明の須恵器である。底部か。10は、土師器高坏の脚部で、脚部断面は八角形を呈し、外面に赤色顔料が塗布される。11は土師器の柱状高台付皿である。宮の後B区（第67図） 1～11は須恵器である。1は坏である。2は高台付坏で、坏部と高台の接合部に爪状圧痕が残る。3、4は、高台付皿状の形態をするが、器種は不明である。5は壺の口縁部である。外面に自然軸が付着する。6は、須恵器皿で、いわゆる「灯明皿形土器」である。底部は静止糸切り。7は壺もしくは甕の底部である。底部外面の一部に粘土塊が付着する。8は甕の頸部



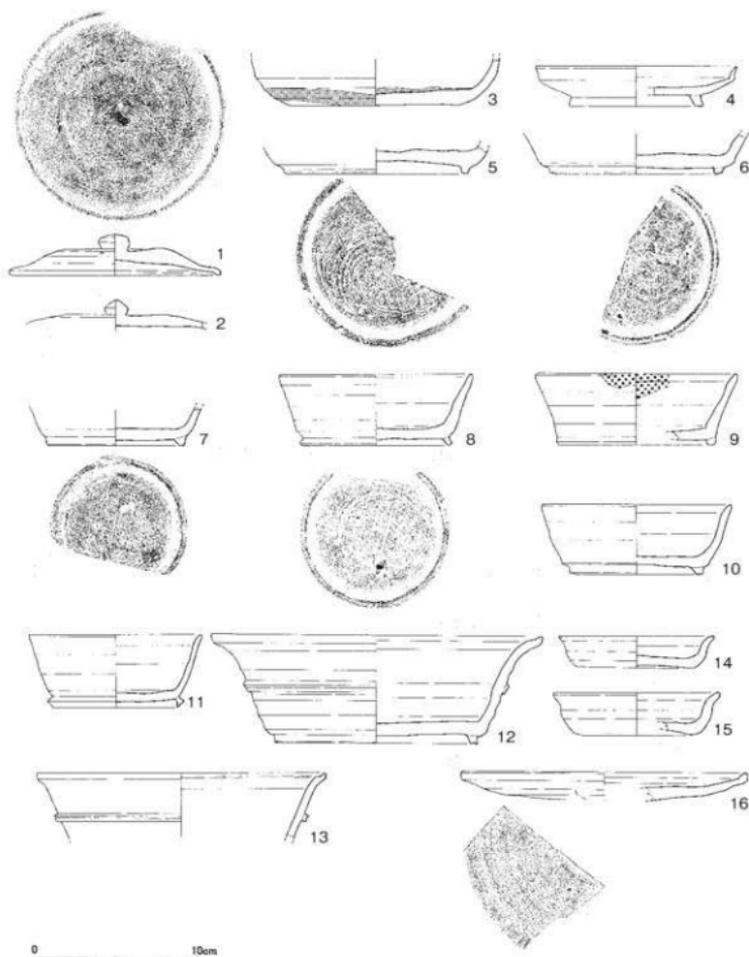
第66図 宮の後A区出土遺物実測図（S=1：3）

である。9、10、11は甕の体部である。11は、格子状のあて具痕と同心円状のあて具痕が残る。12は瓦質土器の甕の体部である。13～15は土師器である。13は坏、14は皿である。15は柱状高台付皿または坏の柱状高台で、端部外面には一条の沈線が施される。16は、須恵器の坏もしくは皿の底部を、再加工し、円く整形した円盤状土製品である。17、18は土錘で、紡錘形を呈する。



第67図 宮の後B区出土遺物実測図 (S=1:3)

宮の後C区（第68図～第69図） 第68図1～16は須恵器である。1、2は宝珠状つまみをもつ坏蓋である。1の内面には「×」のヘラ記号が施される。3は坏で、外面の体部下部、内面の見込み外周に、帯状に油煙が付着する。4は高台付皿で、皿部は坏蓋を返したような形態を呈する。5～13は高台付坏である。7の底部外面には「×」のヘラ記号が施される。8の底部外面には、「-」のヘラ記号、高台と坏部の接合部には爪状圧痕が残る。9は焼成があまく、軟質である。口縁部の内外面の一部に漆が付着する。11は、断面が嚙状の高台が取り付けられ、他の資料と比べ高台の形態が特徴的である。12、13は、体部外面の中ほどに突帯を一条貼り付ける。12の口縁端部は外方につま

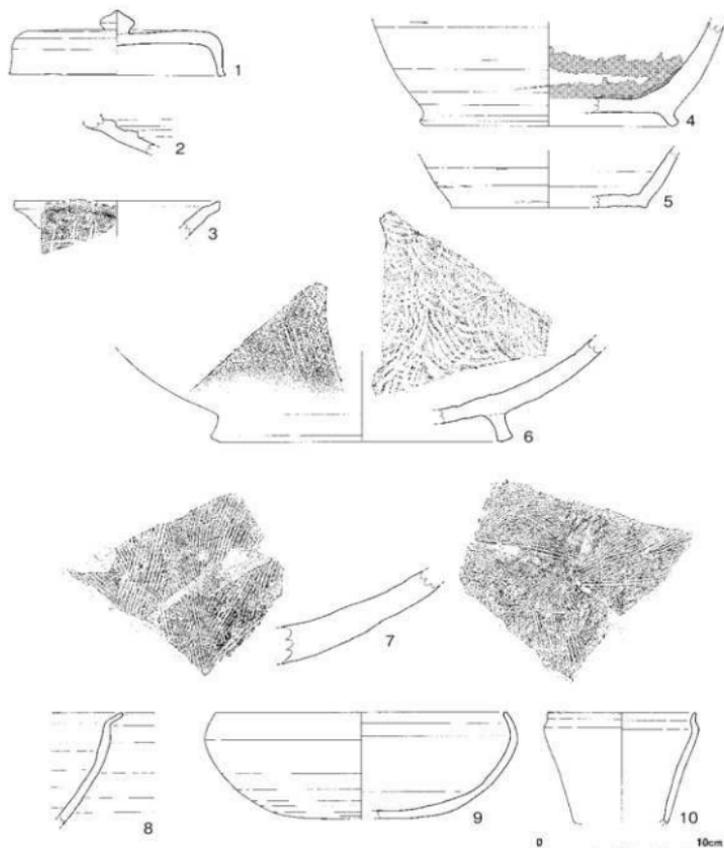


第68図 宮の後C区出土遺物実測図(1) (S=1:3)

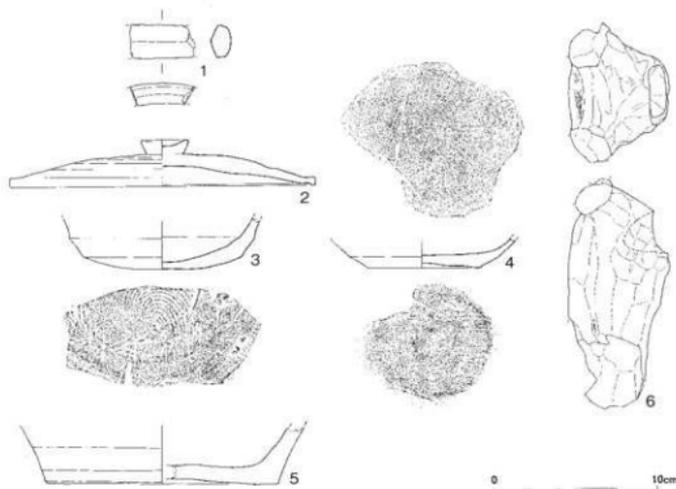
みあげられ、大きく外反する形態となる。13の口縁端部も上方につまみあげられ、明瞭な段が形成される。14、15は皿で、いわゆる「灯明皿形土器」である。16は高坏の坏部である。外面に「×」のヘラ記号が施される。第69図1～9は須恵器である。1は短頸壺の蓋である。2～5は壺である。3は壺の口縁部で、外面にはヘラ記号が施される。4は高台付壺で、内面に漆が付着する。6は高台付甕の底部、7は甕の体部である。8、9は鉢である。9はいわゆる「鉄鉢形土器」とされるものである。10は、土師器である。特殊な形態を呈し、器種は不明である。

地区不明（第70図） 1～5は須恵器である。1は、平瓶の把手である。2はボタン状つまみをもつ坏蓋である。3、4は坏である。3は、外面の底部と体部の境目に、「×」を連ねたような、板状工具による押さえ痕が施される。4は静止糸切りによる底部切り離して、底部内面には、放射状にナデが施される。5は壺の底部である。6は土製支脚で、二方向に突起が取り付けられる。山陰地域土製支脚型式分類のIC類である（岩橋2003）。

（中野、間野）



第69図 宮の後C区出土遺物実測図（2）（S=1：3）



第70図 1968～1970年度調査地区不明出土遺物実測図 (S=1:3)

(2) 硯 (第71～72図)

出土状況 (第73図、第3表) 地区別の点数については、鳥根県2008において集成しているが、今回の整理作業をふまえ補正した (第3表)。定形硯と転用硯の比率は、宮の後地区が約1:2.5、大舎原地区が約1:4となり、宮の後地区の方が高い。また、出土点数の多い宮の後A・C地区について、3mグリッド別の分布をみた (第73図)。多くの破片がバラス土層から出土しており、原位置を保っていないものの、分布に偏りがみられる。後方官衛の区画内では、北を画する大溝SD005、南を画する大溝SD010、内部を画する小溝SD025、SD027・SD053の周辺から多く出土している。施設群の周辺から出土していることがわかる。また、国司館の南を画するSD034周辺からもまとまって出土している。

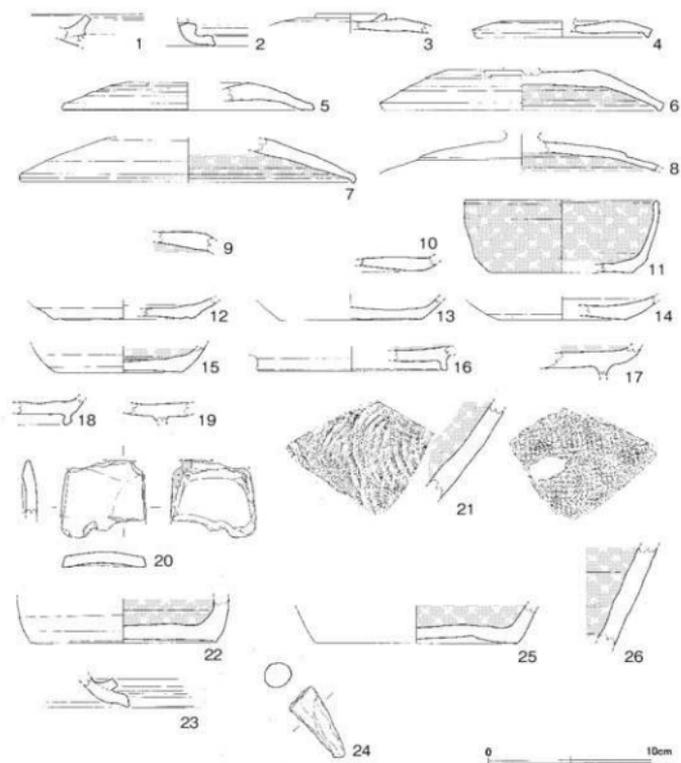
宮の後A区 (第71図1～22) 1、2は圈脚円面硯である。1は堤部、2は脚端部である。2には透かしの一部が残存している。3～9は須惠器坏蓋を転用硯として使用したものである。いずれも内面が摩耗しており、内面を硯面として使用している。6～9は墨痕も観察される。10～15は須惠器坏を転用硯として使用したものである。10、12～15は内面が摩耗し、内面を硯面として使用している。11は、摩耗は観察されないが、内外面に墨痕が残る。特に、底部外面に墨痕が濃く観察される。16～19は高台付坏もしくは高台付皿を転用硯として使用したものである。16、17、19は体部内面が硯面として使用されているが、18は高台の内側に墨痕が観察される。20は、器種不明の須惠器を再加工し、転用硯としたものと考えられる。両側面は、面取りされている。硯面は全体的に摩耗しており、墨痕が残る。21は甕の体部を転用した猿面硯の一部である。甕の内面部分が摩耗している。22は壺の底部で、内外面に墨痕が観察される。

宮の後B区 (第71図23～26) 23は圈脚円面硯の脚端部である。24は風字硯の脚部であると思われる。

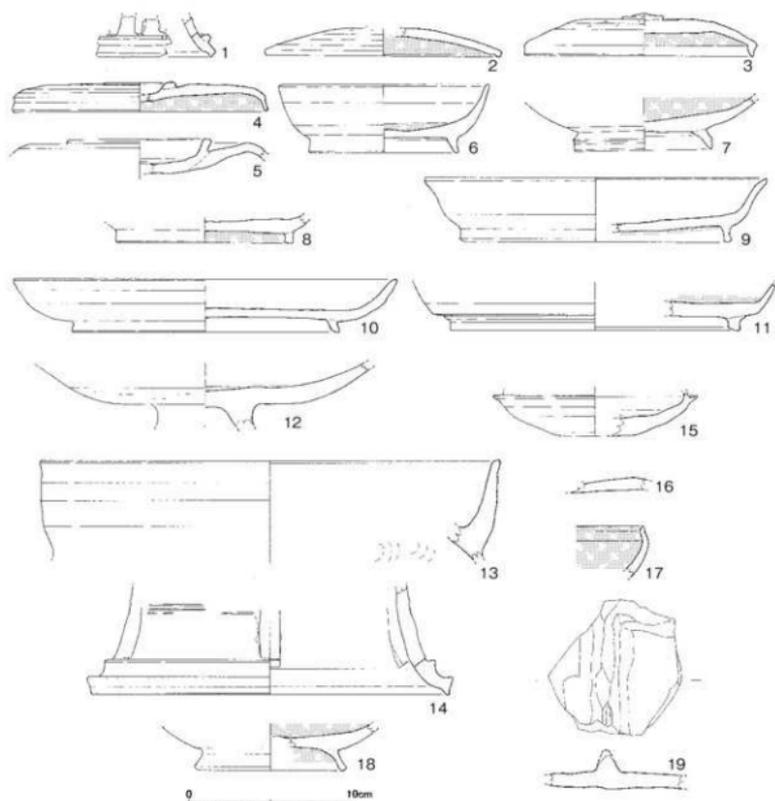
25は壺の底部で、内外面に墨痕および摩耗が観察される。26は壺の体部を転用硯として使用したものである。内面に墨痕が観察される。

宮の後C区（第72図1～12） 1は、圈脚円面硯の脚部である。幅6mm程度の長方形透かしが施され、その下には一条の突帯が巡る。2～5は須恵器坏蓋を転用硯として使用したものである。いずれも内面に墨痕と摩耗が観察される。6～8は、須恵器高台付坏を転用したものである。6、7は坏部内面に墨痕、摩耗が観察される。7の高台は、八の字状にひろがり、端部を下垂させる特徴的な形態を呈する。7は坏部内面に赤色顔料が付着している。高台内面および底部外面に墨痕と摩滅が観察される。9～11は須恵器高台付皿を転用したものである。9は高台内面および底部外面に墨痕が観察される。10、11は皿部内面に墨痕が観察される。12は高坏の坏部を転用したものである。内面に墨痕と摩耗が観察される。

地区不明（第72図13～18） 13、14は圈脚円面硯である。13は、高い外堤と深い海を持つ形態の円面硯である。陸から脚部にかけての内面に同心円タタキが観察される。14は脚部である。脚部上部



第71図 宮の後A・B区出土硯実測図（S=1:3）



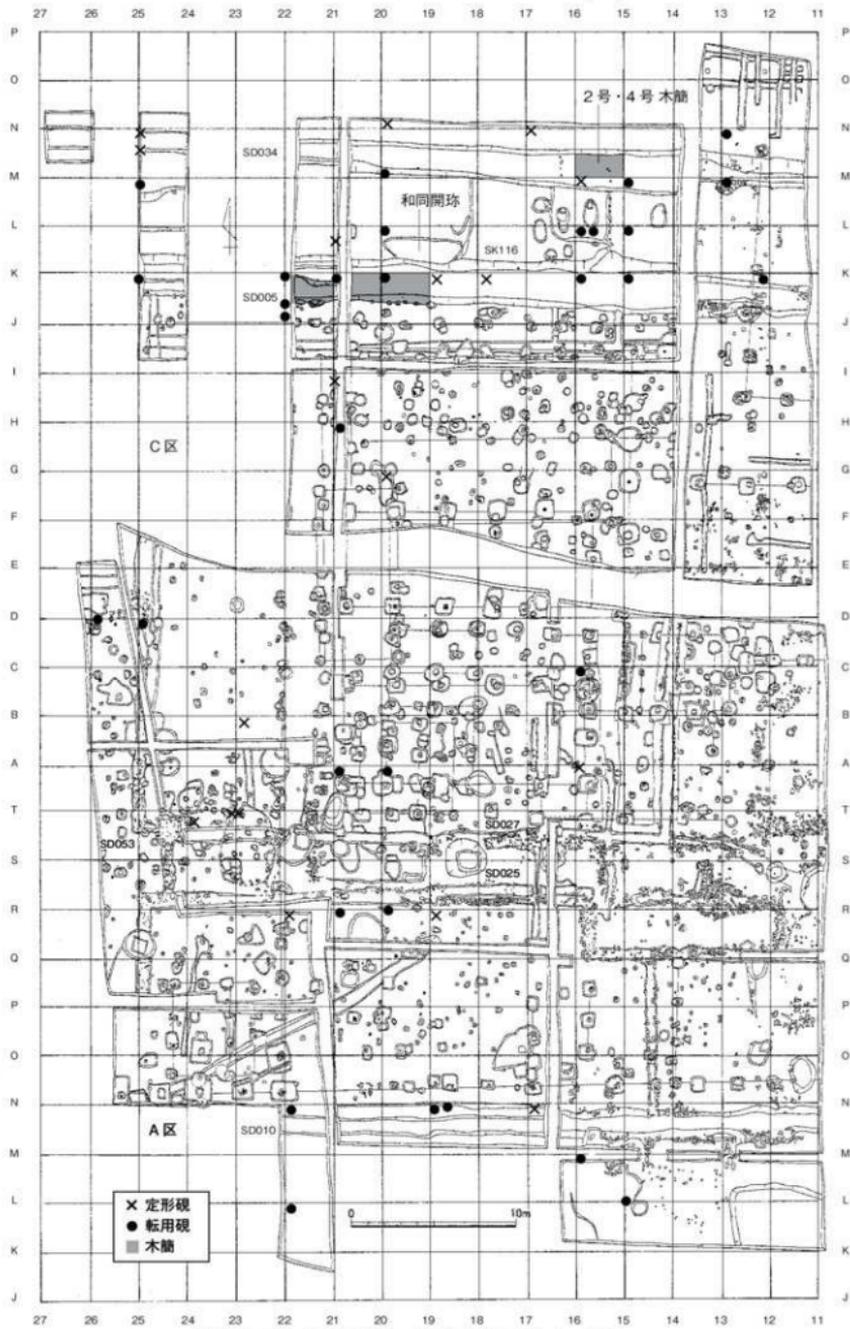
第72図 宮の後C区・地区不明出土及び1981年採集硯実測図 (S=1:3)

には三条の沈線がめぐり、その下に長方形の透かしが施される。端部には一条の突帯が貼り付けられる。15は須恵器坏身を転用硯として使用したものである。内外面に墨痕が観察される。16は須恵器坏蓋を転用したものである。内面に墨痕、摩耗が観察される。17は須恵器坏で、内面に墨痕が観察される。18は須恵器高台付坏で、坏部内面および高台内面に墨痕が観察される。坏部内面には摩耗もみられる。

1981年採集資料(第72図19) 1981年に大舎原地区南端を走る水路工事にともない採集されたものである。風字硯で、硯面と硯面を仕切る堤が残存している。(中野、間野)

(3) 墨書土器・刻書土器(第74図)

1～5は墨書土器である。出土地区は1～3が宮の後A区、4と5はC区である。1は須恵器蓋で内面に「私部」と墨書がある。頂部に輪状のつまみが付く。2と3は須恵器坏身である。墨書は2と4が底部外面、3は体部内面にある。いずれも文字は判読できない。5は宝珠状つまみが付く須恵器坏蓋である。墨書は内面に「和志」とある。6は宮の後C区から出土したスタンプ文のある土



第73図 硯および和同開珎・木簡出土地点 (S=1:300)